

501
170



始



36 1.23

501-170



W. Collins
The woman in white

譯苗早中田

白
衣
の
女

卷下

京 東
社 水 白

大正
10 11.14
内交



白衣の女 (下巻) (運命の巻) 目次

仆れるまで 二

一、きぬすれ 二

二、聖樂 二

三、密談 二

四、發病 四二

五、あとがき 四四

憫亂のたね 四七

一、煩累の朝 四七

二、黴菌を背負つた男 五七

弱き力 六八

一、戸村ドクトル 六八

二、悲しい變化 七八

三、解雇	八六
四、残された敷き	九二
五、わかれ	一〇三
六、偽 喘	一〇七
七、狂氣のごとく	一一六
運命の鍵	一一二
一、不幸な客	一一二
二、死亡診断書	一一三
三、吳田仙子の陳述	一一四
四、墓 銘	一一四
五、舊山河	一一五
南 船 北 馬	一一五
一、日かけ者	一四三
二、逃走	一四六

三、迷 宮	一五六
四、かくれ家	一六三
五、大難關	一七三
六、いやな手紙	一八四
七、男爵の父	一九二
八、誘 拐	二〇〇
九、浮き名	二〇七
一〇、廢墟のやうな町	二二五
一一、他の目的	二三四
一二、舊い教會堂	二四五
一三、記録の原簿	二五七
一四、焦熱地獄	二六四
一五、焼けあと	二七五
知られぬ秘密	二八〇

一、彼とわたし……………二八〇
 二、彼とむすめ……………二八六

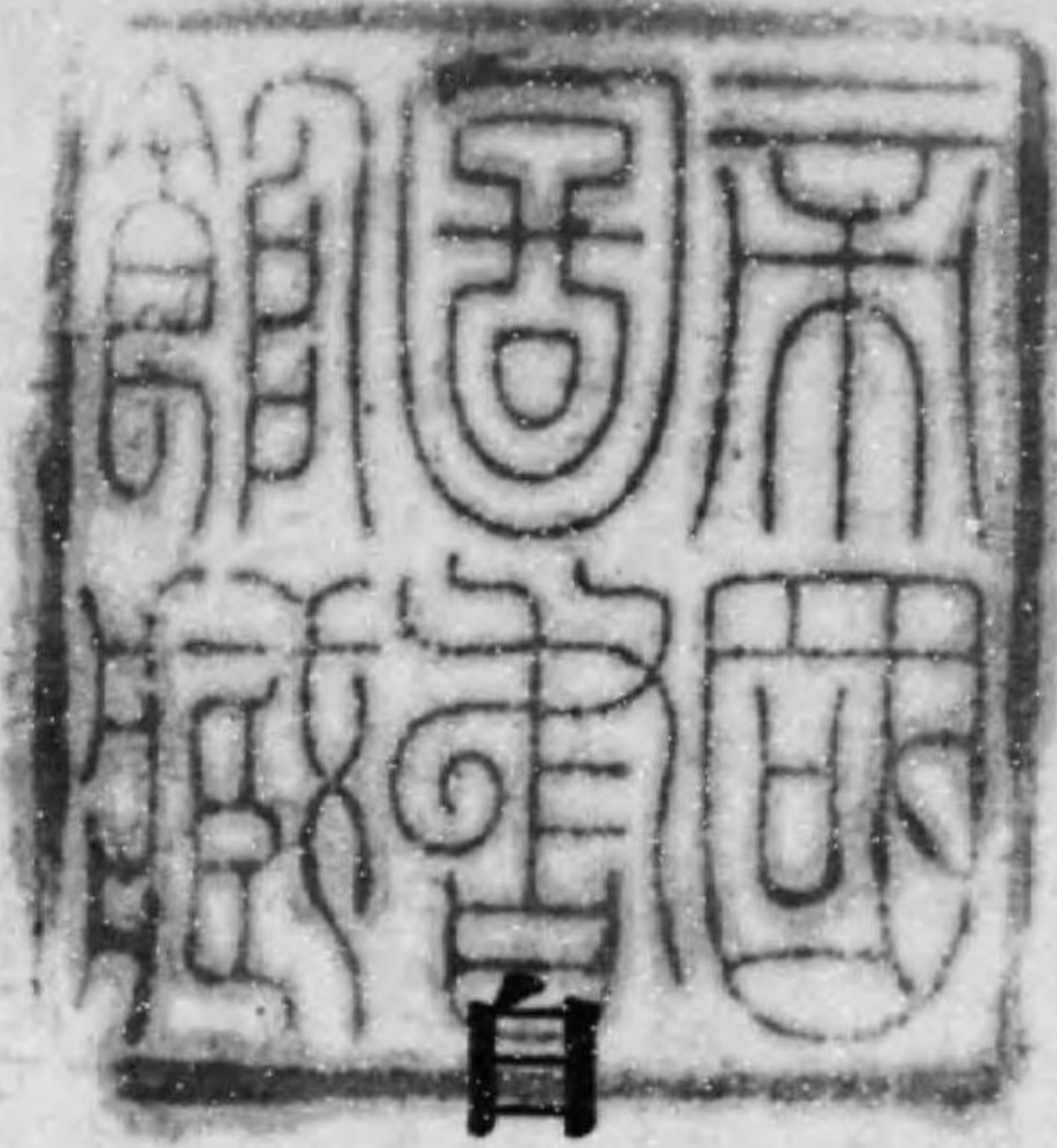
肉

迫

一、不時の訪問……………二九五
 二、父の罪……………三〇四
 三、結婚……………三一
 四、尾行……………三一八
 五、オペラの見物……………三二六
 六、決心……………三三七
 七、生死の境……………三四五
 八、逃ぐる敵……………三五五
 はかりごと……………三六七
 歎 喜……………三七七

一、よみがへり……………三七七
 二、セーヌの岸……………三八六
 三、心のふるさと……………三九三

白衣の女(下)(運命の巻)目次終



衣の女
(運命の巻)



仆れるるまで (春越鞠子の日記)

一、きぬすれ

一月十九日(黒水荘にて)——わたしは美智子の寢部屋を出ると間もなく、鍵のかゝる音を廊下で聞いて、ほつと安心した。あゝしておけば、彼室へはもう誰も入る氣づかひがない。

「あすこはあれでいゝが、もしかわたしの部屋に人が入つたらどうしよう。」

ふと、さう思ひついて、わたしは自分の部屋へ行つてみた。誰も留守の間に入つた形跡がない。

そこには、大切な日記や、書簡紙や、その他の書きものがある。もつともそれらは、卓子の抽斗にしまつてあるから大丈夫だけれど、二羽の鳩が一つの杯から水を飲んでゐる形を彫刻したわたしの封印や、吸取り紙や、ペンなどの文房具は、卓子の上におかれてある。わたしはかういふ細かいことに至つて無頓着で、しかも卓子だけは、女中が部屋を掃除するときにも手をつけてはならないと云ひつけてあるので、わたしの卓子の上はいつも亂雑になつてゐる。

ところが、今日にかぎつて、封印が、鉛筆や封蠟と一しよにきちんと並んでゐるのが、ちよつと變だ。

150

人がさうしたのか、それともわたしがそのときの氣分でこんな風に片づけておいたのであつたのか、それは思ひだせない。

「これから他へ行くときは自分の部屋にも錠をかけておくことにしよう。」

さう決心して、わたしは取りあへず戸に錠をかけて、鍵を衣簍にしまつた。それから階下へ降りていつた。

客間には伯爵夫人がたつた一人で、天氣窓を眺めてゐた。

「まだ降つてゐますね。この雨はもつとつゞくでせうよ。」

夫人はこんなことをいつた。先刻あんなに憤つて階下へ來た女だけれど、今は常の表情、常の顔色にかへつてゐる。しかし天氣窓を指した手はまだ少しふるへてゐる。

かの女は、美智子が伯爵のことを「間諜」だと罵倒したあの一言を伯爵に告げてしまつたであらうか。もう告げてしまつたに違ひない。わたしは女同士だけにわかる微細な觀察で、早くもそれを覺つた。夫人は、自分の姪の美智子に對して表面は禮儀正しく交際してゐるとしても、内心では、たとひ美智子に罪がないとしても、知らず識らずの間に自分が貰ふ筈の十萬圓といふ遺産の邪魔物になつてゐる美智子を怨んでゐるにちがひない。すでに怨んでゐるとすれば、こんな場合に、美智子の云つた

悪口を伯爵に告げるといふことは分りきつたことである。

だが、無駄と知りつゝも、わたしは美智子のために調停しないわけには行かない。

「奥さま、失禮ですけれど、わたしほんとうに心苦しい問題で、ちよつとあなたにお訊ねしてもよろしいでせうか。」

かの女は、胸に腕を組んで、いかめしく頭を下げた。黙つて、わたしの顔を見つめた。

「先刻、御親切にわたしのハンケチをお届け下さつたときに、たま〜美智子さんが何か云つてゐたことが、多分あなたのお耳に入つたでせう。けれども、それは、伯爵さまへ仰しやるほど重大なことではないといふ風にお考へ下さることはできないでせうか。」

「わたしは、あれが何も重大なことだとはおもひません。」と禮子夫人は、いかつく、吐きだすやうに云つた。そして急に冷淡な態度になつて、「けれども、わたしは、どんな小さなことでも、伯爵へ内しよにしておくといふことはいたしません。先刻もわたしが二階から降りて来ますと、伯爵はすぐわたしを顔を見て、なぜそのやうに心配さうな顔をしてゐるかと思はれましたから、わたしは心配の種を云はないわけには行きませんでした。ですから鞠子さん、わたしは正直にお答へしますが、あのことは皆んな伯爵に云つてしまひましたよ。」

わたしは、もとよりさういふ答へを待ちまうけてゐた。けれどもかの女は、それを云つてしまつたときに、冷たくわたしから顔をそむけた。それはあんまりだとおもつた。

「奥さま、わたしは眞心からあなたにお願ひします——伯爵さまにも仰しやつて下さい——どうぞわたしの義妹をお許し下さいませ。あの女は良人から残酷な取扱ひをうけて気が立つてゐたときに、あんなことを申したので、まつたく我れにもないことを口走りました。どうぞ特別の思召しで、お許し下さいませ。」

「そんなに仰しやらんでもいゝです。」と、だしぬけに背後で伯爵の聲がした。伯爵は本を手にしたまま、圖書室の方から聲もなくそつと忍んで来たのであつた。

「此邸の奥さまは、私に對して實に不當なことを云はれたもので、私も當惑してゐます。だが、お許しします。鞠子さん、こんな問題はさらりと水に流しませう。さうしてもと〜どほりに御親しく願ひたいです。」

「ありがたうございます。何とお禮を申していゝかわかりません……」

まだ何か云はうとしたけれど、伯爵の視線がわたしに注がれた。この人の廣いすべ〜した顔に浮んだ冷たい微笑は、堅い決心をあらはしてゐた。あらゆるものがその微笑にかくれてゐた。

「鞠子さん、もう何も仰しやるな。そんなに云はれると却つて恐縮します。」

伯爵はわたしの手を執つた。そして毒ある唇を押しつけた。わたしはこの時ほどおそろしく思つたことがない。男子から最上の侮辱をうけたやうにわたしの血は沸騰した。それなのに、わたしは自分の憎しみをおし隠して、強いて笑顔をつくつた。そのときのわたしは、今わたしの手に接吻した反逆者と同じやうに、ずるい女であつた。

いつまでも伯爵に手を執られて、顔を見つめられてゐたら、わたしの隠れた憎しみはとても我慢がでなかつたでせう。だが、禮子夫人の虎のやうな嫉妬がわたしを助けてくれた。かの女の冷たい碧眼はぎら／＼して来て、無氣力な蒼白い頬に血がのぼつた。突に四つ五つも若返つたやうになつた。

「伯爵！ あなたの外國流の禮儀なんか、英吉利の婦人には通じませんよ。」
と夫人はたしなめた。

「ゆるしておくれ、私の天使！ しかし一番善良で、一番があいらしい英吉利の御婦人であるお前には、これがわかる筈だ。」

さういつて伯爵は、わたしの手を放して、今度は妻の手を執つて、唇にもつていつた。

わたしは二階の自分の部屋へ逃げだした。そこで靜かに考へてみたかつた。けれども、もうそんな

ことを考へてゐる時間がない。

美智子のために狀師の輕井さんと、笛森の叔父さまへ手紙を書かなければならなかつた。わたしはすぐに卓子に向つて書きはじめた。

やがて、二通の手紙を書き終へて、封印を施してから、わたしはそれを持って美智子の寢部屋へ行つた。

「あれから誰も此室へ來なかつたの？」

「え、叩した人はないけれど、誰か戸口のところへ來たやうでした。」

「それは男？ 女？」

「女よ。衣すれの音が聞えたから。」

「それは絹のやうな音？」

「え、絹のやうでした。」

禮子夫人が偵察に來たのにちがひない。あの女が一人でそんなことをやり出すやうになつては、油断ができない。もし伯爵の命令で來たものとすれば、一さうおそろしい。

「それで、その衣すれの音は控への間から何方へ行きました？」

「鞠さん、あなたの部屋の方へ。」

わたしはまた考へた。わたしの部屋の方へ来たといふけれど、わたしはつひそんな音は聞かなかつた。もつとも、わたしは餘念もなく手紙を書いてゐた。わたしはペンに力を入れて書くのがくせで、紙を走しるペンの音のために、他の物音が聞きとれなかつたのであらう。それほどだから、きつと禮子夫人はわたしのペンの音を聞いたにちがひない。かうなれば、此邸の郵便袋へは、手紙を入れたくても入れられない。

美智子は、わたしの考へこんであるのを見て、

「またむづかしいことが起りましたか？ それとも、危険なことでも？」
と心配さうに云つた。

「何も危険はないのよ。」とわたしは答へた。

「だが、少し難しくなりましたね。どうしたらこの二通の手紙を安全に春やの手に渡せるでせう。」

「いよ／＼手紙を書いたのですね、鞠さん。大丈夫？ お願ひですから、冒険はやめて頂戴。」

「いえ、いえ、恐れてはいけません。サア、今は何時でせう。」

それは、六時十五分前であつた。今から村の宿屋へ行けば、晚餐までには歸つて來られる。晩にな

れば、二度と外出する機會は得られない。

「それでは、わたしちよつと行つて來ますからね、此戸はやつぱり鍵をかけてお置きなさい。そして、わたしのことは心配しないで下さい。誰が來ても此戸を開けてはいけませんよ。わたしのことを訊かれたら、散歩に行つたといつて下さい。」

「すぐに歸つてね、鞠さん。」

「晚餐前に間違ひなく歸ります。勇氣をお出しなさい。この手紙は、明日の今頃までに、あの頭腦のいゝ確かりした輕井さんの手に届きます。輕井さんはあなたのために、きつと好い方法を考へてくれます。あの人は岩藻さんと同じやうに、わたし達の親友ですからね。」

わたしはわざと散歩服に著かへないで、平生のまゝで出かけることにした。

伯爵は圖書室にゐた。そこにはカナリヤの鳴き聲が聞えてゐた。戸の開き間から煙草のけむりが見えた。わたしは其室の前を通るときに、ちらと覗いてみると、不思議なことには、伯爵がカナリヤ馴らしの藝當を、大へん親切な仕方女中頭に見せてゐた。伯爵はそれを見せるために、特にこの女を招びこんだのであらう。なぜならば、この女は只の一度も自分から進んで圖書室などへ入つたことはないのだから。伯爵はどんな鎖細な行動にも何かしら目的をもつてゐる。さて、女中頭を此室へ招び

こんな目的は何であらう。

わたしは今、そんなことを考へてゐる暇がない。わたしは次に、禮子夫人が何をしてゐるかを見届けなければならぬ。夫人は例の氣に入りな、前庭の池のあたりをぶらついてゐた。

「男爵はどうなすつたか、あなた御存知ありませんか。」

と、わたしは問ひをかけてみた。

「外出されたやうです。」

「どの馬を馬車につけて？」

「いゝえ、今日は馬車ではありません。歩いておいでになりました。二時間ほど前です。わたしの考へでは、男爵はあの加奈子とかいふ女のこと、何か搜索に出かけたのではないでせうか。男爵はあの女の搜索で夢中ですよ。加奈子つていふ女はそんなに危険な狂女でせうか、鞠子さん。」

「わたし些とも存じません、奥さま。」

「あなた、これからお歸り？」

「はい、歸らうとしてゐるところです。もう直きに晚餐の著がへをする時間でせう。」

わたし達は一しよに家のなかへ入つた。夫人は圖書室へ入つて徐かに戸をしめた。わたしは大急ぎ

で自分の部屋へ行つて、帽子とシヨールを持ちだした。これから宿屋へ行つて、晚餐前に歸つて來なければならぬ。一分の時間も大切にやつて來た。

今は誰も見てゐる者がない。わたしは素早く外へ出た。

二、聖 樂

わたしは息もつかないほど急いで、村の方へ折れまがる四つ辻のところまで行つた。とき／＼背後を振りかへつたけれど、誰も蹠いて來る者はなかつた。

空つほの荷馬車が一臺うしろから來た。わたしはその車輪の音で脅やかされた。それは、わたしと同じやうに村の方へ行くのだと分つたときに、わたしはその音がうるさいから、路傍に立ちどまつて馬車の行き過ぎるのを待つた。よく注意して見ると、馭者の外に、もう一人馬車の背後について來る人があるやうに思つた。馭者は馬の傍について歩いてゐた。

馬事が通りすぎるときに、一層よく注意して見たが、馭者の外には誰もゐなかつた。前に馬車の背後へついて來る人があると思つたのは、わたしの眼がわるかつたのであらう。

途中は男爵にも出會はないし、別に怪しいものも認めないで、無事に村の宿屋へついた。宿の主婦

さんが春やを大へん親切にしてくれてゐるのを見て、わたしは嬉しくおもつた。春やは小ぢんまりとした居間と、清潔な寢部屋を占領してゐた。そこは家の一番上の部分で、入口から遠いから、静かでごた／＼した物音なども聞えなかつた。

かの女はわたしを見ると、また泣きだした。何か非常な不都合を仕出來して追ひ出された女でもあるかのやうに。

「何も心配することはないよ、春や。お前も奥さまやわたしがついてゐるのだから安心しておいで。サアわたしの云ふことをよろしくお聞き。わたしは今、お前に大切な用事をお頼みします。それは外でもない、この二通の手紙ですがね、この一通は、お前が明日倫敦の停車場へ着いたら、すぐに郵便函へ入れておくれ。それから、もう一通は、龍若莊へ着いてから、笛森の旦那さまに、他手を借らないでお前が手づからお渡しするのですよ。この二通の手紙はお前がしつかり藏つておいて、決して他手に渡してはいけません。お前の奥さまの一身にかゝる大切な手紙ですからね。」

春やは二通の手紙をば、肌身につけるやうにして、衣物の奥の方へ入れた。

「かうしておけば大丈夫でございます。わたしは間違ひなく、仰しやつたとほりにいたします。」

「明日の朝は時間前に停車場へ行くんですよ。汽車に乗りおくれないうやうにね。そして龍若莊で女中

頭に會つたら、わたしからもよろしく云つて下さい。お前の奥さまがお前を呼びかへすまでは、お前はわたしのために働かなければならないといふことも云つておいて下さい。わたし達は案外早くまた會へるでせう。それでは氣をつけてね、七時の汽車に乗りおくれないうやうに下さい。」

「ありがたうございます鞠子さま、ありがたうございます。また早くお目にかゝりたうございます。どうぞ、奥さまにもよろしく仰しやつて下さい。あゝ、今日の晩餐のときに、奥さまのお着替へは誰がしてあげるでせう。そんなことをおもへば、わたしは胸が張り裂けるやうでございます。」

村の宿屋から黒水莊へ歸つたときは、晩餐まで十五分しかなかつた。わたしはその間に著替へをして、階下へ降りる前にちよつと美智子に會ひに行つた。

「手紙は二通と、春やに渡しましたよ。」とわたしは戸口のところで、そつとさゝやいた。

「あなたも食堂へ出ていらつしやう。」

「いゝえ、わたし階下へ行くのは厭です。」

「わたしがゐない間に何か事件でもありましたか？ 誰か此室へ來ましたか？」

「えゝ、たつた今、男爵が……。」

「室内へ入つて？」

「いゝえ、男爵は戸をどん／＼叩いて、わたしを呼び出して、

「美智子、お前は考へなほしたか。あとの秘密も白状する氣になつたか。晩かれ早かれ、私はきつとお前から聞き出さなければならぬ。そしてお前は加奈子の居所を知つてゐるだらう。」

「わたし、そんなことは些とも存じません。」

「いや、お前は知つてゐるに違ひない。私はお前の強情我慢を打ち砕いてやる。覺えて居れ、きつと云はせて見せる。」

こんなことを云つて、どん／＼階下へ行つてしまひました。それは、五分ほど前です。」

男爵はまだ加奈子の居所を突止めてゐない。わたし達は今夜も安全である。

「鞠さん、あなた今から階下へいらつしやるでせう。晩にはまた此室へ来て頂戴。」

「きつと來ますから、安心してゐらつしやい。少し遅くなるかも知れませんが。あまり早く引きあげると、あの人達の氣をわるくしますからね。」

晩餐の鈴が鳴つた。わたしは急いで階下へ降りた。

食堂へ入るとき、男爵は禮子夫人と腕を組んだ。伯爵はわたしに腕を借し。晩餐のときは、かならず整然と著替へておしやれをして食堂へ來る伯爵は、今日に限つて略服のまゝである。そして、上

氣して、顔が赤くなつてゐる。この人は晩餐前に外出して、遅く歸つたために著替へる暇がなかつたのか。それとも今日は殊更暑さに惱んでゐたのか。

やがて晩餐が済むと、禮子夫人とわたしがまづ食卓を離れた。伯爵もわたし達の後について客間に出ようとすると、

「帆船君、君は其方へ行くのはまだ早いではないか。」
と男爵が呼びとめた。

「私は御馳走も酒も十分に頂戴したから退出するのだ。」と伯爵は答へた。「婦人と一しよに食堂へ入つて婦人と一しよに客間へ行くといふ私の外國風の習慣を許してくれたまへ。」

「何を云つてるのだ。葡萄酒をもう一杯飲んだつて君の健康にさはりはしないよ。英國流にもう一度坐りたまへ。私は飲みながら君に談したいことがある。」

「談しなら喜んで聽くけれど、飲みながらは可けない。後でゆつくり聽かう、ね、後でゆつくり。」

「御叮嚀なことだ。」と男爵は毒々しくいつた。「此邸の主人である私に對して實に御叮嚀なことだ。」

伯爵は頑固に、わたし達について、客間へ、お茶の卓子へ來た。彼はふと廊下へ行つて郵便袋を携つて來た。それは丁度八時で、集配人が郵便物を集めに來る時刻であつた。

「鞠子さん、お出しになるお手紙があるなら、序でお入れなさい。」

伯爵はさういひながら、郵便袋を携つてわたしの傍へ来た。

茶を入れてゐた禮子夫人は、砂糖箸の手をちよつと休めて、わたしの答へに注意する様子であつた。

「いえ、ありがたう。今日はありません。」

伯爵はわたしの答へを聞くと、すぐに郵便袋を女中にわたした。女中は丁度そのとき客間にゐて、ピアノに坐つて、あの輕快なナボリの俗謡「ラ・ミア・カロリナ」を弾いてゐたのであつた。

いつも悠長な禮子夫人は、今晚に限つて、わたしがやつても及ばぬくらゐに手早く茶を入れて、自分の茶碗は、二分間にお代りまで飲んでしまつた。そして、徐かに客間から抜けて行つた。

わたしも直ぐに立ちあがつた——それは、禮子夫人が二階へ行つて、美智子に對して何か奸企むのではないかといふ疑ひがあつたのと、わたしは伯爵とたつた二人で客間に残るのが厭であつたから。

「鞠子さん、恐縮ですが、私にお茶を一杯入れて下さらんか。」

伯爵はさういつて、わたしを引きとめた。わたしは仕様事なしに、茶を入れて伯爵にすゝめた。そして立ちかけると、

「まだ早いですよ。私はこれから伊太利の音楽を弾きませう。これは私の生國の誇りですから、ぜひ

あなたに聴いていただきたい。」

「わたしは音楽はまるつきり解らないんですから……」

けれども、伯爵はなかくわたしを離さうとしない。

「いつたい英吉利人と獨逸人（彼はいかにも下すんだ調子でいつた）は、われ／＼伊太利人の樂才を輕蔑してゐたものです。しかるに、われ／＼伊太利人は、丁度英吉利人や獨逸人が自分達の國の交響樂を尊重するやうに、われ／＼の國の聖樂を誇りとしてゐます。殊にロツシニイのときは稀なる天才です。ロツシニイの作曲した「モーゼ」などは、雄大な聖樂でなくて何でせう。「ギイローム・テル」の序曲などは、絶妙の交響樂です。ロツシニイの作曲は澤山ありますが、およそ人間の手であれば雄大な、あれほど神聖な曲をつくり出した者は他にあらでせうか。」

伯爵は立てつゞけに、かう云つて、わたしの答へをも待たずに、いきなりピアノに坐つた。彼はいそがしく鍵盤を叩きながら、熱心に大きな聲でうたいだした。曲の變り目へ來ると、

「これは「モーゼ」のうちの「埃及人のコーラス」ですよ、鞠子さん。」

とか、

「次はモーゼの吟誦です……今度はイスラエル人の祈禱……それより紅海の渡渉……何うです、神聖

でせう。雄大でせう。」

こんな風に説明を挿みながら、殆んど夢中になつて弾き且つうたつた。ピアノは彼の力強い手の下で震動した。茶碗は卓の上で小躍りした。さうして彼の大きなメスの聲は室内をふるはせた。

「どうしたのだ、この地獄のやうな騒ぎは……」

男爵が、食堂へ通する戸を開けて、憤つた聲で呼びかけた。

伯爵はすぐにピアノから立ちあがつた。

「満春君が来ちやもう駄目です。ハーモニーもメロデーもおしまひです。ね、鞠子さん、ミュージックの神も顔をそむけますよ。ですから、この肥つた年寄りの俗人は、熱情の残りを室外の大氣へ發散させませう。」

伯爵は嘆息して、廻廊へ出た。そして衣嚢に兩手を突こんで、例の「モーゼの吟誦」を低音調でくりかへした。

わたしは、男爵が食堂の窓から伯爵を呼んでゐる聲を聞いた。だが、伯爵は取合はなかつた。彼は友の誘ひに全く耳を借さない決心をしたらしい。かうして二人の男の内證はなはまた延ばされた。伯爵の都合のよいときまで延ばされるのであらう。

禮子夫人が客間を抜けていつてから、わたしは伯爵の巧い手段で半時間ほどそこに釣られてゐた。その間、夫人は何處で何をしてゐたのでせう。

わたしはそれを探らうとおもつて、二階へ行つた。だが、何も發見することができなかつた。美智子に訊いたけれど、美智子も今度は何の物音も聞かなかつたといふ。美智子の寢部屋へは、誰も來なかつた。廊下にも控への間にも、衣ずれの音を聞かなかつた。

それは、九時二十分前であつた。わたしは床に入る前に、自分の部屋から日記を持ってきて、美智子の傍でそれを書いた。とき／＼手を休めて談したりした。その間、誰も來なかつた。何事も起らなかつた。やがて時計が十時を報じたので、わたしは最後の慰めの言葉をいつて、明日の朝を約して美智子とわかれた。わたしが去つたあとで、かの女は前のやうに、戸に鍵をかけた。寝る前の出來事を、こゝにもう少し書き加へなければならぬ。

わたしは美智子の寢部屋を出てから、もう一度階下の客間へ行つてみた。

そこには、男爵と伯爵夫婦が描つてゐた。男爵は安樂椅子であくびをしてゐた。伯爵は本を讀んでゐた。禮子夫人はしきりに扇子をつかつてゐた。不思議なことには、いつも蒼白い夫人の顔が、赤くほてつてゐた。この女はつひぞ暑さに憊んだことがないのに、今夜はよほど苦しさうであつた。

「奥さま、あなた、何處かおわるいではありませんか。」
と、わたしがたづねた。

「わたしはまた、あなたにそれをお訊ねしようとおもつてゐたところです。」と夫人が答へた。「あなたこそ顔色が蒼白いんですよ、可愛い鞠子さん。」

可愛い、鞠子さん！ この女からこんな親しみのある呼び方は初めて聞いた。けれども、それを云つたときの夫人の顔には、横柄な微笑がうかんでゐた。

「頭痛がしてこまります。」

と、わたしも冷たく答へた。

「あゝ、さうでせう。運動が足りないんですね。あなたのやうな女は、晩餐前に散歩をなさると、きつといふんですよ。」

かの女は「散歩」といふ言葉に怪しく力を入れた。先刻わたしが外出したのを見たのであらうか。見られたつて構ふことはない。手紙は春やの手に安全に渡してしまつたのだもの。

「帆船君、彼方へ行つて煙草を喫まうぢやないか。」

と、男爵は不安さうに友の顔を見て、また催促した。

「よからう。しかし、婦人達が寝られてからでもいゝよ。」

と、伯爵は落つき拂つてゐた。

「奥さま、わたしは御免を蒙つて、お先きに退ります。このやうに頭痛のするときは、寝むのが何よりでございますから。」

さう云つて、わたしは禮子夫人と握手をした。横柄な微笑がまたかの女の顔にうかんだ。男爵はわたしの去ることに知らぬ顔をしてゐた。彼は、伯爵夫人がいつまでも腰を据えてゐるのをもどかしく思つてゐる様子であつた。伯爵は本のかげで、にやりと微笑つた。二人の男の内證はなほ又延ばされた。今夜は伯爵夫人があくまでも邪魔になるのであつた。

三、密談

わたしは客間から二階の自分の部屋、即ち居間へ歸つて、また日記を開いた。今日の事件はこれで盡きたのではない。

十分間もそれ以上も、筆を持つたまま、ぼんやり座つてゐた。今日の正午からの出来事を思ひかへした。どうしても日記を書きつゞける氣分になれないので、一先づ筆を擱いた。

わたしの居間は、隣りが寝部屋になつてゐる。こんな晩に急に風が吹きこんで燈火が消えると氣味
がわるいとおもつたので、わたしは間の戸口から寝部屋へ行つて、卓子のうへに蠟燭を點した。さう
しておいて、又居間へかへつて來た。

居間の窓は開け放してあつたので、わたしは窓側に立つて、外を眺めた。外は眞暗で静かであつた。
空には月も星もない。静寂な、重々しい闇のなかで雨が降つてゐるやうな氣がした。わたしは窓から
手を出してみたが、まだ降りだしたのではなかつた。

ふと、煙草のけむりの匂ひが、重い夜氣に乗つて、かすかにわたしの鼻へ來た。と、次の瞬間に、
わたしは、極く小さな一點の火が、眞の闇の庭のなかで、丁度家の端れの方から近づいて來るのを見
た。聲音も聞えない。火光の外は、眞暗で何物も見えない。火光はわたしの窓の下を通りすぎて、寝
部屋の下のところまで、暫くじつと立ちどまつてゐたが、やがて元の方角へ引かへして行つた。すると、
向ふからも、今度は前のよりも稍々大きい一點の火光が現はれた。二つの火光は、だん／＼接近して、
しまひに並んで立ちどまつた。巻煙草の主は伯爵で、葉巻の主は男爵であるといふことを、わたしは
すぐに覺つた。

「どうした？ 何故室内へ入らない？」

それは小聲だけれど、たしかに男爵の聲にちがひない。

「あすこの窓の燈火を偵察に行つたのだ。」

それは伯爵の聲である。

「燈火なんか何うだつて可いちやないか。」

「いや、かの女はまだ寢床に入つてゐない。かの女は實に敏感で、嗅ぎだすのが早いからね。そして
大膽で、どうかすると、階下へ立ち聞きに降りて來ないとも限らん。もう少しの辛棒だ、満春君、も
う少しだ。」

「馬鹿な！ 辛棒は君の口ぐせだ。」

「満春君、私は君に緊急な注意がある。それは外でもない、君は今危ない斷崖の上に立つてゐるよ。
そして、君がもう一つの機會を女だちに與へると、女だちは君を斷崖から突き落すだらう。」

「それはまた何ういふ意味か？」

「待ちたまへ、あの窓の燈火が消えてから、そして圖書室の兩隣りの部屋を偵察した上で、ゆつくり
話さう。」

それつきり聲が杜絶えて、二點の火光は彼方へ遠ざかつて、闇のなかに消えた。

伯爵が圖書室の隣りの部屋を偵察すると云つたのを見ると、二人の密談はきつと圖書室で行はれるにちがひない。どんなことがあつても、わたしはその密談を聴かなければならない。わたしはその立ち聞きの計畫で夢中になつた。

階下の部屋々々には皆廻廊が突き出てゐる。そして、廻廊の上は平屋根になつてゐる。その平屋根は二階の部屋の窓から三尺ほど下のところにあつて、ところ／＼に大きな草花の鉢が置いてある。わたしは、まづ自分の居間と寢部屋に鍵をかけた。寢部屋の蠟燭を吹き消した。それから、居間の窓からそつと平屋根へ降りた。わたしの部屋は新築した翼の一番手前になつてゐるので、圖書室の上まで行くのには、五つの部屋の窓の前を通らなければならない。第一は、今使つてゐないので、空室になつてゐる。第二と第三は美智子の部屋、第四は男爵の居間、第五は伯爵夫人の部屋で、それが丁度圖書室の上になつてゐる。そのさきは、伯爵の衣替部屋だの、浴室だの、空室だのがつゞいてゐる。わたしは猫のやうな忍び足で、圖書室の廻廊の上まで辿りついた。そして草花の鉢の間に跪坐んで、平屋根の欄干につかまつた。何の物音も聞えない。一寸先きも見えない眞の間だ。右手の鉢の好い匂ひの草花がわたしの頬にさわつた。

やがて、部屋々々の戸を開け閉てする音が聞えた。伯爵が見廻つてゐるのであらう。それから、例

の一點の火光が、圖書室の廻廊から出て、わたしの窓の下のあたりで暫く立ちとまつたかと思ふと、また戻つてもとのところへ入つて行つた。

「われ／＼の仕事は頗る危なくなつて来たよ、満春君。それで、今夜は何も彼も決定してしまはねばならん。」

小さな聲が、わたしの隠れてゐるすぐ下のところから聞えて来る。二人の男はいつもの習慣どほりに、廻廊に椅子を並べてゐるらしい。

「危ないとも！ 君の想像してゐるよりも遙かに大きな危険が迫つてゐるのだ。それはたしかだ。」
といつたのは、男爵の聲である。

「さうだらう。昨日から今日にかけての君の行動を見ると、何しろ只事ではあるまい。」と伯爵は冷静にいつた。「だが、待ちたまへ。私の知らない問題を論ずる前に、まづ私の知つてゐる問題から片づけて行かう。今度の計畫を定める前に、まづこれまでの遣り方がよかつたかどうかを確かめる必要がある。」

「ちよつと待ちたまへ、ブランドーと水を持つてくるから、君も少し飲りたまへ。」
「ありがたう、満春君。私は冷たい水がいい。そして匙と砂糖をくれたまへ。砂糖水が一番だ。」

「その齡になつて砂糖水がいゝなんて、仕様のない男だ。君等外國人はみんな甘黨なんだね。」

「そんなことは何うでもいゝ。肝腎の話を始めよう。まづわれゝの立場について、私の見解を云つてみよう。私の見解が間違つてゐるか正しいか聴いてくれたまへ。ね、満春君。われゝ二人は大陸からこの邸へ歸つてきた。二人とも困りぬいた揚句に歸つてきた……」

「もつと簡単に！ つまり君は數萬圓の金が要る。私は數千圓の金が要る。その金がなければ、われわれは今にも零落する。それがわれゝの立場だ。さて、この難關を何うして切り抜けようとするのか？」

「唯一の方法は、君の奥さんの助けを借りて、君自身に必要な金をこしらへるといふことだ。もつとも、その中には私の數千圓といふ少しばかりの金も含んではゐるけれど。ところが、私が英國へ歸る途中で君に何と云つたか、君の奥さんについて私は何と云つたか。また此邸へ歸つてから、あの鞠子なる婦人について私は何と云つたか。君は記憶えてゐるだらう。」

「そんなことを私を知るものか。君はいつでも十で足りるところを百も饒舌つてゐる。」

「私は云つたではないか。男子が婦人を操縦する方法は二つしか發見されてゐない。即ち一つの操縦法は、女を撲り飛ばすことで、下等社會の野蠻な男達はこれを適用してゐる。しかし、苟くもリフ、

インされた、有識階級に屬する者は、こんな野蠻な方法を取つてはならん。そこで、もう一つの方法は、決して婦人の反抗に取り合はないことである。動物でも、子供でも、女でも、その操縦法は同じことだ。殊に女は、謂はゞ子供の生長したものに過ぎない。金の問題で奥さんを利用しようとするなら、よくこの道理を考へて貰ひたい。奥さんの前でもさうだが、鞠子さんの前では殊にさうだ。私はこのことを幾度君に忠告したか知れない。しかるに君は、奥さんや鞠子さんから反抗されると、すぐに癪癪を起した。君は癪癪のおかげで、奥さんの署名を棒に振つた。得られる筈の金も失つた。鞠子さんが法律顧問に第一回目の手紙を書いたのも、全く君の癪癪の結果だ。」

「第一回目だつて？ それぢや、あの女は第二回目の手紙も書いたのか？」

「さうだ。今日それを書いた。」
廻廊の床に椅子の仆れる音がした。丁度足で蹴飛ばしたやうな音だ。男爵のぶり／＼憤つてゐる様子が見えるやうだ。

「とにかく私に感謝しなさい。」と伯爵がいつた。「君は今日、奥さんを監禁したやうに鞠子さんをも監禁しようなんて云ひ出したね。あの時に私が居合はせて、君の暴舉に反對したといふことは、實に君のために仕合せであつたのだ。君は何處に眼玉を持つてゐる？ 鞠子さんを見たまへ。君にはあの

婦人の洞察力と決断力が分らないのか？ 私はあの婦人を味方に持てば、どんな仕事でも手ぶらで出来る。その代り彼女を敵に廻したら大變だ。この帆船がいかに智恵と経験に富んでゐようとも、又君が常々いふやうに、悪魔のごとく狡猾な男であつたにしても、決して枕を高くして眠ることが出来ない。實に危ない。英吉利の警句でいへば、正に鷄印の上を散歩すると一般だ。あの偉い女——私のかの女の健康のためにこの砂糖水で乾杯する——あの偉い女が、愛情と勇氣の非常な力で奥さんに味方してゐる。それは丁度われ／＼と奥さんの間に頑丈な岩が横はつてゐるやうなものだ。奥さんは彼女のために助かつてゐるのだ。しかし君の奥さんも得がたい婦人だ。かあいさうな、繊弱な、美しい御婦人だ。われ／＼は利益のために奥さんの反對に立つてゐるけれど、私は衷心から奥さんを尊敬してゐる。然るに君は、奥さんを極端に虐待してゐる。滿春君、君の失敗するのは、こりや當然だ。そして君は失敗してしまつたのだ。」

暫らく沈黙があつた。

やがて、男爵がまづその沈黙をやぶつた。

「うむ、勝手に私の悪口をいふがよい。」と男爵はすねたやうに云つた。「然し、難關は金の問題ばかりぢやない、君だつても、私の困難な立場を悉く知つたならば、あの女達に對して私の取つた強硬

な手段を是認するにちがひない。」

「われ／＼は丁度いゝ時に第二の困難を迎へることになるわけだ。」と伯爵は突こんだ。「滿春君、自分で困惑することは君の勝手だが、君は私を困惑させることは出来ない、まづ金の問題から決めて行かう。ところで、君は自分の頑固や癪癪がいけないといふが分つたらうね。それが分らないとすれば、私はもう少し悪口を云はなければならん。」

「ふむ、人に小言をいふことは容易しい。けれども、自分で事に當るのは困難だ。サア、目下の問題を如何にすべきか、それを云つて見たまへ。」

「ハハア、それは、いと易いことだ。つまり今から一切の處置を私に一任すればいゝんだ。」

「場合によつては任せてもいゝが、いつたい君はどうするつもりか、帆船君。」

「まづ私に任せるか任せないかを確答してくれたまへ。」

「一切を君に任せよう。」

「それでは、滿春君、君に問ふが、この形勢は一體どうなると思ふ？ われ／＼はぐづ／＼してゐられない。今もいつたやうに、鞠子さんは、今日、法律顧問に第二回目の手紙を書いたのだ。」

「君はどうしてそれを發見した？ 彼女は何を書いたのか？」

「何を書いたにしても、あの手紙はわれ／＼の没落の第一歩だ。君は奥さんの署名が得られなかったものだから、三ヶ月期限の手形で金をこしらへたね。ところが、手形の期限が切れたときに、君はどうするつもりか、奥さんの助けなくして支拂ふ方法があるのか？」

「何もなす。」

「無い？ 銀行に預金もないんだね？」

「預金は二三千しか残つてゐない。しかし何萬といふ金の要るときに、二三千の金は何になる？ 焼石に水だ。」

「満春君、君が現在奥さんから得てゐる金はどれだけか。」

「彼女の財産二十萬圓からあがる利子——それは日々の経費を支拂ふに十分だ。」

「その上、君は奥さんに何を期待するのか？」

「彼女の叔父が死ねば、一年に三萬圓の利子が入る。」

「一年に三萬圓の利子の付く財産といふものは大したものだ。いつたい、その叔父さんといふのは何んな人か。老人？」

「いや、老人ぢやない——といつて、若者でもない。」

「穏和な人か、暢気な人か、既婚者？ いや、私の家内の話では、未婚者らしいね。」

「勿論未婚者だ。もし叔父が既婚者で、子供があれば、龍若莊の財産が美智子へ来る氣づかひはない。いつたいその叔父といふのは、泣き蟲で、下らぬことばかり言つてゐる、わがまゝな馬鹿者だ。自分の健康状態の衰へてゐるのを楯に、傍へ来る者をさん／＼に惱ませる男だ。」

「そんな人は案外に長生きで、そして人の豫期しないときに、ひよつこり結婚したりするものだ。それ故、満春君、その三萬圓の年收といふのも、あまりあてにならないぞ。その外には、君が奥さんから得るものはないんだね？」

「絶対にない——彼女が死んだ場合は、別だけれど。」

「ハハア、死ねば、か——」

また沈黙があつた。伯爵の聲で、「ヤア、とう／＼降りだした。」といふのが聞えた。ちよつと廻廊から外へ出てみたのであらう。わたしは自分の衣物にさわつてみると、しつとり濡れてゐた。

やがて、伯爵は廻廊へ歸つたのであらう。重い軀を椅子に投げだす音がした。

「ところで、満春君。奥さまが死なれた場合に、君は何を得るのか？」

「彼女が死んで、子供がなければ、彼女の二十萬圓といふ財産が私の所有になる。」

「現金で？」

「勿論。」

二人はまた黙りこんだ。圖書室の隣りの、伯爵夫人の部屋の窓掛けが暗くなつた。夫人が窓に立つたのである。かの女はそつと窓掛けの隅をあけて、四邊を見廻はした。「まだ降つてゐる。」さうつぶやいて、やがて窓掛けを閉めた。わたしは、ほつと安心した。

「満春君、君は奥さんが可愛くはないか。」

「帆船君、それはあまり無遠慮な質問だね。」

「私は無遠慮な人間だ。それゆゑ、こんなことをも訊くのだ。」

「君はなぜ、そんな風に私の顔ばかり見てゐる？」

「君は今の質問に返答が出来ないんだね。それなら、君の奥さんは今年の夏中に死ぬんだ……」

「そんな話は止めてくれ、帆船君。」

「いや、奥さんは今年の夏中に……」

「止せといふに……お願ひだ。」

「奥さんが亡くなれば、君は二十萬圓を取得するだらう。その代り君の損害は……」

「その場合には、私は三萬圓の年收を得る機会を失ふだらう。なぜならば、美智子が死んで、私が彼女の財産二十萬圓を取つてしまへば、笛森家とはもう親戚關係がなくなるから、笛森の當主が死んでも、美智子へ譲らるべき筈の一ヶ年三萬圓の利子についてる財産は、私と關係がなくなるわけだ。」

「どうせ、それは當てにならぬ金だ。君は今現に金の必要に迫つてゐる人だ。そして君の立場では、二十萬圓の金が得られるといふことは確かだ。」

「君は私のせいばかりしてゐるが、自分の利益といふことも考へて見たまへ。私の必要な金といふのは、全然私のためばかりではない。君のために借金をしたその穴を埋め合せるといふことも含まれてゐるのだ。そして、美智子が死ねば……美智子が死ねばだね、私のふところに金が入るばかりでなく、君の奥さんのふところにも十萬圓といふ金が入るではないか。奥さんの法律上の權利を忘れるなんて、鋭敏な君にも似合はないね。そんなに私の顔を睨まんでもいい。厭なことだ。君がそんな風に私の顔を睨んだり、今のやうな變な問をかけたりますと、私は肉が縮むやうな氣がする。」

「ハハア、肉か縮むつて？ 英吉利では、良心のことを肉といふんだね。私が奥さんの死を云々したつて、別に不思議はない。人間は必ず死ぬるものだといふ意味さ。法律家が遺言狀を作製する場合はみな生きてゐる人間の死を豫想してかゝる。法律家が人間の死を豫想したからとて、まさか君の肉が

縮むわけではあるまい。それなのに、なぜ私の言葉が君の肉を縮ませるのだらう。まアそんなことは何うでもいゝ。今夜は君の立場を明かにしなければならん。しかし君の立場は至つて簡單明瞭だ。即ち奥さんが生きてゐるとすれば、君は證書に奥さんの署名を得ることによつて手形の金を支拂はねばならん。また、奥さんが死ぬるとすれば、君は奥さんの死によつてその金を支拂ふことが出来る。」

伯爵の言葉が終つたとき、禮子夫人の部屋の燈りがフツと消えた。二階全體が闇黒になつた。

「君は實によく饒舌る男だね。ところで、署名の件はどうなつたのか。」
と、男爵はぶり／＼憤つた調子で云つた。

「君はあの件を私に一任したね。」と伯爵が答へた。「まだ二ヶ月以上も間があるから大丈夫だ。あの件については暫く催促しないでくれたまへ。今に手形の期限が来たときに、君は私の饒舌がどれだけ役に立つかといふことを見るだらう。金の問題はそれでいゝとして、次は第二の問題だ。サア、それを話してくれたまへ。私は、お目觸りでもあらうが、砂糖水をもう一杯頂戴しよう。」

「話すことは、いと易いが」と、男爵は前よりも稍々しづかな、叮嚀な調子で云つた。「何處から始めていゝか分らん。」

「そんなに云ひにければ、私が助言しよう。まづ加照加奈子——から始めてはどうです。」

「ちよつと待ちたまへ、帆城君。君と私とは長い間の知己だ。君が私の困難を救うてくれたことは度だが、私もまた君のために金の點で出来るだけの力を盡して来た。われ／＼はお互ひに友情をもつて助け合つた。だが、われ／＼は又、お互ひに秘密を持つてゐる。」

「滿春君、君には私にかくしてゐる秘密がある。この黒水莊にも家庭の秘密がある。それは、つひ四五日前から顔を出しかけたやうだ。」

「うむ、私の秘密が顔を出しかけたかも知れない。しかし、君の關係したことぢやない。だから、君は強いて噂を出さうとしなくてもいゝではないか。」

「私はそんなに噂ぎだしたい風に見えるかね？」

「そのやうに見える。」

「さう、さう、私の顔が物を云つたのだ。この齡になつても、まだ思ふことを包みきれない習慣が残つてゐたとは、あれながら頼もしい。しかし、君が親友として、その秘密を尊重しろといふなら、私は敢て訊ねない。私の好奇心はサラリと捨てゝしまはう。」

「それは本當かい？」

「何でそんなに私を疑ぐるのだ？」

「これまでの経験によれば、君はいつでも遠廻しに網を張る。そして私はきつとその網に引かゝる。」椅子がぎゅつと鳴つた。そして平屋根を支へてゐる四つ目細工の臺脚が、わたしの下で揺れるのを感じた。伯爵が憤然と椅子から立ちあがつて、あの力ある拳で臺脚を撲つたのであらう。

「満春君、君はそんな風に私を解釋してゐるのか。君は私の人格を認めないんだね。私は舊い男だ。かう見えても、時に臨んで高尚な道徳を行ふことのできる男だ。たゞ、これまではさういふ機会に乏しかつたのは残念だ。私はまた、自分を極めて友情の深い男だと思つてゐる。私は君の秘密を覗ぎださうとした。ところが、君は友情に訴へて、その秘密を尊重してくれと云つた。友情は神聖である。見たまへ。私は自分の好奇心を脚下に蹂躪した。私の高尚な感情がそれを命じたのだ。どうです。満春君、分つたかい。分つたなら、私の例にならつてくれたまへ。サア握手だ——私は許してあげる。」伯爵の聲は沈んでゐた——實際、涙を流したかとおもはれた。

伯爵はあはて、言譯をした。だが、伯爵は寛大にもそれを遮ぎつた。

「何も詫言することは無い。私は友人から傷をうけたときでさへも、すぐに許して、詫言も聞かなかつた。どうだね、君は眞から私の助けを求めてゐるのか。」

「眞から求めてゐる。」

「それちや、君の困難を云つて見たまへ。」

「實はかういふわけだ。今日君にも話したやうに、私は加奈子の居所を突止めようとして極力探つてみたが、つひに分らん。」

「うむ。」

「帆船君、彼女を探し出せなければ、私はもう没落だ。」

「へい、それほど重大な問題かね？ さうだらう。今度は君の顔が物を云つてゐる。なるほど、こりや金の問題にも劣らぬ重大問題だ。」

「いや、それどころぢやない。もつと〜重大な問題だ。私がかゝりに坐つてゐることが眞實であるやうに、それは眞實だ。今日砂の中から掘り出した加奈子の手紙を君にも見せたね。あの手紙に偽りは無い。彼女は私の秘密を知つてゐる。」

「満春君、秘密の件はなるべく簡潔に。そして君が加奈子にその秘密を話したのか。」

「いや、彼女の母が彼女に云つたのだ。」

「つまり、君の秘密を知つてゐる女が二人あるわけだね。危ない、危ない。君が加奈子を瘋癲病院に監禁したのも、全くそのためだね。しかし、君が敵に利用されないために加奈子を監禁したといふこ

とを、病院の者達は感付かなかつたのか。」

「それは大丈夫だ。加奈子は監禁するねうちのある狂女だ。と同時に、私に取つては、私を没落させるだけの正氣の女だから困る。」

「それで、分つた。さて君の現在の困難は如何なる點にあるのか。」

「加奈子がこの邊に来てゐる。そして、美智子と交通してゐる。それが危険なのだ。今日の加奈子の手紙などは、誰が讀んだつて、美智子が秘密を知つてしまつたと判断するより外はない——もつとも美智子はそれを打消してゐるけれど。」

「待ちたまへ、満春君。もし奥さんが秘密を知つたとすれば、同時にその秘密は君を危ふくするものだといふことも知られたにちがひない。そして、口外される氣づかひはあるまい。君の令夫人として良人の秘密を守るといふことは利益だからね。」

「それは、どうかナ。彼女が私に對して多少とも愛情を持つてゐるなら、秘密を守るといふ氣もあるだらう。だが、私は元來邪魔物であつたのだ。彼女は結婚前に戀をした。今でもあの男を思つてゐる——あの厭らしい浮浪人、服部といふ繪の教師を。」

「それは何も不思議なことぢやない。誰だつて最初に女の心を捕へた者はないんだ。私はまだ第一番

目の色男といふものに出會したことがない。第二番目の色男には稀に出會した。第三番目、第四番目、第五番目の色男には屢々出會した。然し、第一番目の色男といふものはまだ見たことがない、勿論、第一番目の色男といふものは、あるにはあるだらう。が、不幸にして私はまだお目にかゝつたことがない。」

「私の話中に餘計な口を入れてはいけない。で、その服部といふ男は二度も加奈子と會つてゐる。私の秘密を彼女から聴きだしたにちがひない。服部が秘密を知つてゐる以上は、彼と戀仲であつた美智子もそれを知らぬ道理はない。だから彼等が再び會ふ場合は、私の不利益を計るのが彼等の利益に外ならぬのだ。」

「靜かに云ひたまへ、満春君、靜かに。そして君は奥さんの貞操を信じないんだね？」

「貞操？ 馬鹿な！ 私は彼女の金の外は何も信じない。彼女は一人では無害な女だが、あの浮浪人の服部が加はると……」

「分つた、分つた。その服部とかいふ男は、今何處にゐる？」

「彼奴は外國へ行つた。生命が惜しいなら、急いで歸らぬ方がいゝ。」

「それなら安心したまへ。奥さんは現に此邸に居られて、君の勢力圏内にあるし、鞠子さんも、奥さ

んと離れたい關係から、やはり君の勢力圏内にある。服部君は外國へ行つてゐる。何も心配なことはない。たゞわれ／＼は神出鬼没の加奈子といふ女を探し出せばいいのだ。」

「ところが、あの女の居所は更に分らん。彼女の母のところへも行つてみた。村中を探した。しかし何の手がかりもない。」

「母親は信頼するに足る女か？」

「さうだ。」

「でも、君の秘密を娘に洩らしたといふではないか。」

「二度と他人に洩らす氣づかひはなし。」

「それでは、母親も君と同じやうに、その秘密を守るだけの利害關係を有つてゐるんだね。」

「大いに有つてゐる。」

「それなら安心だ。大いに勇氣をだしたまへ、満春君。そして明日はもつと有効な方法で加奈子を捜索しよう。ところで、寝る前にもう一つ質問がある。」

「何だね？」

「それは外でもない。私は昨日、署名を延期した件を奥さんに云つてあげようと思つて、奥さんの後

を追かけて、四阿の方へ行くと、ひよつこり知らぬ女が奥さんと別れて、隠れるやうに森の奥の方へ入つて行つた。あれは加奈子だらうとおもふが、あの時は遠くて顔が見えなかつた。加奈子といふのは、いつたい何んな容貌の女か？」

「彼女の容貌なら、たつた一言で説明することが出来る。美智子と瓜二つだ。」

椅子がまたぎゆつと鳴つた。平屋根の臺脚がまた揺れた。伯爵が——今度はびつくりして起ちあがつたのである。

「エツ？」

と伯爵はおもはず叫んだ。

「大病の後で、頭がわるくなつた美智子を想像してみたまへ。それが加奈子の顔だ。」

「加奈子は奥さんと血族關係があるのだらう。」

「いや、そんなことはない。」

「血族關係がなくて、そんなに似てゐるとは不思議だね。」

「全く不思議だよ。帆城君、君は笑つてゐるね。何がをかしい？」

答へはなかつた。何の音もない。伯爵は何も云はずに、にや／＼笑つてゐる様子である。

「何が可笑しい？」

と男爵は重ねて問うた。

「多分私の想像だらうよ。われ／＼伊太利人はすぐ笑ふくせがあつて困る。何しろ伊太利人といへば、ポンチ繪の展覽會を發明した國民なんだから。それはさうと、今の話で、すっかり加奈子の人相がわかつた。今夜はこれで十分だ。君は安心してゆつくり寝たまへ。明日の計略はこの私の大きな頭のなかにある。サア、もう一度握手だ……お寢み。」

後はひつそりと静まりかへつた。やがて、伯爵が圖書室の戸を閉める音、男爵が窓を閉める音が聞えた。

わたしは、やつと膝を伸ばして、濡れた屋根を這つて、自分の部屋に歸つた。大時計は丁度一時十五分を報じた。誰もわたしの姿を見たものはない。

四、發病

六月二十日——八時。太陽は晴れわたつた蒼空に輝やいてゐた。昨夜はまんじりともしなかつた。わたしは、昨夜闇黒を眺めた同じ窓に立つて、朝のかどやかなしい静寂を見た。

昨夜は濡れ鼠のやうになつて、冷たさが骨の髄まで透つたが、今朝は熱があつて、頭が焼けるやうだ。けれども、今床に就いたら、わたしは再び意識を回復することが出来るだらうか。再び起きあがる勇氣が出るだらうか。わたしは、それが恐ろしい。

あゝ、昨夜の雨、わたしを凍冷したあの雨が恨めしい。
九時。今鳴つた時計は九時であつたか、それとも八時であつたか。いや、たしかに九時であつたやうにおもふ。

慄へが出て來た。頭の先から足の尖までぶる／＼慄へる。わたしは、こゝで眠つてゐたのであらうか。今まで何をしてゐたのか、自分にもわからない。

おゝ、神さま！ わたしは病ひに冒されたのでせうか。
こんな大切なときに、病氣！

わたしの頭はどうなるだらう。それが心配で堪らない。わたしは、まだ書ける。けれども、行がめちやくちやだ。自分の書いた文字が讀める。美智子さん、わたしはまだ書ける。このとほり、まだ書ける。今のは八時か、それとも九時であつたか。どちらでせう？

おゝ、寒い、寒い。あゝ、昨夜の雨。時計が鳴つてゐる——わたしはもう數へることが出来ない——

—頭が堪らない—

〔註〕この後は、字體が亂れてゐて、讀めない。だから、鞠子の日記はこゝで終つたといつてもよい。

次の頁には、別人の筆蹟で書き加へてある。それは、大きな文字で、活潑な、確かりした筆蹟である。そして「或る親友の手にて」と割註を施して、次のやうに認めてある。

五、あとがき（或る親友の手にて）

私の敬愛する鞠子さんが病氣にかゝつたために、私がこの日記に追加する機會を得たことは、私にとつて思ひがけぬ喜びである。

私は、まづこの興味ある日記を熟讀玩味した。

一頁々々と讀んでゆくうちに、私はすっかり魅せられてしまつた。氣持よく、そして嬉しくおもつた。私は自分の胸に手を置いて、心からそれを言明する。私は無量の感謝をもつて、それを言明する。

尊敬すべき婦人とは、實に鞠子さんのやうな女をいふのだ。絶大の努力とは、この日記のときを指していふのだ。

私はこの女と利害相反して、お互ひに反目し合はなければならぬとは、何といふ情けないことであらう。こんな忌まはしい事情さへなければ、鞠子さんは私にとつてどんなに尊い友であり、私はまた鞠子さんに對してどんなに忠實な友であつたらう。

私と滿春君との密談を偵察した苦心と技倆に至つては、六尺の男子も及ばない。さうして、われわれの密談を始めから終りまで正確に記述してゐる。實に驚嘆に値する。

鞠子さんに對して油然として湧き起つた私の敬愛の感情からして、私は鞠子さんの主治醫であるドクトルにいろ／＼助言をした。私の化學上の知識と醫學上の經驗を傾むけて助言をした。けれども、頭迷なドクトルは私の助言に耳を藉さない。困つた男だ。

私はぐづ／＼してゐられない。事情が切迫してゐる。私は冷靜に、自分の恐ろしい運命を完成しなければならぬ。

鞠子さんの平癒を私は眞心から祈る。

あの女が義妹のためにつくしたすべての計畫は、避けがたい失敗に終つてゐる。お氣の毒なことだ。

私はこの日記を讀んで、多くの事情を知つた。けれども、あの女達の今後の失敗は、私がこの日記を讀んで多くの消息に通じた故ではないといふことを鞠子さんに信じて頂きたい。

私がこの日記を讀んで感謝するのは、自分の鋭敏な感覚が目醒めたといふことだ。たゞそれだけだ。以上に述べた私のこの簡単な告白は、同じ感覚を有つてゐる人に對して、私の心持を説明し、また一切の辯明ともなるであらう。

鞠子さんは、實に私と同じ感覚を有つてゐる婦人である。

帆城

惱亂のたね (笛森貞亮の手記)

一、煩累の朝

私を煩らはしてはならないと心がけてゐるものは唯の一人もない。それは、私の生活の最大不幸である。

なぜ——私は皆んなに訊ねる——なぜ私を煩らはすのか？ 誰も答へてくれない。誰も私を放任してくれない。親戚も、友人も、知らぬ人までも、皆んな私に面倒をかける。私はどうすればいいのか。とうとう最後の面倒がやつて來た。私はこの記録に筆を執らねばならぬことになつた。こんなことは、私の性分にも神経にも合はないけれど、詮方なく試みる。私は出来るだけ記憶をよび起して、出来るだけ書いてみよう。

私が忘れたところは路易に相談して埋め合せよう。だが、路易は馬鹿者で、私は廢人だ。われわれ二人でこしらへる記録は、間違ひだらけのものになるかも知れない。實に屈辱だ。月日を正確に記載せよとの頼みである。おゝ神様！ 私は生涯にたゞの一度も月日などを記載した

ことはない。さてどう書いたものか。

路易に問うた。彼は私が想像してゐたほど馬鹿者ではなかつた。彼は、一週間か二週間以内に起つた出来事の月日を記憶してゐる。さうして、私はまた、人の名前を記憶してゐる。

最初に必要な月日は、たしか六月の終りか、七月の初めかである。そして最初に必要な人名は、春やといふ、おそろしく賤しい名前である。

そこで、六月の終りか、七月の初め。そのときに私は、例のごとく、種々なる美術品のなかに座つてゐた。それ等の美術品は、私が近隣の人々の趣味性を向上させるために蒐集したものである。私はこれらの繪畫や、版畫や、古代貨幣や、その他の美術品を一々寫眞に撮らせてゐる。近日中にこの寫眞をカールツスルの工藝學校に寄贈しようとおもつてゐる。カールツスルは俗悪な町だ。あの町の人人は、一人残らず、美術品を破壊する無智蒙昧な野蠻人である。

で、私はその朝、例のごとく美術品に取りまかれて、眩かけ椅子にそり反つて、靜かな朝を楽しんでゐた。路易が突然私の部屋に入つて來た。なぜ、呼鈴を鳴らさないのに、入つて來たかと、私は問うた。さう反問するのが當然である。私は滅多に人を叱らない。いつたい人を叱るといふことは非紳士の習慣である。だが、そのときに路易は何も云はずにニヤリと笑つた。私はこのニヤリ／＼笑ひを叱

り飛ばすといふことは全く當然だとおもつた。取り敢へず、怒號つた。

路易は、私に會ひたいといふ一人の若い女を部屋の外まで連れて來てゐた。彼はまた、召使に特有な饒舌を發揮して、その女の名前を春と申すことまでもつけ加へた。

「春といふのは、何處の人か？」

「権田原さまの奥さまの女中でございます。」

「権田原夫人の女中が私に何の用がある。」

「お手紙を持参いたしました。」

「手紙を受け取つてやれ。」

「あなたさまへ直接にお渡ししたいと申します。」

「いつたい、それは誰がよこした手紙か？」

「鞠子さまの御手紙でございます。」

鞠子と聞いて、私は我を折つた。私は、經驗上、鞠子には敵はない。可愛い鞠子よ！

「路易、権田原夫人の女中を此室へ通せ。だが待て、その女の靴は、鳴りはしないか！」

かういふ問をかけたのも已むを得ない。私は鳴る靴の音を聞くと、一日気分がわるいのである。だ

が、幸ひに女中の靴は鳴らなかつた。

「鞠子からの手紙を持って来たのは、お前か？ 手紙は卓子の上へ置いて行きなさい。そこらの物に觸れないやうにしてね。どうだ、鞠子は達者か？」

「はい、御丈夫でゐらつしやいます。ありがたうございます。」

「横田原夫人も變りはないか？」

若い女は答へなかつた。かの女の顔は變に歪んで、今にも泣きだしさうになつた。眼は濡れた。涙でか、それとも汗でか。路易に訊くと、涙らしいと云つた。路易は下層社會に育つた者だから、同じ階級の女の表情などはよくわかる。たしかに涙であつたらう。

やがて、春は路易を通して、次のことを私に語つた。

春は主人から暇を出された。それで、邸を退がつて、村の宿屋で泊つた。夕方六時から七時の間に鞠子が宿屋へ訪ねて来て、二通の手紙を託した。一通は私に宛てたもの、他の一通は倫敦の或る紳士に宛てたものである。(倫敦の紳士とは何者であらう、怪しからぬ奴！) 鞠子はすぐに歸つた。

春はその晩の九時頃、寝る前に茶を飲まうとしてゐたときに、突然に戸が開いて、伯爵夫人が入つて来たので、度膽を抜かれた。(春の言葉のまゝに書く) 伯爵夫人とは、私の可憫さうな妹で、外國人

と結婚した困つた女である。さて、戸が開いて伯爵夫人が入つて来たので、春が度膽を抜かれたとは不思議だ。

伯爵夫人は、突然におどろかした詫をして、それから夫人は、鞠子に頼まれて、先刻鞠子が云ひわすれた二つ三つの便りをもつて来たと言つた。春は早くその便りを聞きたいとおもつたけれど、伯爵夫人はなか／＼それを云ひ出す様子がなかつた(妹のやりさうなことである)。伯爵夫人は、その晩は大へん親切で思ひやりが深くて(妹に似合はぬことだ)、

「可憫さうな娘さん、お前はお茶が欲しいのでせう。どれ／＼、わたしがお茶を入れてあげます。そして一しよに預いてから、ゆつくり用事を話させよう。」

さういつて、夫人は手づから茶を入れて、自分でも飲み、春にも飲ませた。すると、五分も経たぬうちに、昏睡状態に陥つた。春はさういふことは最初の経験であつた。こゝを語るときにかの女は大へん泣いたと路易は云つてゐた。しかし、何でそんなに泣いたのか、私には分らない。

昏睡してから三十分ほど経つて、正氣にかへつたときは、宿の主婦さんの外は、誰も枕頭にゐなかつた。伯爵夫人は、あまり時刻が遅いからとて、回復の兆候が見えるとすぐに歸つたといふ。主婦さんは親切に介抱して、二階の寢室に寝かしてくれた。

春は獨りになると、かの大切な手紙のことを思ひ出して、内かくしを探つてみた。手紙は二通とも安全にそこに在つた。たゞ、不思議なことには皺がついてゐた。

暫く眩暈がしたけれど、翌くる朝汽車に乗るのには差支なかつた。途中倫敦の停車場で一通の手紙を郵便函に入れ、残りの一通は今私の手に渡したのである。これで、かの女の使命は成し遂げられた。しかるに、かの女は何か心に濟まないやうな、心配さうな顔をしてゐる。伯爵夫人がわざわざ來られたのに、その便りを聞き落した。それが非常に大切な便りであつたかも知れない。しかし、汽車に乗り遅れてはならぬので、再び鞠子に聞きに行く暇がなかつた。そんなことを自分の大へんな手落ちのやうにおもつて、心配してゐるのであつた。もし手紙で問合せて差支なければ、すぐに手紙を書くとも云つた。

「わたくしは何うしたらよろしいでせうか、旦那さま。どうぞ御指圖を願ひます。」と、かの女は云つた。

「うつちやつて置け。そんなことは何うでもいゝではないか。」

「でも、旦那さま。御手紙でお訊ねしてよろしければ、わたくしはすぐに御手紙を認めます。わたくしは奥さまのために、自分に出來るだけのことはいたしたのでございます。」

低い階級の者どもは、何時、どうして、部屋を出て行くべきかといふ禮儀作法を心得てゐないのでこまる。もう我慢ができない。

そこで私は命じた。

「退りなさい。」

かの女が退つた後、私はやつと獨りになつて、うとくと假睡つた。私はほんとうに假睡が欲しかつたのだ。

やがて假睡から醒めると、可愛い鞠子の手紙が眼についた。その内容を少しでも知つてゐたら、私は開封しなかつたであらう。だが、不幸にして私は何も知らないものだから、うっかり手紙を讀んでしまつた。それがために、果して一日一杯私は惱亂した。

鞠子の手紙は私をおびやかした。皆んなが私をおびやかす。私はこの龍若莊を姪の避難所となして姪の難儀を救うてやらなければ、あらゆる恐怖が私の敬虔な頭の上に落ちかゝらうとしてゐる。だが私はやはり躊躇した。

私がこの龍若莊を美智子のために避難所として開放したならば、權田原男爵は、私が彼の妻を引きとつたといふかどで、ぶり／＼憤つて、妻のあとを追ひかけて、此邸へ來るにちがひない。さうする

と、此邸は大へん面倒な無限廊になつてしまふ。それは困る。そこで私は鞠子に返事を書いた。とにかく鞠子が一人で此邸へ歸つて来てくれ、そして委細の相談をして、私が納得するだけの説明を與へてくれたならば、私はいつでも喜んで可愛い美智子と呼びよせる。左もなければ、美智子を引くことはできない、と云つてやつた。

三日目に手紙が来た。それは、全く知らぬ男から来たので、随分不躰な手紙であつた。差出し人は現にわれ／＼の法律顧問をしてゐる男であると自分を説明してゐる。われ／＼の親愛な、あの臆病な岩藻君の代理をしてゐる男であらう。で、その手紙によれば、彼は最近に鞠子から書状を受けとつた。ところが、開封してみると、中は一枚の白紙の外、何も入つてゐなかつた。彼は何か怪しい事情が伏在してゐるにちがひないと思つて、すぐに鞠子へ照會の手紙を出したが、鞠子からは何の返事も無い。それについて、私に何か聞きこんだことでもあるかといふ、問ひ合せである。

そんなことを何で私が知るものか。すぐに返事をやつた。それは私の書いた峻烈な手紙の一つであつた。私は、あの厄介な服部斧太といふ人物に暇をやつた時以來、久しくこんな鋭い文字を書いたことが無い。

私の手紙はたしかに利き目があつた。その證據には、法律家は返事をよこさなかつた。

かくて、五日間といふものは、誰も邪魔をするものもなく、甘い孤獨の祝福をうけて、静かな気分を楽しんだ。

六日目には、気分も軀もしつかりしたので、私は例の仕事繼續するために、寫眞屋を呼びにやつた。古代貨幣を弄りはじめた。そのときに路易が突然に入つて来た。手には一葉の名刺を持つてゐた。

「また若い女が来たか？ 私のやうな健康状態では若い女と會ふのは不愉快だ。不在だといへ。」

「今日お見えになつたのは、紳士でございます。」

紳士なら、考へなほさなければならぬ、私は名刺を見た。
あゝ、天なるかな！ あの我がまゝな妹の、外國生れの良人、帆城伯爵が来たのだ。この人はきつと金の無心に来たのであらう。

「路易、この人は、五シエリングもくれてやつたら、おとなしく歸るだらうか。」

路易は返答に困つたやうな顔をした。そして、伯爵は堂々たる服装の方で、大へん榮えて居られるやうに見える、と云つた。私の考へは少し違つて来た。

「何か用件を云はなかつたか？」

「帆城伯爵さまは、鞠子さまが黒水莊を離れることが出来ないで、その代理としてお見えになつた

さうでございます。」

「此室へお通し申せ。」

伯爵が入つて来たときに、私はまづ驚いた。びつくりするほどの大男だ。私はその巨大な體格を見て、殆んどふるへた。私はおそれた。こんな男はきつと床を踏み鳴らし、そこらにある美術品をおつたすだらうと。しかし、伯爵はそんな男ではなかつた。彼は蕭灑な夏服を着けてゐた。彼の物ごしは氣持よく、どつしりして、静かであつた。顔には微笑をたゞへてゐた。私の最初の印象は大へんよかつた。

「お許し下さい。私は黒水莊からまゐりました。私は帆船夫人の良人である名譽と幸福を有つ者であります。この御面接は最初で、又おそらく最後でございますが、どうぞお見知りおきを願ひます。いや、そのまゝで、どうぞお起ちにならぬやうに。」

「大へん御親切に。」と私は答へた。「私は起つて御挨拶をするだけ丈夫であることを望みます。この龍老莊でああなたにお目にかゝつて、愉快です。どうぞお掛け下さい。」

「失禮ですが、今日は御氣分がおわるいではありませんか。」
と伯爵はまづ私の健康状態を問うた。

「いつもの通りです。私は衣物を着て人間のやうに見えてゐるけれど、實は神經そのものに外ならんのです。」

「私はこれまでにいろいろな問題を研究しましたが、」と、この同情深い人は云つた。「神經についても多少調べてみました。只今、ちよつと、極く簡単な御助言をいたしてよろしいでせうか。まづ、この御部屋の光線を少しく變へて御覽なすつては？」
「ありがたう。どうぞ願ひます。」

二、微菌を背負つた男

伯爵は起つて窓側へ行つた。

「光線は第一の要件です。」と彼は云つた。いかにも自信ある、そして私のやうな廢人を宥めるやうな調子で「光線は物を刺戟し、育て、保ちます。あなたは光線がなければ、一日もお暮しになることが出来ません。草花にしてもさうです。この窓はあなたに直接に光線の行く窓ですから、窓簾を閉めませう。それから、こちらの窓は直接でないから、窓掛をあけて、爽快な光線を入れませう。御自分の場所に直接では堪へがたいでせうが、御部屋には光線を入れて下さい。光線は天の最も大きな

賜物です。適當な制限の下にこの天の賜物をうけ入れるといふことは必要です。どうぞ光線を受け入れて下さい。」

こんな調子で、彼はすつかり私を手なづけてしまった。

「ときに、變なことを申すやうですが、私が甚だ當惑してをるといふことを、あなたはお認めになつたでせう。」

「なぜ、そんなことを仰しやるのです？ 私には分らない。」

「そのわけを申す前に、ちよつと御訊ねしますが、あなたは、このとほり貴重な美術品のなかに没頭してをられますが、あなたは同情が深く、極めて物に感じやすい御性質のやうにお見受けします。如何でせう。私の判断は當つてをりませうか。」

活潑な動作が出来るほど健康な軀であつたなら、私はすぐに起ちあがつて、一禮したいとおもつた。けれども、それほど強い軀でないから、私は單に微笑をもつて彼の判断を承認した。われ／＼はお互ひに諒解し合つた。

「どうぞ、私の考へをお聞き下さい。」と伯爵はつゞけた。「あなたが同情の深い方であるやうに、私も實は同情心に富んだ男です。さうして今は、或る慘ましい家庭の出來事について、われ／＼はこの

同情の最も必要な時に迫つてをります。今回の事件では、私も實に當惑してをります。」

「その不愉快な事件について、何うしても今お話ししなければなりませんか？」

と私は反問した。

伯爵はひどく嚴肅な態度で、溜息をして、それから頭を左右に振つた。

「どうしてもお聞きしなければなりませんか？」

と私はふたゝび問うた。すると、伯爵は肩をすぼめた。これは彼が、この部屋に入つてから始めてなした外國風の身振りである。そして不快な、人の心を見透すやうな眼で、じつと私の顔を見据えた。私は本能の命ずるところにしたがつて、眼を瞑つた。

「それでは、靜かに始めて下さい。」と私は云つた。「死人でも出來ましたか？」

「死人？」と伯爵は、外國流の大げさな驚ろきを現はした。「笛森さん、あなたの英吉利流の御言葉で、私はおそろしくなりました。私の言葉や態度には、死の便りをもつて來た男のやうな點でも御認めになりましたか？」

「お許し下さい。」と、私は詫びた。「あなたは何もさういふ不吉なことを言はれも爲さりもしなかつた。たゞ、私は習慣として、何か不吉な場合には、その最も不吉なことを豫想するのです。さうして、後

に實際それほどでないといふことが分れば、安心の程度も大きいのです。まづ、誰も死んだのではないといふことが分つて、ほんとうに安心しました。ちや、病人でも出来ましたか？」

私は瞑つたのを眼をあけて、相手の顔を見た。

「それが私のお傳へするお便りの一部分です。お察しのごとく、病人が出来ました。」

「それは困つた。そして誰です、患らつてゐるのは？」

「實にお氣の毒ですが、御病人は鞠子さんです。鞠子さんが直ぐ此邸へまゐられなかつたゆゑ、多分あなたも御察しが附かれたでせう。」

實際はさうでなかつたけれど、さうだと私は答へた。可愛い鞠子のやうな頑丈な體格の女が病氣にかゝるとは似合はしからぬことである。何うも怪我をしたのではないかとおもふ。落馬か、階段から轉げおちたか、いづれそんな様なことであらう。

「よほどわるいのですか？」

「たしかに、重患です。危険です。一日も早く癒られるやうに、私は祈つてをりますが、その點は何とも申しかねます。鞠子さんは生憎雨の降るときに外に出てをられたので、感冒にかゝつたのですが、結果が大へんにわるくて——熱病です。」

熱病！そして、今私の前にゐる伯爵はその熱病患者の發生した黒水莊から來た人である。それを聯想しただけで、私は氣が遠くなりさうであつた。

「あゝ、どうしませう。して、それは傳染性のものですか？」

「今はさうでもありませんが、と、彼は疑ぐるやうな云ひ方をした。「やがて傳染性のもものならぬとも限りません、しかし、私黒水莊を出發したときには、まだ些しもさういふ兆候がありませんでした。」

彼の言葉を信じたけれど、その顔色があまりにわるい。彼は歩いてゐる西印度の流行病だといつてもいい。彼の巨大な體格では、チブスの黴菌を何噸と背負つてあるいて、絨壇といふ絨壇にことごとく熱病の種を蒔きちらすのに十分である。私は立どころに決心した。この男から遁れなければならぬと。

「私は廢人で、ひたすら御憫察をお願ひます次第ですが、と私は云つた。「何事によらず、あまり長い御相談には堪へられません。で、今日御訪問になつた御趣意を簡單に仰しやつて下さい。」

この暗示で、彼はきつと氣の毒におもつて、邪魔をしたといふ詫言をいつて、結局此室を出て行くだらうと、ひそかに期待した。しかるに、彼はますます泰然と腰を据ゑた。一そう眞面目な、嚴めし

い態度になつた。彼は太い二本の指をあげて、例の不快な、物を見徹すやうな眼付でじつと私の顔を見た。私はどうすることも出来なかつた。この男と角闘するためには、力が足りない。

「私の御訪ねした目的は、この指のとほり二つあります。」と、伯爵はほんとうに抑へきれないやうに云つた。「第一の目的は、實にお氣の毒な次第ですが、権田原男爵御夫婦が仲違ひをしてをられるといふことを報告するためです。私は黒水莊において、すべてのことを目撃しました。で、この際不吉な出来事の起るのを防ぐためには、どうしても鞠子さんの御提案を實行されるより外はあるまいと存じます。御夫婦が暫く別居されるといふことは、この難局を無事に解決する唯一の方法です。やがて、不和を來したすべての原因が取りのぞかれたときに、私がきつと男爵を説いて、もと／＼通りに御同棲の出来るやうに取り計らひます。権田原夫人には何等缺點がありません。しかし、夫人が黒水莊にをられるといふことが不和の原因になつてをります。といつて、夫人はこの龍者莊以外には、單獨で御住居になるやうな處もないやうですから、この際、是非あなたにお引取りをお勧めします。」

あゝ、ぞつとする。俄かに電が降つたかとおもわれる。服のあらゆる襷に黴菌を有つたこの男は、更に病源地からもう一人を此邸に引きとつて、私にも感染するやうに勸めてゐる。

伯爵は二本の指の一つを靜かに折りかゞめて、残りの一本をあげた。そして話をつゞけた。その聲は丁度、馭者が馬に鞭をあてる前の「エイツ！」といふ掛け聲と同様のひゞきを私の頭に傳へた。

「もう少しの御辛棒をねがひます。第一の目的はたゞ今申しました。さて第二の目的は、鞠子さんが御病氣で御自身こゝにまゐられないために、私が鞠子さんに代つて萬事の御相談をいたしたいといふことです。あなたが権田原夫人を御引とりになることを御躊躇なさるのには、それは御有理なことです。けれども、この帆船は、男爵の親友として、鞠子さんが男爵を知つてをられるよりも、より以上に男爵を知つてをります。今、夫人を御引とりになつたからとて、男爵は夫人の後を追うて此邸へ來るといふ氣づかひはありません。それは私が斷言します。男爵の事業は、今、難關にさしかゝつてをります。それゆゑ、夫人を此邸へ御引とりになつて、彼に自由をお與へ下さい。さうしますれば、彼は早速大陸の方へ旅行するでせう。それは見やすいことです。この點にお疑ひがありますなら、何なりと御尋ね下さい。私が十分にお答へします。」

彼は立てつゞけに饒舌つた。まだ／＼、いくらでも云ひまくらうといふ意氣ごみである。「ありがたう。」と私は云つた。「私は大へん氣分がわるくなつて來ました。私のやうな弱い男は、物事を突きつめて考へることが出来ません。ですから、今日のお話もこれでお許しが願ひたい。御趣意はよく徹底しました。そしてあなたの御好意は深く感謝します。いづれまた氣分のよろしいときに、

再びお目にかゝる機会がありましたならば……」

彼は椅子を離れて、起ちあがつた。今度こそは出てゆくのだとおもつた。ところが、なか／＼さうでない。

「お暇する前に、もう一言申しあげることをお許し下さい。それは外でもありませんが、どうせ御引取りになるなら、鞠子さんの御全快を待たずに御實行なさる方がよろしいかとおもひます。鞠子さんには醫者も看護婦も附いてをりますから、大丈夫です。權田原夫人はどうせ看護のことは不適當でもありますし、殊に病人と同じ家にをられるといふことは、夫人の御健康のためにもよろしくありません。且つまた、男爵との關係が日々險惡になつて來てゐる際ですから、この上、夫人をあゝの黒水莊にお置きになると、思はぬ不吉な間違が生じないとも限りません。さういふことは家名にもかゝはる重大な事件でして、失禮ながら、あなたも、私も、その他すべての關係者が責任を負はなければなりません。それゆゑ、前以てあなたの御責任を軽くするために、私は、男爵夫人へ宛て、すぐ此邸へ御歸りになるやうに手紙を認めませう。將來、何事か起つた際は、あなたの御責任が一番重いといふことを御考へ下さい。私は自分の經驗から、そして眞の好意から、このことを申しあげたいのですが、私の忠言をお用ひ下さいませるか、それともお用ひがありませんか。」

私は伯爵の顔を見た。おそろしく物を見透したやうに斷言する男だとおもつた。路易に命じてこの男を室外へ案内させてしまはうといふ決心がきさして來た。その決心が私の顔面のあらゆる線に現はれたに違ひないとおもつた。ところが、さうした私の表情も、この男には毛筋ほどの印象も與へなかつた。實におどろくべきことだ。彼はたしかに、神經といふものを有たずに生れて來た男であつた。「まだ御決心が付きませぬね、笛森さん。」と彼は云つた。「あなたが躊躇される理由を私は了解しました。そして深い同情をもつてお察しします。あなたは多分かうお考へでせう。男爵夫人は昨今體も精神も衰弱して居られるから、ハンブシヤイアからの汽車旅行にはとても堪へられまい。それに、近頃夫人附の女中が暇を出されたので、他に附添として適當な女中があるまい。又かういふ實際の旅行は、一旦倫敦でお降りになると好都合であるが、倫敦にはホテルの外は家庭的に御滞在なさるやうな適當な知り人もないと、そんなことが御心配でせう。だが、御安心下さい。私は男爵と一しよに英吉利へまゐつた當時から、既に倫敦の郊外で暮さうといふ考へで、セント・ジャンの森に、小じんまりとした一軒の家を借りておきました。それを今度のお役に立てませう。さうしますと、かういふ順序になります。まづ男爵夫人は倫敦でお降りになつて、暫くお休みなさる。その間は是非とも私の家にお泊りをねがひます。私の家は妻の家で、即ち夫人の伯母の家でありますから、決して御遠慮には及びま

せん。御出發の際は私が停車場までお送りする。此家へお着きになるときは、春やを停車場へお遣しになれば、それで萬事とどほりなく行きます。とにかく、私の家に御滞在を願ふやうに、すぐに私から夫人へ手紙を差しあげませう。さういふ次第ですから、どうぞあのお可憐さうな夫人を御引とりなさるといふ御決心をお極め下さい。」

さう云つて、彼は大きな手を私の方へ波うたせながら、細菌だらけな胸をしたゝかに打つた。彼は下院の壇上にも立つたやうに、滔々と辯じたてた。

そのときに私は、所謂一石をもつて二鳥を撃つといふやうな巧い手段が、ふと頭にうかんだ。即ち私は、この厭々する伯爵の雄辯から通れると同時に、限りなき美智子の困難を救うてやるために、すぐに手紙を書くことを決心した。危険な病人の鞠子が黒水荘で寝てゐる間に、美智子を引とるとすれば、此邸には何も危険が及ばないわけだ。

私は簡単に認めた。

最愛の美智子よ。御都合次第にて、いつにても御歸りなさるべく候。途中は倫敦にて下車し、伯母さまの家に於て御休みなさるべく候。鞠子の病氣は、實に氣の毒に候。草々。

これを伯爵に突きつけた。——と、私は疲れが出て、ぐつたり椅子に沈んでしまった。

「御許し下さい。私はまったく困憊しました。もう何をすることも出来ません。あなたは階下で小食でも召しあがつて下さい。皆さんによろしく。これで失禮します。」

それでも、伯爵はまだ饒舌つてゐた。實に根氣のよい男だ。私は眼をつぶつた。なるだけ聞くまいと骨を折つたけれど、随分澤山聞かされてしまった。飽くといふことを知らない私の妹婚は、われわれの會見の結果について、自分自身のために喜んで、私のために喜んでをした。自分の同情や、私の同情について、くたくと饒舌つた。私の健康を心配した。處方箋を書かうと云つた。光線の必要を忘れないやうにと注意した。二三日したら、權田原夫人が此邸へ御歸りになるだらうと云つた。その他、私の喜こびさうなことを、とても覚え切れないほど、うんと並べた。私は、彼がいつ戸を開けて、いつ出て行つたかも知らなかつた。

後で聞けば、伯爵は階下で小食を取つて、果實タートとクリームをべろりと平らげて、午後の汽車で出發したといふことであつた。おそろしい男だ。おそろしい消化力だ。

「まだおよろしい方ではありません。ほんとうにお氣の毒でございます。」

「困つた、實に困つた。」と伯爵が云ひました。「あなたは太へんお疲れのやうに見えますよ、御園さん。あなたも私の妻も随分骨が折れませう。何とか方法を講じなければなりませんね。それに妻は、急に都合があつて、明日か明後日倫敦へ行くことになりました。最も朝に發つてその晩に歸ります。そのときに老練な看護婦を一人連れて來る筈ですから、あなたも樂になりますよ。それは妻と知り合ひの婦人ですから、好都合です。しかし、いよく連れて來るまでは、このことはドクトルには云はないで下さい。ドクトルは、私が昨日御病人のことで忠告した一件で、私に對して感情を害してゐるやうな風ですからね。」

わたしは伯爵の御親切を感謝しました。そして、そのまゝ病室へ歸りました。

女はみな、愚かな好奇心を持つてをります。わたしも、お恥かしいけれど、この愚かな好奇心に囚はれました。旦那さまが圖書室の入口で、伯爵に、女が見附かつたかと云はれたあの言葉。伯爵はまた、今朝から幾度も沼のあたりへ何か探しに行きました。その探してゐる女といふのは何者でせう。わたしはそれが知りたくて堪らなくなりました。わたしは、お二人の後の談話を聞かないから、分りません。たゞ一つの疑問は、伯爵がその女を見附け出したか、どうかといふことです。

その晩は何事もなく過ぎました。鞠子さまの容態は些ともよい方へは向ひませんでした。翌くる日は少し樂になつたやうでした。

伯爵がわたしに看護婦のことを云はれてから三日目に、伯爵夫人は午前の列車で倫敦へ發ちました。何のために急に倫敦へ行かれたのか、誰も知りませんでした。いつも夫人にやさしい伯爵は、停車場まで送つて行きました。

伯爵は停車場から歸ると、すぐに病室を見舞はれました。そのときは、戸村ドクトルも奥さまも、御病人の枕頭にゐました。わたしは病室の外へ出て、伯爵に會ひました。伯爵は容態や手當についていろいろ問はれたゆゑ、わたしは、サリン性の鹹らい味のする藥を與へられたこと、容態は、熱がとまゝはげしく出て、衰弱と疲労が増して來たことを告げました。

わたしがそれを云つたときに、戸村ドクトルがひよつこり室外へ出て來ました。

「お早う。」と伯爵は挨拶して、抵抗しがたい氣高い決心を顔色に現はして、つか／＼とドクトルの前に進んで、「容態は今日も一向よくなつて居られんやうですね。」

「いや、たしかに快方に向つた兆候を認めます。」
とドクトルは答へました。

「あなたはこの熱病患者に對して、相變らず間違つた手當てをして居られる。」

「私は自分の職業の経験の命するところに従つて正當な方法を取つてゐるのです。」

「それでは、あなたの職業上の御経験といふことについて、一つの質問をお許し下さい。もつとも、私は二度と御忠告は申あげない。たゞお訊ねするだけです。失禮な申し分だが、あなたは現に學界の大中心地——例へば倫敦やパリといふやうな大都會から遙かに隔絶してをられる。で、あなたは、熱のために衰弱した患者に對して、ブランドー、葡萄酒、アンモニア、或はキニーネを與へると、大いに元氣を増進し、その衰弱を恢復するに著るしい効果があるといふことを御承知ですか、學界の最高權威と呼ばれる人達が盛んに唱へてゐるこの新説が、まだあなたのお耳に達しませんか。どうですか？」

「専門の醫師からさうした問をかけられたならば、私は喜んでお答へします。けれども、あなたは醫師ではない。それゆゑ私はあなたに御答へする必要を認めない。」

かうした酷い亂暴な挨拶で右の頬をうたれた伯爵は、ほんとうにクリスチャンらしく、すぐに左の頬を向けました。伯爵は大へんやさしい態度で云ひました。「左様なら、戸村さん。」と。

わたしの亡くなつた良人が、今も存命で伯爵と交際を結ぶなら、二人はお互ひにどんなに尊敬し合ふこととせう。

その晩、伯爵夫人が終列車で歸りました。倫敦から一人の看護婦をつれて來ました。この女は入部夫人といふ名前でした。その顔形や不完全な英語で、この女が外國人であるといふことが分かりました。齡は五十恰好で、背は低いけれど、強さうで、それに、何處か狡猾いやうなところが見ええました。顔は淺黒く、その灰色の眼は絶えず物を探つてゐるやうでした。

入部さんの態度は——わざと打解けないといふのでもないでせうが、大へん靜かで、つゝまじやかでした。口数は極めて少なくて、たゞ絶えず四邊を見廻はすのが癖でした。晚餐のときに、わたしの部屋へ誘つても、決して一しよには食べませんでした。(それは、疑ぐるのではないけれど、不思議でした。)

ドクトルの承認を経てから。入部さんを正式に看護の任に當てたいといふ伯爵の意圖でした。翌くる朝、わたしはドクトルの承認を求めに行きました。戸村ドクトルはたつた一人朝の食堂でわたしを待つてゐました。

「今度來た看護婦のこととせう、御國さ。」とドクトルは云ひました。

「ハイ。」

「それは、あの肥つた外國人の女房が倫敦から連れてきた女だといふぢやありませんか。あの外國人

は私に對して餘計な干渉ばかりしてゐる。御園さん、あの男は山師醫者ですよ。」

あまりといへば亂暴な云ひ方なので、わたしは腹が立つた。

「あなたは貴族のことをそんな風に仰しやつていゝでせうか。」

「ふむ、彼は自分の名前の上にハンドルをくつ付けてゐる山師醫者の一人ですよ。あんな手合は大抵伯爵だとか何とか云つてゐる。馬鹿／＼しい。」

「でも、あの方は、最高の貴族でないとしても、此邸の御主人の御友人ではありませんか。」

「まあいゝです、あなたはあの男を何とでも呼ぶがいゝ。それよりも肝腎の看護婦の件を極めてしまひませう。私はあの女を承認しませんよ。」

「あなたは、まだあの女を御覽にならないのに？」

「見なくても大抵わかつてゐます。その女は第一流の看護婦であるかも知れません。しかし、私の承認した看護婦ではない。私は男爵にもこのことを申しました。しかるに男爵は私の意見を用ひない。どうも致し方がありません。そこで私は一つの條件をつけました。即ち、私が見てあの女の看護振りに少しでも缺點があつた場合は、すぐに追出してしまふと。これは私が醫師の権利をもつて要求するのですから、男爵も承諾しました。さて、御園さん、私はあなたを信頼するに足る方と見込んでお頼

みますが、あなたは看護婦の行動を監視して、私があげる薬以外の薬品を鞠子さんに服用させるやうなことがないかを見てゐて下さい。あなたの所謂外國の貴族は、私の患者に山師醫者の療法（催眠をも含む）を施したがつて、たばたしてゐます。彼の女房もその目的を助けるに違ひない。分りましたか？ それちや二階へ行きませう。看護婦は二階にゐますか？ 私は病室へ入れる前に、彼女にも一言注意しておかねばなりません。」

二階では、入部さんが、獨りで窓外の景色を眺めてゐました。わたしはこの女を戸村ドクトルに紹介はせました。ドクトルは疑ぐる眼で見、探るやうな幾つかの問をかけました。入部さんは平氣でした。まづい英語で靜かに答へました。看護の心得についても、有らゆる間にすぐ答へて、決して相手に尻尾をつかませなかつたのを見ても、膽がすわつてゐて、附焼刃でないことがわかります。

わたし達は一しよに病室へ入つて行きました。

入部さんは、まづ患者の様子をじつて注意深く見て、奥さまに挨拶して、それから室内を少し取り片づけて、つゝましく隅の方に坐りました。奥さまは、知らない看護婦が來たので、當惑した御様子でした。鞠子さまがすやくと眠つてゐたので、誰も物をいひませんでした。

「昨晚はどうでした？」

とドクトルが小聲でたづねたので、
「別にお變りはありませんでした。」

とわたしが答へると、ドクトルは首肯して、出て行きました。奥さまも後へついて行きました。多分入部さんのことで御話なさるのでせう。

それから三四日といふものは、わたしはドクトルから注意された通り、入部さんの行動に眼を付けました。しばし、そつと、突然に病室へ入って行つたけれど、何も怪しい點がありませんでした。怪しい薬瓶も見なかつたし、伯爵と密談をするやうなこともありませんでした。

伯爵は急に用事が出来たといつて、倫敦へ行きました。それは、たしか、入部さんが来てから四日目のことでした。

出發前に、伯爵は奥さまにこんなことを云ひました。「こゝ四五日は、戸村氏を御信用なさつてもよろしいでせう。だが、それでも快方に向はれないときは、あの藪野先生には御遠慮なく、是非倫敦から然るべき名醫を御呼び下さい。戸村氏よりも鞠子さんが大切ですからね。このことは、私が名譽にかけて、誠心誠意かう御勧めします。」

奥さまは鞠子さまのことが心配で、ぶる／＼ふるへておりました。そして、伯爵が出發したあとで、

わたしに云ひました。

「御園さん、わたしはどうしたらいいでせう。わたしは、誰も力と頼む人がない。あなたは、戸村さんの手當てが間違つてゐるとおもひますか。戸村さんは先刻、もう大丈夫だから別の醫師を呼ぶ必要はないと云つてゐました。」

「戸村さんも信用の置ける方ですけれど。」とわたしは答へました。「伯爵の御忠告も御有理だと存じます。」

奥さまはふいと面をそむけました。そして、何故か、がっかりしたやうに、

「伯爵の忠告が有理ですかねえ！」

と獨りごとを云ひました。

伯爵は一週間ほど黒水莊を留守にしました。

その間に、鞠子さまは少しよい方に向ひました。戸村ドクトルの信用も恢復しました。ドクトルが奥さまにいはれるのには、もし他の醫師を呼ぶ必要を感じたときは、時を移さず自分から御勧めするゆゑ、それまでは安心してをられるやうに、と、いふことでした。

ところが、伯爵が發たれてから三日目の晩になつて、わたしは鞠子さまの容態が變つたのに氣附き

ました。容易ならぬ變化だとおもひました。入部さんもそれを認めました。このことについては奥さまへは何も云ひません。奥さまはそのとき、大へん疲れて、御自分のお部屋の長椅子に假睡をしてみました。

ドクトルはその晩に限つて、いつもより遅く夜の診察に來ましたが、患者をひと目見ると、サツと顔色が變りました。強いて平氣を装はうとしたけども、驚きと困惑をかくしきれないやうでした。

ドクトルは使の者をやつて、自宅から藥函を取り寄せて、すぐに消毒の準備をはじめました。そして、その晩は黒水莊に泊つて下さるることになりました。

「傳染性のものになつたでせうか？」

と、わたしはそつと訊ねました。

「どうもさうらしいです。」とドクトルは答へました。「明日の朝になつてみなければ、判然と申されませんが。」

二、悲しい變化

翌くる朝になつて、下男の一人が、倫敦の或る醫師に當てた手紙を持つて出發しました。大急ぎで

その醫師を迎へるためでした。使ひが發つてから三十分ほどして、入れ違ひに伯爵が歸つて來ました。

伯爵夫人は、御自分の責任上、すぐに良人を病室へ案内しました。それは當然のことだとわたしはおもひました。何故ならば、伯爵は鞠子さまのお父さまといつてもいゝ年寄りで、奥さまの伯母さまの良人ですから、婦人の病室へ案内したつて、別に差支はないわけです。ところが、戸村ドクトルは一應拒みました。けれどもドクトルは患者の手當てについて頭をなやましてをられた際ですから、飽くまでも伯爵の入室を拒絶するといふほどの氣力もなかつたやうです。

かあいさうな鞠子さまは苦しみで夢中でした。傍へ來る人を識別することも出来なくなつて、親切な人を敵と思ひ違へたりしました。定まらない眼付きで室内を見廻はしてゐました。ところが、伯爵が枕邊に立たれると、鞠子さまは、急に恐怖にうたれたやうな、物凄表情でじつと伯爵の顔を見すえました。あの物すごい形相をわたしは一生忘れることができせん。

それでも、伯爵は寄り添うて、まづ脈膊を診て、額を觸つて、注意深く患者の様子に目をつけてゐましたが、やがて、ドクトルの方へ向きかへりました。ドクトルは物をも云はずに突立ちました。その顔は怒りと驚きで蒼ざめてゐました。

「この變化はいつ起りましたか？」

と、伯爵はまづわたしに訊ねました。わたしはその時刻を云ひました。

「そのときに奥さまは此室にをられましたか？」

わたしは、奥さまが、をらなかつたことを答へました。ドクトルの注意で、奥さまは昨晚から病室に入ることを絶対に禁められてゐたのでした。

「御園さん、あなたも、入部さんも、この不幸な変化について十分御承知ですね？」

わたしは、それが傳染性のものになつたといふことを、ドクトルから聞いたとほりに答へました。

「これは正しくチブスです。」

と伯爵は断定しました。

かうした問答の間に、ドクトルは平靜に立ちかへつて、平常のしつかりした調子で、伯爵に云ひました。

「これはチブスではありません。私はあなたの干渉に抗議します。この病室内では、私以外には誰も今のやうな質問を發せられる権利がない。私は自分の能力を傾けて、自分の義務を行つたので……」

伯爵は黙つて病床を指さすことによつて相手の言葉を遮りました。それは、お前は能力を傾けたのではない。義務を完全に行つたのではないといふ意味を仕事で示したのでした。ドクトルの怒りはま

すます募りました。

「いや、私はたしかに自分の義務を行つて來ました。今日は倫敦からも醫師が來る筈ですから、私はその人の意見を求めます。醫者以外の人と協議することは出來ません。あなたは病室に居られる必要はない。どうぞ退去つて下さい。」

「いや、私は人道上の神聖なる理由によつて、此室へ來た者です。」と伯爵は云ひました。「それゆゑ、もしも倫敦の醫師の來方が遅いときは、私は同じ理由によつて、再び推参します。なほ、御注意しておくが、この熱はたしかにチブスに變化しました。これに對してあなたは責任がある。萬一この不幸な御婦人が死亡した場合は、私は法廷に立つて、あなたの無智と頑迷とが死亡の原因であつたといふことを證言するつもりです。」

これに對して、戸村ドクトルが何か云はうとした瞬間に、隣りの部屋へつゞく戸が開いて、奥さまが關に立ちました。

「わたしは、どうしても此室へ入らなければなりません。」

と奥さまは、おそろしい決心で、きつぱりと云ひました。

伯爵は奥さまを止めようとしないうで、却つて途を開きました。

戸村ドクトルは、わたしがびつくりしたほど、屹然となつて、いきなり閣下へ行つて奥さまを遮めました。

「實にお氣の毒です。鞠子さんの熱は傳染性のものに變化したやうです。今は、まだ何とも申されませんが、とにかく病室へはお入りならんやうに願ひします。」

とドクトルは云ひました。奥さまはそれでも入らうとして暫く争つてゐましたが、突然に、兩腕をだらりと垂れて、前の方へ仆れてしまひました。氣が遠くなつたのでした。伯爵夫人とわたしが二人がよりで、奥さまをドクトルの手から受けとつて、奥さまのお部屋に連れて行きました。いろいろ介抱してゐるうちに、奥さまはやがて氣が附きました。伯爵は心配して、廊下にうろくして、その知らせを待つてゐました。

わたしは奥さまの云附で、ドクトルを呼びに行きました。ドクトルはすぐに奥さまの御部屋へ行つて、鞠子さまの御病氣についていろいろ慰めて、また、間もなく倫敦からの醫師も到着するといふことを告げました。醫師を待つ間の數時間は、ほんとうにもどかしいおもひで過ぎました。旦那さまと伯爵は階下で何か相談をしてをられて、ときん／＼病室へ容態を問ひに人をよこしました。五時過ぎになつて、倫敦の醫師が到着しました。

その人は戸村ドクトルよりも若い人でした。眞面目で、自信力のありさうな人でした。この倫敦の醫師は、今までの手當てについて何う考へられたか、それは分りません。けれども、不思議なことに、これまでの経過について、戸村ドクトルに訊ねたよりも、わたしや入部さんに澤山の間をかけた。そして患者を診察しながら、ドクトルの説明を聞いてゐましたが、それにはあまり多くの注意を拂つてゐないやうな風でした。

「如何です、あなたの御意見は？」

と、しまひに戸村さんが訊ねますと、

「チブス。」と倫敦の醫師は答へました。「正しくチブスです。」

そのとき、外國生れのつゝましい看護婦である入部さんは、瘦せた淺黒い手を額にあて、意味ふかい微笑をわたしに送りました。

倫敦の醫師は、患者の取扱ひについて、わたし達に二三の有益な注意を與へて、また五日の後には再診に来るといはれました。そして戸村ドクトルと協議するために行かれました。回復期については、何も御意見がありませんでした。今のやうな状態では、何とも申しかねるといふことでした。五日間は憂慮のうちに過ぎました。

鞠子さまの容態はだん／＼わるくなつてゆくので、わたし達は寸刻も手を離すことができませんでした。

奥さまは一日に二度か三度でい／＼から病室へ入りたい。決して病床へは近寄らないで、たゞ鞠子さまの顔を見るだけで満足するからといつて、あまりだゞをこねるので、ドクトルもとう／＼、それを黙許しました。いくら理窟を云つても聴かれないと見たのでせう。奥さまは毎日病室を見舞はれました。よく約束を守つて、病床に寄り添ひたいのをじつと我慢して、離れたところから鞠子さまの御様子を見ては歸りました。わたしは亡くなつた良人の最後の病氣のときのことを思ひだして、身につまされました。

五日目に、倫敦の醫師が再診に來ました。診察の結果、わたし達はい／＼か希望を與へられました。チプスはその症状が發してから十日目が最も大切な岐れ目だから、その日にもう一度診察に來るといふことでした。

その後の五日間は、別に變つたこともなく、前と同じやうに暮しました。たゞ、その間に、伯爵が一日倫敦へ行つて、その日の晩に歸つて來ました。

十日目に倫敦の醫師は約束どほりに來ました。大慈悲の神さまは、わたし達の心配を除いて下さ

しました。

「危険は去りました。もう醫師の必要がありません。この上は皆さんの御注意と看護さへ行き届いて、をればいゝです。」

倫敦の醫師がさういつたので、わたし達はほつと安心しました。

その晩、わたしは亡き良人の説教集を開いて、「癒されたる病」といふ條を讀んで、これまでよりも一層ふかく精神的に幸福を感じました。

奥さまは、鞠子さまの危険が去つたといふよい知らせを聞いて、張りつめてゐた氣が急にゆるんだのか、殆んど病人同様になりました。戸村さんは、安静と轉地が必要だといひました。伯爵がこれに對して反對の意見を述べたために、お二人の間に少しの衝突がありました。

その後で、鞠子さまにあげる食餌の分量について、二人は又々大議論をはじめました。この度は、伯爵は何故か、すつかり自制力を失つて、再三ドクトルの怠慢を罵倒しました。ドクトルは伯爵に對するこれまでの不満が一時に發して、旦那さまにそのことを云ひますと、旦那さまも伯爵に加擔したので、ドクトルは、今後決して黒水莊の招聘に應じないといふことを宣言して、すぐさま出て行きました。そして、その翌くる朝に早速計算書をよこしました。

ドクトルの去つた日に、もう一つ困つたことが出来ました。わたしは、旦那さまに呼ばれて圖書室へ行きました。そこには伯爵が旦那さまと何か話していましたが、わたしを見ると、すぐに出て行きました。

旦那さまは大へんやさしく、わたしに椅子をすゝめて、次のやうなことをいはれました。

「御園さん、今日は家事取締としてのあなたに是非聞いて貰ひたいことがある。それは私が以前から決心したことで、迅くあなたに話すべきであつたが、病人が出来たりして、つひ延々になつたのです。簡単にいへば、私は此邸の生活を一變しようといふ決心をしたのです。しかし、あなたはこのまま家事取締として働いて貰ひたい。美智子や鞠子さんは、旅行に堪へるまでに回復すれば、すぐに轉地をさせる。帆城夫婦はその前に、此邸を去つて、倫敦の郊外に住むことになるでせう。さうして、客がみんな出てしまつた後は、私は當分の間出来るだけ経済して、客を招ぶことは見合わせるつもりです。あなたを非難するわけぢやないが——この邸の経費は非常に膨張して、殆んど堪へがたくなつてゐる。それゆゑ、こゝで大改革を行はねばならんが、私はまづ馬を賣つて、それから召使にもみんな

暇をやる。あなたも知つてのとほり、私は物事を半分で我慢するといふことのできない性分で、徹底的にやらねば気が済まん。それで、無用の人間を全部解雇します——明日の今頃までに。」

話があまり突然なので、わたしは呆氣にとられました。

「それでは、わたしの下に使つてゐる人達を、前振れなしに暇をやるといふことを、わたしから申し渡すのでございますか？」

「さうです。實は今月中にこの邸を引き拂はなければならぬ。主人のゐない邸に召使共をころ／＼遊ばせておいたつて仕様がなす。」

「でも、旦那さまが此邸にゐらつしやる間は、料理番の必要はございませう。」

「松は煮炊きが出来る——彼女を止めておきなさい。晚餐に客を招ぶこともないから、特に料理番をおく必要はありません。」

「松は一番愚かな召使ですが、あれでお間に合ひませうか？」

「何でもいゝから、彼女を止めておきなさい。洗濯などは、そのとき／＼に村の女を雇へばいゝ。何しろ極端に経費を節約しなければならぬ。今はあなたの意見を聞くために呼んだのではないから、何でも私のいつたとほりに實行して下さい。明日は、松以外の召使をみんな出してしまひなさい。松は

馬車馬のやうに強い女だから、馬車馬のやうに働らかせることが出来る。」

「では、旦那さま、あの者だちに、一ヶ月前に解雇するといふことを豫告なかつた代りに、一ヶ月だけの給料を餘分におやり下さるやうにお願いします。」

「よろしい、あれ等がゐなくなれば、女中部屋の浪費と大食がゐなくなるから、一ヶ月の給料を餘分にやつても、結局損はあるまい。」

この最後の言葉は、わたしの今までの取締りが、いかにも粗漏であつたのを非難されるやうに聞えて、いやな氣がしました。

「わたしはもう、何も申しあげません。萬事あなたの仰せつけどほりに取り計ひます。」

さういつて、わたしはお辭儀をしました。心には最も少ない尊敬しかありませんでした。そして、そこを退りました。

翌くる日、わたしは、召使だちにみんな暇をやつてしまひました。旦那さまは馭者や馬丁に暇を出して、倫敦へ歸しました。馬も一頭だけ残して、他はみんな賣つてしまひました。この廣い邸に残つたものは、奥さまとお客様だちの外には、旦那さまと、わたしと、松と、庭師だけでした。庭師は自分の小舎に住んでゐて、残つた一頭の馬の手入れをするやうに命じられました。

邸は内も外も急にさびしくなりました。奥さまは御自分のお部屋に引籠り、鞠子さまは子供のやうに頼りない病人であるし、ドクトルは憤つて黒水莊から手を引いてしまつた今は、わたしは氣が沈んで、常のやうに快活な心持で仕事の出来なくなつたのも無理はありません。

わたしは、ひたすら奥さまや鞠子さまの御全快をいのりました。そして、わたしも出来ることなら、この黒水莊を去りたいとおもひました。

* * *

わたしは、とう／＼黒水莊を去りました。それは次のやうな事情から來たのです。召使だちに暇をやつてから二三日目に、わたしは旦那さまに呼ばれました。そして、わたしの家政振りの行届かないことをさん／＼に責られました。あまり不當な、ひどい言葉なので、わたしは直ぐに出てしまはうかとおもひましたが、一生懸命に自制心を奮ひ起して、犠牲になる覺悟で、やつと踏み止まりました。

そのあとで、又旦那さまから呼ばれました。そのときは、旦那さまは伯爵と何か相談をしてゐました。旦那さまがわたしに云はれるには、奥さまと鞠子さまは、カンペーランドの龍茗莊——奥さまのお生家でこの秋を過されることになつた。しかし、その前に、トルケーの温泉場でしばらくお二人を

静養させたい。伯爵もそれに賛成した。ところが、第一の難問題はトルケーに適當な家を借りることであるが、その選擇は、どうしても家事に經驗ある者が先發して、間取りや建具などの工合をよく見てきめなければならぬ。伯爵夫人にそのことを願はうとおもつたが、夫人は病人の傍が離れられないし、伯爵も、亦旦那さまと事業上の大切な相談があつて、他所へ出るといふことは出来ないから、わたしにトルケーへ行つて、家を借りる役目を引うけてくれ、と、いふことでした。

旦那さまは、借りるべき家についての條件を書きつけた覚え書をわたしにくれました。その覚え書を読んでみると、大さうむづかしい條件ばかり並べてありました。家賃は極端に低く見積つてありました。何處の温泉場にだつて、これだけ設備の整つた、こんな安い家賃の家が見附かる氣づかひはありません。

「かういふ條件ですと、トルケーで家を借りることはむづかしいとおもひます。」

わたしはさういつて使命の困難を訴へたけれど、

「そんな筈はない。まア行つてご覧なさい。」

と旦那さまが云はれるので、わたしは絶望と知りつゝも、生命に従はなければなりません。わたしは翌くる朝トルケーへ出發しました。なるべく御主人の意に適當な家を求めたいとおもつて、

一生懸命に探したけれど、勿論さういふ家は見つかりませんでした。又、たとひ完全な家が見つかったとしても、家賃の件でわたしの與へられた権限はあまり低いものでした。わたしは、あきらめて黒水莊へ歸つて來ました。

「どうも適當な家がございません。」

わたしは旦那さまに報告しました。旦那さまは、そんなことはどうでもいゝといつた風に、わたしの報告は氣にも止めないで、しきりに他のことに思ひ耽つておりました。

「伯爵夫婦は此邸を出てしまつた。」

と旦那さまはいひました。伯爵夫婦は、わたしの短い不在の間に、この黒水莊を去つて、倫敦郊外のセント・ジョンの森に一軒の家を借りておいたのがあつたので、今度急にそこへ引移つたといふことでした。

なぜ、急に引移つたのか、旦那さまはその理由を何もいひませんでした。そして伯爵が特にわたしによろしくと申し残したといふことでした。

「伯爵夫人がなくなつて、美智子が寂しいから、彼女には松をつけておきました。そのために階下の用事が不便になつたから、村の女を一人雇ひました。」

と旦那さまはいひました。

わたしは驚きました。炊事に働く女中を男爵夫人のお相手にするといふやうなことは、あんまりひどいとおもひました。

わたしはとりあへず、奥さまのお部屋へ伺はうとして二階へ行きました。廊下で松に會ひました。早速奥さまの御容態を訊ねると、松やは、そつけない、人を馬鹿にしたやうな返事をしました。この女は以前よりはたしかにわたしを軽しめてゐるやうでした。

四、残された歎き

奥さまは、この四五日の間に、めつきり健康を回復されたやうに見えました。もちろん、まだ衰弱があつて、神経は高ぶつてゐたけれど、獨りで病床から起きて、獨りでそろ／＼と歩くのに差支ないくらゐになつてゐました。わたしに助けさせて衣替をなさいました。そして、大へんに鞠子さまのことを御心配なされて、わたしと一しよに鞠子さまの病室へお見舞に行きました。

廊下で旦那さまに會つたので、わたし達はおもはず立ちどまりました。旦那さまはわたし達を待つてをられたやうでした。

「美智子、お前は何處へ行く？」

と旦那さまは問ひかけました。

「鞠さんの部屋へ行きます。」

「行つたらお前は失望するだらう。」と旦那さまはいひました。「鞠子さんはもうこの邸にはゐないよ。」

「エツ、ゐないんですつて？」

「もうゐない。昨日の朝帆船君と一しよに行つてしまつた。」

奥さまは、この驚きに堪へるには、あまりに衰弱してゐました。奥さまは眞蒼になつて、よろ／＼と廊下の壁に倚りかゝつて、黙つて旦那さまの顔を見つめました。

わたしは、あまりのことに言葉も出ませんでした。

「旦那さま、それはほんとうでございますか？」

と、やつと訊ねた。

「私は嘘はいはない。」

「鞠子さまは、あの御病體で？ 奥さまに一言の御相談もなく？」

旦那さまが、何か云はうとするまへに、奥さまが少し元氣を回復しました。

「そんな筈はありません。」と奥さまは、壁から二三歩離れて叫びました。「ドクトルは何をしてゐました？ 鞠さんが出て行くときにドクトルは何といひました？」

「戸村君は呼ばなかつた。だから此邸に居合さなかつた。」と旦那さまが答へました。「あの醫者は自分勝手に引上げてしまつた。それは、鞠さんが獨り歩きができるほど回復したといふことを證明してゐる。美智子、お前はなぜ、そんな恐い眼付をしてゐる。私のいふことが嘘だと思ふなら、鞠子さんの部屋へ行つてみるがよい。他の部屋もみんな調べてみるがよい。」

奥さまとわたしは、とにかく鞠子さまの病室へ行つてみました。そこはもう空室になつて、松がいがそがしく室内を取片づけてゐました。他の部屋をも扉々に開けてみましたけれど、どの部屋にも、誰もゐませんでした。

「あゝ、鞠さんは行つてしまつた。もう、誰もゐない。御園さん、あなたはどうぞわたしの傍を離れないで下さい。わたしの傍にゐて下さい。」

奥さまはさういひながら、廊下へ出ました。廊下には旦那さまが待つてゐました。

「あなた、それはどうしたのです。お願ひですから聞かして下さい。どういふわけで鞠さんは出て行きましたか？」

「鞠子さんは昨日の朝、大へん元氣が出て、獨りで起きて獨りで衣替をした。そして帆城君が倫敦へ行くといふことを聞いて、一しよに行つたのだよ。」

「倫敦へ？」

「鞠子さんは龍茗莊へ歸るのだけれど、どうせ倫敦を通過するのだから。看護婦もついて行つた。」

「鞠さんはなぜ、わたしを置きざりにして、龍茗莊へ歸つたのでせう？」

「お前の叔父さまが、お前を引きとる前に、是非鞠子さんと會つて相談をしたいといふお手紙であつた。鞠子さんが病氣にかゝつて間もなく届いたあの手紙は、お前も讀んだのだから記憶えてゐるでせう。」

「記憶えてをります。」

「あの手紙を記憶えてゐるなら、そんなに驚くことはない筈だ。お前は龍茗莊へ歸りたいと思つてゐる。それで、鞠子さんは、お前を龍茗莊へ引きとるについて、下相談のために急いで歸つたのだ。」

かあいさうな奥さまの眼は、涙で一杯でした。

「鞠さんはこれまで、たゞの一度だつて、わたしに無断で、わたしの傍を離れたことがなかつたのだ。」

「鞠子さんだつて、お前に別れの挨拶をしたいと思つたにちがひない。」と旦那さまはいひました。「しかし、お前にそれを告げて、お前に止められるのを恐れたのだ。お前に云へば、お前が引きとめるといふことを鞠子さんはよく知つてゐた。お前が泣いて困らせるといふことを鞠子さんはよく知つてゐた。これで、鞠子さんがお前に無断で出て行つたわけが分つたでせう。私は氣がくさくさして仕方がないから、階下へ行つて葡萄酒でも飲まう。お前はまだ不平があるなら食堂へ来て云ひなさい。」旦那さまはさういひすて、さつさと階下へ降りて行きました。旦那さまの今日の様子は變つてゐました。奥さまと同じやうに、ときく大へん神経が充奮してゐるやうでした。

わたしは奥さまに、お部屋へ入ることをおすゝめしたけれど、駄目でした。奥さまは、まるで氣狂になりかけてゐる女のやうな眼付をして、廊下を歩きながら、

「鞠子の身に何かわるいことが起つたにちがひない。」
こんな獨りごとをいふのでした。

「鞠子さまは平生とも御體があつたやうにしつかりした方ですから、大丈夫でございませう。何も、わるいことが起つたといふわけではないかとおもひます。」

「わたしは鞠さんの後を追かけて行きます。わたしは鞠さんの行つたところへ行かなければなりません。」

ん。鞠さんが安全に、生きてゐるかどうか、わたしのこの眼で見とゞけなければなりません。サア、御園さん、わたしは男爵に云ひますから、一しよに階下へ来て下さい。」

わたしは、旦那さまに叱られはしないかとおもつてためらひました。けれども、奥さまはわたしの手を引張つて、ぐんぐん階下へつれて行きました。

旦那さまは食堂で葡萄酒を傾けてゐましたが、わたし達を見ると、怒りの眼を据えました。

「お前たちは、この邸に何か秘密でも行なはれてゐると思つてゐるのだらう。秘密などは何もない。皆んなが知つてゐることの外には何もない。」

さう怒號つて、また杯を満たしました。

「鞠さんでさへ旅行して差支ないなら、わたしにも旅行ができます。」と奥さまは今までにない確かさで、きばつりといひました。「どうぞお許し下さい。わたしは鞠さんが心配ですから。午後の汽車で、わたしも鞠さんの行つたところへ行きます。」

「明日まで待ちなさい。私は今夜の郵便で帆船君へ問ひ合せよう。先方から賛成の返事が來たらお前はすぐに行くがよい。帆船君だつて反對はあるまいとおもふ。」

旦那さまは、奥さまの顔を見ないで、杯のなかの葡萄酒を見つめながらかういひました。こんな、

上流の紳士にふさはしからぬ不作法を見せつけられて、わたしは悲しくおもひました。

「なぜ、伯爵にお手紙をあげるのですか？」

と奥さまは、ひどく驚いた風で、訊ねました。

「いや、私は、たゞお前の列車が倫敦へ着く時間を教へてやるだけだ。」と旦那さまはいひました。

「さうすると、帆船は停車場に出迎へて、お前をセント・ジョンの森の家に案内するだらう——お前を伯母さまの家で休ませるために。」

奥さまは、わたしの腕をかたく握りました。その手はぶる／＼ふるへました——なぜだか、わたしには、そのわけがわかりませんでした。

「伯爵に出迎へてなんか頂かなくてもよろこびます。わたしは倫敦で休みたくありません。」

「いや、お前は休まなければなりません。ガンバーランドまで汽車に揺られるといふことは體のためによろしくない。是非一晩倫敦で休んで——休むにしてもお前がホテルに泊るといふことは、私が好まない。その際は帆船君の家に泊るといふことは叔父さまも御承知のことだから、都合だ。さうだ、こゝに私は叔父さまの御手紙を持つてゐる。この御手紙にも倫敦で帆船家に休息せよといふことが書いてある。サア、読んで御覽。」

奥さまは手紙をちらと見て、すぐにわたしの手に置きました。

「御園さん、読んで下さい。わたしは自分で自分のことが分らなくなりました。もう何も讀めない。」

わたしは奥さまにそれを讀んであげました。次のやうな、極めて率氣ない手紙でした。

最愛の美智子よ、御都合次第にて、いつにても御歸りなされるべく候。途中は倫敦にて下車し、伯母さまの家にて御休みなさるべく候。鞠子の病氣は、實に氣の毒に候。草々。笛森貞亮

手紙はこれだけでした。

「わたしは倫敦で下車しません、倫敦で休みたくはありません。ですから、伯爵へお手紙をあげることはお止め下さい。お願いでございます。」

旦那さまは、ふらく／＼した手附で酒瓶を取つて、また杯を充たさうとすると、杯が仆れて、酒が食卓に流れました。

「眼がくらんで来た。」

と、もつれた舌で獨りごとを云つて。杯を立て、また酒を注ぎなほして、一息に呑み乾しました。旦那さまは酒が頭にまはつて来たらしく、顔も仕草も凄味を帯びて来た。わたしはおそろしくなりました。

「なぜ帆船君に手紙をやつてゐるのか。そのわけを云へ。」

旦那さまが、だしぬけに怒號つたので、わたし達はびつくりしました。

「お前が倫敦で、叔父さまが指定した家——伯母さまの家よりも、もつと安樂に眠れる家は外にありはしない。嘘とおもふなら、御園さんにも誰れにでも訊いて見るがよい。」

それでも、奥さまは、倫敦で下車するといふことにしつこく反對しました。伯爵に手紙を書くことを止めるやうに嘆願しました。

「止めい！」旦那さまは、わたし達にぐるりと脊をむけて、いひました。「お前が自分のことを自分でどうしていか分らない場合に、他の人がお前の爲に最善の方法を考へてやるといふことは當然ではないか。臆立はすつかり出来てゐる。お前はたゞ、鞠子さんが前にしたことをすればよいのだ。」

「そんなら、鞠さんは帆船伯爵の家に泊つたのですか？」

「さうだ。鞠子さんは昨夜伯爵の家に泊つて汽車の疲れを休めた筈だ。お前も明日の晩は伯爵の家に泊るがよい。あまり私の邪魔をすると、私はお前を龍茗莊へ歸すのが厭になるよ。」

さう吐きだすやうに云つて、旦那さまはすつくと起ちあがつて、廻廊の方へ行つてしまひました。「奥さま、旦那さまは大へん酔つてゐらつしやるやうですから、あなたはお部屋へお歸りあそばせ。」

奥さまは、がっかりして氣が挫けた風で、黙つてわたしのいふとほりになさいました。

二階へあがつてから、わたしは一生懸命に奥さまのお心を慰めるやうにしました。

「聖書にも「樹は果によりて知らるゝなり」とあるではありませんか。鞠子さまの御病氣におかゝりになつた。めから、伯爵さまはあのとほり御親切にして下さいました。ですから、決して御心配あそばすな。戸村ドクトルとの間に誤解が起つたといふことも、つまり伯爵さまが鞠子さまの御容態について御心配なすつた結果でございます。」

「誤解ですつて？」

と、奥さまは不思議さうに訊ねられました。奥さまはあのことを御存知なかつたのです。わたしは、ドクトルが伯爵と意見が衝突したために、永久に黒水莊の需には應じないといつて、去られたことを詳しくお話しました。

「あゝ、わるい、わたしが思つたよりもわるい。」と奥さまは、惱ましげに室内を歩きつ戻りつしながらいひました。「伯爵は、戸村さんがゐれば、鞠さんの旅行に反對することをおそれて、わざとドクトルを憤らせて出て行くやうに仕向けたのです。」

「奥さま、それはあなたのお思ひちがひではないでせうか。」

「いゝえ、さうぢやない。誰が何といはうと、鞠さんが自分から進んで伯爵の家に行つたとは、わたしは信じません。鞠さんは伯爵の良にかゝりました。あゝ、おそろしい。あんな人の家で、飲食をしたり、眠つたりすることは、わたしにはおそろしくて出来ません。けれども、鞠さんが行つたらうへはどんな危険なところへでも、わたしは行かなければなりません。わたしは行きます。」

「鞠子さまは、今日は倫敦を發つて、カンペーランドへお歸りになつたでせう。」

「わたしは、さうは思はない。鞠さんはまだ伯爵の家におますよ。もし鞠さんがカーペーランドへ歸つたとすれば、わたしは伯爵の家には泊りません。わたしは鞠さんの次に親しくしてゐた女——わたしの家庭教師であつた間世夫人の家に泊ります。あの女も、今は倫敦の郊外に住つてゐます。もつとも、わたしは、その女の家も知らないし、どうしたら伯爵の毒手を免れるかといふこともわかりません。けれども、いよく鞠さんが倫敦にゐないとすれば、何とか方法がつくでせう。わたしは今、間世夫人に手紙を書きますから、それを今夜の郵便で倫敦へ發るやうにして下さい。男爵の手紙も今夜の便で行くやうに、わたしの手紙もきつと今夜の便に間に合ふやうにして下さい。わたしは此邸の郵便袋は信用ができないから、あなたはわたしの秘密を尊重して、わたしを助けて下さい。御園さん、これがわたしの最後のお願ひですよ。」

わたしはためらひました。どうも不思議でならない。奥さまはこの頃あまり御心勞がつつたので少し氣が變になつたのではないか、とさへおもひました。御主人にかくして、奥さまの御手紙を取扱ふといふことは、わるいには違ひないけれど、外ならぬ間世夫人へ宛てたお手紙であり、且つは最後のお頼みとまで仰しやつたことゆゑ、わたしはそのお頼みをお断りすることはできませんでした。

神様に感謝します——後に起つた出来事から考へますと、わたしはあのとときに、奥さまのお頼みを實行して、ほんとうによいことをしたのでした。

やがてお手紙が書かれて、わたしの手に置かれました。わたしはその晩、村のポストへ首尾よくそれを入れました。

五、わかれ

旦那さまが、その日の残りをどうして送られたか、わたしは知りませんでした。

晩には、奥さまのお望みで、わたしは奥さまのお部屋の隣りの部屋に寝みました。間の戸は開けはなしておきました。人氣の稀な邸の夜は怪しく恐ろしかつたけれど、奥さまのお傍近くにいるとおもへば、氣が強いのでした。

奥さまは遅くまで起きてゐて、舊いお手紙を讀んだり、焼きすてたり、抽斗や棚のあたりを取り片づけたりしました——二度とこの黒水柱へは歸らぬ方のやうに。

お床へ入つてからも、大へん寝苦しいやうな御様子でした。夢のなかで叫ばれたことも四五回でした。一度などは、あまり聲が大きかつたので、御自分で眼を醒されました。どんな夢であつたか、わたしには告げない方がいゝと思召してか、何も仰しやいません。わたしの身分では、それをお訊ねするといふこともできません。わたしはたゞ、眞から奥さまの御身の上をなげきました。

翌くる日は、好い天氣でした。

旦那さまは、朝餐のあとで、二階へ来ました。そして、倫敦行きの列車は十二時五分にわれ／＼の停車場へ入るから、十二時十五分前に馬車に乗つて邸を出るやうにと指圖しました。

「私はこれからちよつと外出する。お前が出る前には歸つて来るつもりだが、已むを得ないことのために、もしも歸りが遅れたら、御園さんに停車場まで送つて貰ふがいゝ。」

旦那さまは、いら／＼して部屋の中を歩きながら、早口にかういひました。奥さまは旦那さまの歩くとほりに、じつとそのお顔を見てゐました。旦那さまはそれに對して一度も奥さまの方をふりかへりもしないで、さつさと戸口へ行きました。

奥さまは戸口のところで、手をさしのべて旦那さまを止めて、

「これつきりお目にかゝれません、これがお別れです。永のお別れです。わたしが心からあなたを許してあげるやうに、あなたもわたしを許して下さいませんか？」

旦那さまの顔は死人のやうに蒼ざめました。冷たい汗の滴が禿げあがつた前額から落ちました。

「いや、私は歸つて来る。」

さういつて、旦那さまは別れの言葉で弾きだされたやうに、室外へ出て行きました。

わたしはたゞの一度だつて、旦那さまに感心したことはありません。そして今は、この人から麵麩を得て、この人に使役されたといふことを耻しいとさへおもひました。

やがて時間が来たので、奥さまとわたしは馬車に乗りました。旦那さまはとう／＼歸つて来ませんでした。わたしはそのお歸りを最後の一分間まで待つたけれど——駄目でした。

停車場へ着いたときは、列車の入るまで、あと二分しかありませんでした。庭師（わたし達の馬車を取つて行つた男）が、行李の始末をしてゐる間に、わたしは切符を買ひました。

奥さまが列車に乗りこんだときは、乗車をうながす鈴がしきりに鳴つてゐました。

「御園さん、あなたと一しよだつたら、どんなにいゝでせう。」

奥さまは、さういつて、わたしの腕をかたく握りました。

もしも時間に餘裕があるなら、その瞬間の心持が前の日からわたしに起つたなら、わたしは何を指しても、すべての準備をととのへてお伴をしたでせう。けれども、發車間際では、もう時が遅い。

「あなたは、わたしにも鞠さんにも大へん親切にして下さつて、ありがたう。あなたの御親切は、わたしが生きてゐる間わすれませんよ。左様なら——神様はあなたを祝福して下さいます。」

二度と會へない人のやうに、さういはれたので、わたしはおもはず涙が出ました。

「左様なら、奥さま。」とわたしは手を列車の窓へ差伸べて、元氣をつけるやうに云ひました。「ちよつとお別れでございます。奥さま、今にお幸福が來ます。わたしはそれをお祈りしてゐます。」

奥さまは、首を振つて、身をふるはせました。そして御自分の座にすわりました。車掌が列車の扉をしめきりました。

「あなたは夢といふものを信じますか？」と奥さまは窓へ顔を寄せて、いひました。「昨夜わたしは、今までに見たことのない變な夢を見ました。あれを思ひだすと、今でもぞつとします。」

わたしが何か云はうとしたときに、汽笛がけたましく鳴つて、列車がうごき出しました。奥さまの蒼い、静かなお顔が、これを最後とわたしの方へむきました。そのお顔は、列車の窓から、悲しげ

に、そして嚴そかに見えました。名残りを惜むやうに手を振りました——やがて見えなくなりました。

六・偽　　瞞

その日停車場から歸つてから、わたしは自分の部屋で、今まで滞つてゐた家政上の事務の整理に取りかゝつて、五時頃にやつと片がつきました。それから、氣を落ちつけるために、亡き良人の説教集を取りだして讀みました。ところが、不思議なことには、わたしの心は少しも定まらないで、想像は、この敬虔な、人を鼓舞する書物の上を通りこして、あらぬ方ばかり走ります。こんなことは今までつひぞ一度もなかつたのに、今日はどうしたのでせう。きつと奥さまのことが氣にかゝつてゐるから、こんなに胸が騒ぐのでせう。さう思つて、わたしは本を傍へやつて、庭の方へ出てみました。家の角を廻つて、花園の方へ行つてみると、そこに一人の知らぬ女が屈んで花を摘んでゐたので、わたしはびつくりしました。

その女はわたしの聲音を聞きつけて、此方を振りむきました。驚いたことには、それは倫敦へ行つた筈の入部さんでした。わたしは殆んど口も利けませんでした。入部さんは、常のやうに落ちついて、立つてゐました。手には摘み集めた草花を持つてゐました。

「どうかございませんか、あなた。」
と入部さんは静かにいひました。

「あなた、こゝにゐらつたの？」とわたしは叫びました。「倫敦へはいらつしやらなかつたのですね？ カンペーランドへも行かなかつたのですね？」

入部さんは、皮肉な微笑をうかべて、草花を鼻へあてました。

「いゝえ、わたしは黒水荘の外へは出ませんでした。」

わたしは、やつと驚きを静めて、他の問をかけました。

「鞠子さまは何處へいらつしやいました？」

この問を聞いて、入部さんは、つこり笑ひました。

「鞠子さまもやつぱりこの黒水荘にゐらつしやいますよ、あなた。」

この驚くべき答へを聞いたときに、わたしの思ひはすぐに奥さまの上に立ちかへつて、ぎよつとしました。わたしは自分の無能が口惜しくてたまりませんでした。わたしがたつた今知つた事實を、四時間前に知ることが出来たなら、わたしが多年苦勞して溜めた貯金の全部を投げだしてもいゝとおもひました。

「あら、旦那さまがお歸りですよ、あなた。」

入部さんにさういはれて、ふと顔をあげると、旦那さまが、馬鞭で草花を叩きながら歸つて來たのでした。

旦那さまは立ちどまつて、今度は鞭で御自分の長靴を叩いて、眞から可笑さうに、からりと笑ひました。傍の樹にとまつてゐた小鳥が、その聲に驚いて、飛び去りました。

「やア、御園さん、」と旦那さまはいひました。「あなたは、とう／＼発見しましたね？」

わたしは返事をしませんでした。旦那さまは入部さんの方へ向いて、

「あなたは、いつ此園へ出ました？」

「三十分ほど前からでございます、旦那さま。奥さまが倫敦へお發ちになつた後は、自由に室外へ出てもよいと、あなたが仰しやつたではありませんか。」

「いや、私はあなたを賣めたのぢやない——たゞ訊いてみただけです。」

と旦那さまは、少し考へながらいひました。そして、またわたしの方へ向きなほつて、

「御園さん、鞠子さんが此邸にゐるといつたら嘘のやうでせう。あなたは信ずることが出来まい。サア、此方へ來て御覽。」

旦那さまは皮肉にさういつて、家の方へわたしを導きました。入部さんもついて来ました。鐵の門を抜けると、旦那さまは、鞭で家の中翼の方を指しました。そこは舊い建築で、平生は使はない部分であります。

「御覽なさい。あすこには舊いエリサベス時代式の寢室が並んでゐる。鞠子さんは今、あすこで居心地よく安全に寝んでゐる。入部さん、あなたは鍵を持つてゐる筈だね。それなら御園さんをあすこへ案内して下さい。種も仕掛もないところを、この女の眼ですつかり見るやうにしてやるがよい。」

わたしはどうしていか分らなかつたけれど、高尚な感情と教へとで育てられたわたしとしては、この場合に正しい道を取るのを躊躇するわけはありませんでした。わたしは、自分に對する義務、奥さまに對する義務からいつても、こんな邪曲な虚偽でわたし達を欺くやうな耻かしい人に使はれてゐることは、一刻も堪へられません。

「旦那さま、わたしは内々であなたに申しあげたいことがあります。」とわたしはきつぱりといひました。「それを申しあげたあとで、鞠子さまのお部屋へ伺ひます。」

わたしはちよつと頭を下げて、入部さんにこゝを外して貰ふやうに合圖をしました。入部さんは、つんとして花束を鼻にあて、ゆつくりと家の戸口の方へ歩いていきました。

「サア、話があるなら、聞ませう。」

と旦那さまは、慥食にいひました。

「外ではありませんが、わたしはお暇がいたゞきたうございます。」

旦那さまは、その一番猛悪な眼付でわたしを見据えながら、粗々しく衣舞に手を突こんで、

「何故？」と問ひました。「その理由を云つて下さい。」

「このお邸で起つた出来事について兎や角申しあげることが、わたしには出来ません。わたしは人を裁る考へはありません。わたしはたゞお願いいたします。奥さまに對する義務から申ししても、わたし自身に對する義務から申ししても、もはやこのお邸に止まらない方がよいとおもひます。」

「それは、疑ひの眼をもつて私を見てゐるからだ。あなたの考へは私によく分る。あなたは自分の賤しい、低い見解で私の行動を見てゐる。しかるに、私が美智子に對して行つたことは、偽りとしても、罪のない偽りで、つまり彼女のためをおもつてやつたことです。彼女の健康上、早く轉地するといふことは最も緊要なことであつた。ところが、あなたも知つてのとほり、彼女の性質として、鞠子さんが此邸にゐる間は、決して自分一人轉地することを承諾する氣づかひがない。それで、私は已むを得ず、今度のやうな策を彼女の利益に設けたのです。私の心は公明正大だ。人が何と見ようとも構はな

い。あなたは暇が欲しいといふなら、暇をやりませう。あなたくらゐの家事取締は、他に探せばいくらでも得られる。あなたの都合のよいときに、勝手に出るがよい。しかし、念のために云つておくが、此邸を出たあとで、私や私の行動について悪聲を放つて貰いたくない。眞實を語るなら構はないが、眞實以外のことを語つてはいけない。もしもつ、まらぬ風評を立てたりすると、あなたはひどい目に遭ひますぞ。サア、あなたの眼で鞠子さんを御覽なさい。病室は變つたけれど、以前と同じやうに鄭重に取り扱はれてゐるといふことを御覽なさい。美智子の件にしても、醫者がすでに一日も早く轉地の必要あることを言明したのです。それはあなたも知つてゐる筈だ。これらのことをよく考へて、なほ私の行動に不審があるなら、何んな悪口をいはうと、それはあなたの自由です。」

旦那さまはいら／＼して、そこらを歩き廻つて、鞭で空を打ちながら、これ等の言葉を息もつかすにはげしく吐き出しました。

けれども、わたしは旦那さまのなされた残忍と誹詐について、わたしの考へをゆるめることが出来ませんでした。

「わたしは此邸に勤めてをります間は、何でもあなたの御命令にしたがつて、あなたの御行動に對しては兎や角申しあげません。さうして暇をいたゞいた後は、自分と關係のない事柄について批評が

ましいことを口外する考へは少しもございません。」

「それで、あなたはいつ此邸を出るつもりです？」と無遠慮に問ひました。「私はあなたを止めようとならないから、自由に出て行つて下さい。かういふことに對しては、わたしはいつでも公明正大な處置を取つてゐる。で、あなたはいつ出るつもりです？」

「お邸の御都合で、成るべく早く暇をいたゞきたうございます。」

「私の都合などに遠慮しなくてもよろしい。私は明日の午前にはどうしても他へ出かけなければならぬから、あなたの件は今晩でも取極めることができる。あなたはいつたい他人の都合を考へるなら、私の都合よりも、むしろ鞠子さんの都合を考へたらどうです。入部さんを頼んだ期限も今日で切れるわけだから、あの女も今晚倫敦へ歸るかもしれない。それに、あなたもすぐに出るとすれば、明日から鞠子さんを看護する人がなくなるわけです。」

こんな重大な時機に鞠子さんを見捨てるといふことは忍びない。それで、わたしは、第一には、すぐに入部さんに代つてわたしが鞠子さまの看護にあたること、第二には、戸村ドクトルを元々どほり黒水莊へ出入りさして頂くやうにお願いするといふ條件を旦那さまに確かめた上で、當分の間勤務を繼續することにしました。そして、出るときは一週間前に、倫敦にゐる權田原家の法律顧問にその旨

を通告して、後任者を見つckerだけの餘裕を興へるやうに取り計るといふことを約束しました。

その話が済んでから、わたしは入部さんのゐる方へ行きました。あの變り者の、外國生れの女は、例のごとく落ちついて、戸口前で待つてゐました。そして、わたしを鞠子さまの病室へ導きました。

家に入らうとするときに、旦那さまは背後からわたしを呼び戻しました。そして、

「あなたは何故暇が貰ひたいのか？」

いきなり、こんな問ひをかけました。そのことについては、今話が済んだばかりなのに、何故また同じことを繰り返すのでせう。わたしは何と答へていゝか分りませんでした。

「何故此邸を出るのか。何故私から暇を取らねばならぬのか。あなたが出るときに、私はきつとその理由を極めてもらはなければならぬ。何の理由で？ 家族が離散したといふことのために？ 多分さうでせう？」

「それが理由だと申しても、別に差支へはないかとおもひます。」

「よろしい。それで結構。つまり家族が離散した結果として、あなたは此邸を出られるのです。」

わたしがそれについて何も云はない前に、旦那さまはフイと彼方へ行つてしまひました。言葉も變でしたが、その行動も變でした。わたしは不思議におもひました。

入部さんのゐるところへ戻つたときは、この落ちついた女でさへ少しづれ／＼してゐました。

「やつとお済みですね。」

さういつて、入部さんは瘦せた肩を外國風に揺ぶりました。それから、今まで人の住まなかつた翼の方へ行つて、階段をのぼつて、廊下のれっ戸を鍵であけました。そこから、エリザベス時代式の寢室がいくらかも並んでゐます。その戸は、わたしが黒水莊に務めてゐる間、たゞの一度も開けたことのない戸でした。

わたし達は舊い廊下をあるいて行きました。入部さんは第三番目の戸口の前に立ちどまつて、

「鞠子さまは此室にゐらつしやいますよ。」

さういつて、鍵をわたしの手に置きました。わたしは室へ入る前に、旦那さまとの御約束に基づいて、今から御病人の看護は一切わたしがお引受けすることになつたといふことを、明らさまな言葉で入部さんに告げました。

「これで、わたしもほつとしました。」と入部さんはいひました。「わたしは歸りたくて、歸りたくて堪りませんでした。」

「あなたは今日お發ちですか。」

「あなたが代つて下さいましたから、三十分以内に此邸を出ます。旦那さまは御親切に、わたしがいつでも馬車に乗れるやうに、馬車の仕度をして置いて下さいます。行李などもすつかり準備が出来てゐます。では、おさらばですわ、あなた。」

入部さんは活潑なお辭儀をして、廊下づたひに歸つて行きました——花束で愉快さうに調子をとりながら、小唄をうたひながら。

わたしは、この女にそれつきりめぐり會はなかつたことを神様に感謝します。

六、狂氣のごとく

病室では、鞠子さまはすやくと眠つてゐました。陰氣くさい、背の高い、舊式の寢床に寝てゐる御病人を、わたしは惨しい心持でじつと見つめました。以前よりもわるくなつたとはおもはれませんでした。格別粗末に取り扱はれてゐたといふ痕跡も見えませんでした。病室は、汚なくて、薄暗く、殺風景な部屋でした。換氣のために開け放した窓からは、寂しい前庭が見えてゐました。

部屋を心地よくする手段は十分に盡されてゐるやうでした。して見れば、旦那さまの残虐の手は奥さまにだけ落ちたので、鞠子さまに對しては、たゞ病室を取りかへて隠しておいたといふことだけが

残酷な取り扱ひであつたのです。

わたしは、鞠子さまを眠つたまま、残して、室外へ出ました。さうして、庭師に會つて、後ほど入部さんを停車場へ送つた歸りに、その馬車を戸村ドクトルの宅へ廻して、わたしの名前でドクトルに往診を願つて一しよにお連れするやうに頼みました。

後に庭師が歸つての復命によれば、ドクトルもこの頃健康を害してゐるけれど、もし都合がよければ、明日の午前に来て下さるといふことでした。

「御苦勞でした。それからね、お前さんにお願ひがあります。外でもないが、今度病室が變つたので、わたし達は、大へん寂しいから、お前さん濟まないけれど、今夜はこちらの明いてゐる寢室へ来て寝んで下さい。何か事が起つたときには呼びますからね。八時と九時の間にこちらへ来て、わたしの聲の届くところにゐて下さい。」

と頼んでおきました。庭師は約束どほりの時間に来てくれました。わたしはこの人と呼んでおいて大へん助かりました。

夜中に、旦那さまは、おそろしい痲痺が破裂して、ひどい暴れ方をしました。庭師がゐなかつたらどんな珍事が起つたかも知りません。

旦那さまは、その日の午後も晩も、いら〜と、昂奮して、絶えず家の中や庭を歩き廻りました。それは、晩餐がたつたお一人で寂しいから、つい酒を過ごされたのであらうと、わたしはおもひました。その原因はどうでもいゝとして、夜中にわたしは旦那さまが怒氣をふくんだ大聲で、きりに怒號つてゐるのを聞きました。それはあちらの新しい建築の方で、した。庭師はすぐに降りて行きました。わたしはそんな騒ぎを靴子さまのお耳に入れまいとして、廊下の戸を締めました。

物の三十分もどさくさしてから、庭師はやつと歸つて來ました。その話によれば、今夜の旦那さまはたしかに氣が違つた——それは酒を過ぎたためではなくて、狂氣の發作の一種にちがひないといふことでした。旦那さまは客間のなかをぐる〜歩き廻りながら、ひどく激昂して、獨りで罵つてゐました。「こんな牢獄のやうな家には一刻もゐられない。」とか、「今すぐ旅に出る。」といふやうなことを口走つてゐました。庭師を見ると、速刻馬車の仕度をしろと命じました。

夜中であるにも拘らず、馬車の仕度が出来ると、旦那さまは、前庭に待ちかまへてゐて、いきなり飛び乗つて、はげしく鞭をあてました。蒼ざめた顔は月の光りでいよ〜凄く見えました。馬は驚いて大駈けに駆けました。遙か向ふの門番小舎のあたりで、「門を開ける〜」と馭者臺から叫ぶ旦那さまの聲につゞいて、車輪の狂はしい轟きが、靜寂な夜氣をとほして聞えました。それから旦那さまは

どうなつたか——庭師は知りませんでした。

その翌くる日であつたか、それとも二三日後であつたか、今は忘れましたが、馬車だけ黒水莊へ歸つて來ました。それは、リメリツチ村から程近いノーレスペリーといふ町の或る宿屋の男が、旦那さまに頼まれて届けて來たのでした。旦那さまはあの夜は、その宿屋に泊つて、その停車場から汽車に乗つたといふことですが、旦那さまの行く先は、宿屋の男は知りませんでした。

その後、わたしは、旦那さまの行方について、旦那さま御自身からも、他の誰からも、何等の知らせを受けとりません。旦那さまはこの英吉利の内地にゐるのか、それとも外國へ行つてしまつたか、わたしには今日に至るまでそれがわかりません。

罪人が逃亡するよきのやうに、夜中に御自分の邸からあわてふためいて、馬車を驅られたあの晩以來、わたしは二度と旦那さまに會ひませんでした。そして、この後も永久に廻り合はないことを、わたしは望み且つ祈ります。

この悲しい物語りの、わたしの受持つた部分は、もはや終りに近づきました。

旦那さまが狂つた旋風のやうに、夜中に馬車を驅つて邸を飛びだしたあとで、鞠子さまは病床の上で目を醒ました。そのときに、わたし達が沁々と取り交した悲しい會話については、こゝにくだなくだしく記述する必要はありません。

たゞ、述べておきたいのは、わたしがトルケーへ遣られた留守の間に、病室を新翼から舊翼へ替へられたときは、鞠子さまは意識を失なつてゐて、まったく何も知らなかつたといふことです。そして、その意識を失なつたのは、病氣のための自然の結果であつたか、それとも人工的に企圖されたことであつたかは、御自分にもわからないといふことでした。

奥さまが黒水莊を出て行かれたといふことをわたしが申しあげたときに、鞠子さまの悲嘆は、傍で見えてゐるのもお氣毒なくならぬでした。それは、鞠子さまの容態にわるい影響がありました。それらの細かい記述も、こゝには略しておきます。

戸村ドクトルは、御自分も病氣のために、わたしが招びにやつた後も四五日黒水莊へ見えませんでした。その間のわたしの苦心と、心細い心配とは、筆にも言葉にもつくされません。

わたしは宗教上の慰安を鞠子さまの心に植えようとして、一生懸命に努めました。とうとうそれが成功したやうでした。

やがて鞠子さまは、元氣がめき／＼と恢復しました。わたし達二女は相談して、一しよに汽車に乗つて、つひにあの忌はしい黒水莊を見捨てました。わたし達は倫敦で悲しいお別れをしました。

わたしはイスリントンの親戚の家に行きました。鞠子さまは、カンペーランドの笛森家へ歸つて行かれました。

運命の鍵 (小堀捨女の説話)

一、不幸な客

わたしは、帆船伯爵家の料理番として雇はれてゐた、小堀捨と申す女でございます。

わたしは學問のない女で、読み書きといふやうなことは、まるつきり出来ないのが残念です。それゆゑ、口で申しあげますから、その通りに書きとめていただきます。

わたしは一生涯眞面目に働いて、正直な心を失はないやうに心掛けて来た女でございます。他さまに嘘をいふのは罪で、悪いことだといふことは、ちゃんと心得てゐます。ですから、わたしは何でも見たとほり聞いたとほりを、有りのまゝに申しあげます。

夏になつて、わたしは職を失なひました。それはわたしの過失からではなくて、先方の都合で出されたのです。それで、わたしは早速別の奉公口をさがしてゐると、丁度いゝあんばいに、セント・ジョンの森、フォレスト街五番地の或る家で料理番が欲しいといふことを聞きこんだので、そこに奉公しました。わたしはまづ御目見え奉公として勤めました。

主人は帆船といふ名前の方で、奥さまは英吉利の御婦人でした。主人は伯爵で、奥さまは伯爵夫人でした。御夫婦の外に若い女中が一人ゐました。決して清潔好きな、きちんとした女ではなかつたけれど、悪いことをするやうな女でもありませんでした。召使といへば、わたしとこの女中とだけでした。

主人御夫婦は、わたし達召使が入つたあとで、遠方から歸つてこられて、すぐにわたし達を呼んで、今に田舎から御來客があるといふことを云ひ渡しました。

お客さまは、奥さまの姪でした。二階の寢室が準備されました。奥さまの仰しやるには、権田原夫人(お客さまの名前)は、病氣で大へん體が衰弱してゐるから、料理は特別に氣をつけるやうに、といふことでした。

お客さまは、たしかその日のうちに來る筈でした。だが、わたしは記憶がわるいのですから、月日などのことは、どうぞわたしの記憶を信じないで下さい。わたしは忙がしく働く女で、平生でも日曜のほかは、月日なんか何うだつて構はないのです。

で、わたしの記憶えてゐるのは、権田原夫人といふお客さまが主人の家に到着したといふこと、そしてわたし達が御來客と聞いて、あわてたといふこと。それだけです。

わたしは忙しく働いてゐたので、主人がどんな風にしてお客さまを迎へ入れたかといふことは知りませんでした。何でも、主人は午後にお客さまを連れて來ました。女中が戸を開けて二階の客間へ案内しました。ところが、女中が臺所へ行つて、間もなく、あわたししく呼び叫ぶ聲が二階に起りました。客間の呼鈴が狂氣のやうに鳴りました。

「誰か、早く、早く來ておくれ！」

それは奥さまの聲でした。

わたし達は二階へ駆けつけました。

お客さまは、客間の長椅子の上に仆れて、顔は幽霊のやうに蒼ざめて、拳をかたく握りしめ、頭はぐたりと一方に垂れてゐました。

「今、急に驚いたのです。」

と奥さまはいひました。

「いや、痙攣の發作だ。」

と旦那さまはいひました。

わたしは、すぐに外へ駆けだしました。わたしは家の誰よりも、この邊の地理を一番よく知つてゐ

るので、取りあへず醫者を呼びに行つたのです。近所に「貴堂—早瀬醫院」といふのがあることを知つてゐたから、そこへ駆けこみました。これは貴堂といふドクトルと早瀬といふドクトルが共同で開業してゐる醫院で、この界限で大へん評判がよいのでした。

丁度、貴堂ドクトルが居合せて、すぐに來てくれました。

不幸なお客さまは、とき／＼發作が來るたびに苦しうにもがいて、しまひには、苦しみ疲れて、孩兒のやうに、何も彼も分らなくなつてゐました。わたし達は總が／＼で、お客さまを寢床に運びました。

貴堂ドクトルは、薬品を取りに一旦醫院へ行つて、十五分ほど經つてから引かへして來ました。ドクトルは薬品のほかに、マホガニー製の喇叭の形をした、空洞の管を持つて來ました。そして、その管の一端を病人の心臓のところへ當て、他の一端を御自分の耳へあて、じいつと音を聴いてゐました。

診察がすむと、ドクトルは奥さまに云ひました。

「これは重態です。御親戚へ御通知なされるなら、早くなされる方がよろしいかとおもひます。」

「心臓がわるいのでせうか？」

「さうです。しかも非常に危険な心臓病です。」

それから、ドクトルは、病氣について何か奥さまに説明していただきましたが、學問のないわたしには、何のことだか分かりませんでした。

「手後です。他の醫者をお招びになつても、別に良法はありますまい。」

さういつたドクトルの言葉だけは、わたしにもよく分かりました。

奥さまは主人よりも落ちついて、ドクトルの言葉を聴いておりました。主人は肥つて、大きな體格の、可成り老けた年輩の方で、平生小鳥や白鼠をわが子のやうに可愛がつて育てるのが道樂でした。主人は突然の出来事で、落膽しました。

「あゝ、お氣の毒な權田原夫人！ お氣の毒な權田原夫人！」

と云ひながら、紳士といふよりも、役者がするやうに手をふるはせて、部屋中を歩き廻つておりました。病人の容態について奥さまが一つの問をかける隙に、主人は五十の問をかけるほどの熱心で訊ねました。

主人は、少し氣分が落ちつくと、屋後の花園へ行つて、美しい花束をこしらへて歸りました。そして、わたしにそれを病室へ持つていつて、部屋を飾るやうに云ひ付けました。花束が何かの藥にな

るとでも思つたのでせう。主人はとき／＼かうした優しい心を現はすことがありました。決してわるい主人ではありませんでした。言葉づかひは大へん丁寧で、氣さくで、やさしくて、口説上手といふやうな性質の方でした。わたしは、奥さまよりも、主人が好きでした。奥さまはまつたく偏執な女でした。

夕方になつて、お客さまは少し快くなりました。寢床の上で身動きができるやうになりました。そして、部屋の内部やわたし達の顔を不思議さうにじろ／＼と見廻しました。御壯健なときは、どんなに美しい夫人であつたでせう。房々した髪や、碧の眼や、その他いつたいのお容貌は、たしかに人を惹きつける魅力がありました。

その晩、御病人はよく眠れなかつた——と、獨りでお傍に看護してゐた奥さまが、さういつておりました。

わたしは、寝る前に一度御用を伺ひに病室へ行きました。御病人は、ごつちやまげな、まとまりのない獨り言をいつておりました。誰か遠方にでもゐる人の名前を呼びかけて、話してゐるやうな風でしたが、その人の名前は聴き取れませんでした。そのとき、主人が入つて來ました。もう一つの美しい花束を手持つておりました。さうして、病氣について、立てつづけに澤山の問ひをかけられなさい

ました。

翌くる朝、わたしが病室へ行つたときは、御病人はまたわるく變つて、昏睡状態とやらで、氣が遠くなつて、眠つておりました。貴堂ドクトルは、今日は早瀬ドクトルをも相談相手に連れて來ました。ドクトル達は、御病人をそつととしておいて、決して安静を妨げてはいけないといひました。診察を終へて、別室へ來てから、ドクトル達は、いろいろのことを訊ねました。御病人の以前の健康は、どんな風であつたかとか、何か非常な心配事があつて、それが長くつゞいたか、といふやうなことを問ひました。

「ハイ、それで終始心を痛めてをつたやうです。」

と、奥さまは答へました。すると、貴堂ドクトルは、早瀬ドクトルの方を見て、頭を振りました。早瀬ドクトルも、同じやうに頭を振りました。誰か御病人の心臓をわるくするやうな悪計を行つた者があるにちがひないと、二人のドクトルが考へた様子でした。あんな纖弱い夫人に何だつて、そんなことをしたのでせう。ほんとうにお氣の毒な!

正午近くに、御病人は目を醒ましました。急に調子が變つて大さうよくなつたやうに見えました。わたしや女中は病室へ入ることゝ止められました。それは、御病人の安静を妨げてはならぬといふ要

心からでした。

主人は上機嫌で、庭の方の窓から臺所を覗きこんで、

「料理番さん、お客さまは大分快くなつたよ、私はこんな嬉しいことはない。そこで、この大きな脚を勢一杯に踏んばつて、ゆつくり散歩をして來ます。序に、お前のために買物の御用をつとめてもいいよ。ヤア、御馳走をこしらへてゐるね? 甘さうなタートをこしらへてゐるんだね。外皮は出来るだけ柔らかくして下さい——口のなかで融けて崩れるやうなのがいい。」

こんなことをいひました。主人は六十を越してゐるくせに、大の甘黨でした。可笑しいではありませんか。

午後にドクトルがまた來ました。御病人が眠つたために大へん快くなつたといひました。そして、御病人に一切談話をさせてはいけない、出来るだけ安眠させるやうにと注意して歸りました。

五時頃(主人はまだ歸りませんでした)に、病室から呼鈴がけたましく鳴つて、奥さまは階段のところまで駆けて來て、わたしに、すぐ醫者を呼びに行けといふことでした。わたしは帽子やショールを持って、駆けださうとしてゐるところへ、折よくドクトルが來ました。それは丁度約束の時間だったので、ドクトルは時間どほりに往診したのでした。

わたしはドクトルを二階へ案内しました。

「病人は午前から變つたことはありませんでした。」と奥さまは部屋の戸口へ出迎へていひました。「目を醒ましたきりで、變に寂しさうに四邊を見廻はしてゐました。ところが、只今アツといふ聲を立てたかと思ふと、そのまゝ氣絶してしまひました。」

ドクトルは病床へ行つて、御病人の上へ身を屈めました。と、急に顔色を變へて、御病人の心臓へ手をやりました。

奥さまは貴堂ドクトルの顔をじつと見守つてゐましたが、

「まさか、死んだのではないでせうね？」

さゝやくやうに、さういひました。頭から足の尖までぶる／＼と身慄ひしました。

「死なれました。」とドクトルは嚴そかな聲で、靜かに答へました。「實は昨日診察したときから、こんなことが突然に起りはせぬかと心配してゐたのです。」

ドクトルがさういつてゐる間に、奥さまは病床の傍からそつと退つて、まだふるへてゐました。

「死んでしまつた。」と奥さまは獨りごとをいひました。「あんまり急で……わたしは伯爵に申しわけがありません。」

「奥さま、あなたは階下へいらして、少し氣を靜めて下さい。徹夜の看護で神経が疲れておいでですよ。それから、この女は暫らく此室へ置いていたよきたら。」

わたしは殘されました。

奥さまは、「わたしは伯爵を慰めてあげなければなりません。」といつて、ふるへながら、階下へ降りて行きました。

「お前さんの御主人は外國人だね？」と、ドクトルは、奥さまがゐなくなつたのを見て、わたしに問ひかけました。「御主人は死亡届けの手續きを御承知だらうか？」

「サア如何でございませう、」とわたしは答へました。「多分御存知あるまいとおもひます。」

ドクトルはちよつと考へたあとで、

「そんなら、死亡届けの手續きは、私がしてあげませう。私は滅多にこんなことは引きうけないけれど、今の場合は、多少とも御家族の手を省いてあげたいとおもひましてね。私から届けいであると、役所でも半時間のうちに受理してくれますよ。このことをお前さんから御主人へ云つておいて下さい。」

「ハイ、申しあげます。御親切さまに、ありがとうございます。」

それで、お前さん此室に附いてゐてくれませんか。私はこれから行つて、すぐに遺骸を始末する者

をよこしますから。」

「かしこまりました。わたしはこのお氣の毒な夫人と御一しよにのみませう。でも、残念でございますね。もう御手當ての方法もないものでせうか？」

「もう何とも仕方がない。このお方は、私が拜見する前にひどい苦痛をなされたにちがひない。私が招かれて来たときは、既に手後れであつた。」

「あゝ、お可憫さうに！ われ／＼も晩かれ早かれ、この世のお暇をしなければならぬのですね、先生。」

と、わたしはいひました。ドクトルは黙つてゐました。談話などはしたくないといふ風でした。「では、左様なら。」

さういつて、ドクトルはさつさと歸つて行きました。

わたしは先生から頼まれたとほりに、寢床の傍に附いてゐますと、やがて先生からお話のあつた吳田仙子といふ女が來ました。立派な女でした。その女は無言つてぐん／＼自分の仕事をやりました。そして、これまでに随分澤山の屍體を手がけたといひました。

主人がお客さまの死んだといふ知らせを最初に聞いたときに、どんなに驚いたでせう——わたしは

その場に居合はさなかつたけれど、あとで、わたしが言つたときは、主人は氣の毒なほど、がっかりしてゐました。部屋の間につくねんと坐つて、大きな兩手を肥つた膝の上にぐたりと載せて、首を垂れて、眼は何處を見ろといふあてもなく、きよ／＼とんととしてゐました。

葬式の準備の指圖などは、みんな奥さまが獨りでなさいました。随分費用が嵩んだでせう。とりわけ柩は、金にあかして立派なものを用ひました。

死んだ夫人の旦那さまは、何處か外國へ行つてゐる、といふことでした。けれども、死者の伯母さまにあたるわたしの奥さまは、田舎へたしかカンパリーランドだと記憶えてゐますの御親戚の方々と相談をして、死者のお母さまのお墓へ埋葬することに極めました。

主人は埋葬の式に列なるために、田舎へ行きました。主人の大きな眞面目な顔や、のろい歩き振りや、帽子に巻いた廣い喪章などは、みな主人の深い悲しみを現はしてゐました。

おしまひに、わたしは御質問に對して、かい摘んで次のやうにお答へします。

(一)わたしも、女中も、主人が手づから權田原夫人に藥を服ませたのを見ませんでした。

(二)わたしが知つてゐる限りでは、主人は權田原夫人の病室に獨りで入つてゐたことはありませんでした。

(三) 権田原夫人は、到着して間もなく、非常に驚いたためにあのやうに急に悪くなつたと奥さまがいひました。その驚いた原因は何であつたか、わたしには分かりません。奥さんは、わたしにも女中にもその原因を聞かして下さいませんでした。

二、死亡診断書

権田原夫人、二十一歳。

死亡の時日——千八百五十年七月二十五日(水曜)。

死亡の場所——セント・ジョンの森、フォレスト街五番地。

病名——動脈瘤

発病の時及び経過——不明。

右及診断候也

醫師 貴堂直樹

三、吳田仙子の陳述

わたしは貴堂ドクトルの依頼によつて、死亡診断書に記載してある家に行つて、或る婦人の遺骸の

始末をしました。遺骸は小堀捨といふ同家の召使に守られておりました。

遺骸はわたしの目前にて棺に納められ、さうして棺の釘付けされるのをわたしが見居けました。

わたしの仕事は終つたので、わたしは規定どほりの料金を受け取つて、その家を出ました。わたしの性行については、貴堂ドクトルに御訊ね下されば分ります。ドクトルは、わたしがこゝに眞實を陳述したといふことを證明して下さるでせう。

四、墓 銘

美智子、権田原夫人——ハンブシヤイア、ブラック・ウオター・パークの黒水莊主男爵権田原満春の妻。當寺領内龍者莊主故筒森道彦の女——こゝに眠る。

誕生——千八百二十九年三月二十七日。

結婚——千八百四十九年十二月二十二日。

死亡——千八百五十年七月二十五日。

五、舊 山 河 (服部斧太の手記)

千八百五十年の夏の初めであつた。わが探検隊の生き残つた仲間、中央亞米利加の曠野と森林を後にして、故國に向つた。私もその中であつた。われ／＼は英吉利へ歸つてゆく或る汽船に乗りこんだ。ところが、汽船はメキシコ灣で難破して、無残にも船客や乗組員の多くが溺死した。われ／＼の仲間では四五人の者しか助からなかつた。私は幸ひにしてまた、その四五人の中であつた。それは、私が死の危険から遁れた三度目の出来事であつた。最初は、ひどい悪疫にかゝつて死にそこねた。二度目は、犇猛な土人の群に襲はれて、まづたく生命がないものと思つた。そして三度目には、この溺死から免れたのである。

生残者は、リヴァプール行きのア米利加の汽船に救助はれた。汽船は十月十三日に、リヴァプールに着いて、われ／＼は午後遅く上陸して、私はその晩のうちに倫敦に着いた。

さて、こゝに私は、私の漂泊の憂き難難のおもひ出を綴らうとするのではない。私を故國と友達から引き離して、危険に充ちた野蠻な瘴氣の國土に突き出した動機は、すでに知られてゐる。今更、何をいふこともない。私は、どんなにか再び故國を見ることを希望し、祈つたことであらう。私は今、自分で求めた配流の生活から立ちかへつた——まづたく生れ變つた人間となつて歸つて來た。新生活の大海原の眞只中で、私は自分の靈性を新たに鍊へあげて來たのだ。私の意思は鞏固になつ

た。私の感情は決斷を増した。私は自信ある男となつた。私は自分自身の前途がおそろしさに逃げたのであつた。けれども、今は男らしく、運命に面をむけるために歸つて來たのだ。

笛森美智子——それは英吉利を去るときの私の心の全部であつた。そして今、私はやはりそのおもひ出を心に充たしつゝ英吉利へ歸つて來た。朝の光りは、とうとう、なつかしい國土を私の眼に見せてくれた。

私の心が昔の戀をたどるやうに——私のペンは舊い言葉をたどる。私は彼女を笛森美智子と書く。かの女の良人の姓の下にかの女を呼びかけることはむづかしい。今の私に、それが出來さうな氣がない。

夜があけると、絶えて久しく見なかつた母や妹を訪ねるために、ハンブステッドへ急いだ。

再會の喜びを、それからそれへと語り合つた後は、だん／＼昔の落ちついた氣分に立ちかへつた。ふと私は、母の顔に、かくれた悲哀がひそんでゐるのを見出した。いたはるやうに、しげ／＼と私を見てゐる母の眼つき——それは慈愛以上のものであつた。哀憐はそのやさしい手で、ひそやかに、やはらかに私の心をつかんだ。われ／＼は何も隠しだてはしなかつた。母は私の生活の破産を知つてゐた。私が故國を去るやうになつた事情も、ことごとく知つてゐた。それゆゑ、私は、留守中に鞠子が

ら手紙でもあつて、何か戀人の身の上について私の知りたいことがないかといふことを遠廻しに訊ねてみたいとおもつた。

ところが、私は母の顔を見ると、急に勇氣が挫けた。

「お母さん、あなたは私に何か聞かせたいことがあるのでせう。」

私がいふことの出来たのは、たゞそれだけであつた。と、妹は黙つて、ふいと部屋を出ていつた。

母の口から語られた知らせは何んであつたか。私はそのときの惨めな哀傷をこゝに寫し出す勇氣がなす。

「斧太や、お前は氣の毒な人だ。ほんとうに可憐さうな人だ。」

さういつて、母は私を抱きしめた。私は母の胸に顔を押しあて、心ゆくまで泣いた。

故國へ歸つて三日目、十月十六日の朝であつた。私は旅に出た——笛森美智子の墓に詣でる爲に。リメリツチ村の寂しい停車場を立ち出でたのは、靜かな午後であつた。秋の太陽は、薄い白雲を透して、淡い光りを投げてゐた。大氣は生温かく、沈んでゐた。靜寂な田舎の平和のうちにも、晩秋の

わびしさが陰影をひろげてゐた。

昔なつかしい街道を踏んで、低地の方へ出た。丘の半腹に立つて、四方を眺めた。遙か向ふに、龍茗莊の庭園の樹木の茂りや、半圓形をなした並木街や、高く白い建物の壁が見えた。私がヒースの藪を縫ひつゝこの邊を歩き廻つたのは、つひ昨日のことのやうだ。今にも美智子が、小さな麥稈帽子を冠つて、寫生帖を手にして、小走りに私のあとを追ひかけて來はしないかとおもつた。

おゝ、死よ、爾は寒い奴だ！ おゝ、墓よ、爾は勝利を得た！

私は墓地に立つた。上に十字架のある、清らかな、眞白な大理石の大きな墓の前に立つた。そこには笛森夫人と美智子が眠つてゐる。

「美智子……こゝに眠る。」

私はその墓銘を繰りかへしく讀んだ。死亡の月日に眼を止めて、深く考へた。私は跪坐した。冷たい大理石の上に兩手を置いた。頭を押しつけた。地上の有らゆるものから眼を冥つて、美智子を呼び迎へた。おゝ、戀人よ、戀人よ。私の心は今ぞあなたと語る。われ／＼が悲しい別れをしたのは、昨日のことです。ほんに、昨日としか思へない。私の戀人よ。私の戀人よ。

時は流れて行つた。夜の暮は落ちかゝつた。

墓地の草をわたる風のそよぎのやうな、かすかな物音がした。それは、聖い静かさを破つた最初の物音であつた。だん／＼近づいて來た。それは寢音のやうであつた。寢音は立ちどまつた。

私はふりかへつた。

夕陽はやがて地平線に沈まうとしてゐた。雲は裂けた。やわらかい光りは、斜めに丘へさしこんだ。寂しい墓丘の夕暮の空は、冷たく澄みきつてゐた。

二人の女が、私の視線内に立つてゐた。かれ等は墓を見つめた。それから、私を見た。二人の女！

かれ等は少し進み寄つた。立ちどまつた。かれ等は面被をかきいで、顔をかくしてゐた。一人の女が面被を取つた。私は静かな黄昏の光りで、その顔を見た。鞠子であつた。

何といふ變り方だらう。幾歲月がかの女を老いしめたかのやうに、鞠子の顔は變つてゐた。眼は大きく、狂ほしくなつた。不思議な恐怖で私を見つめた。苦痛と、恐怖と、憂愁が、烙印を捺したやうに、その顔に現はれてゐた。

私は墓から一步かの女の方へすゝんだ。かの女は身動きもしなかつた。無言であつた。かの女の傍

に立つてゐた面被をかぶつた女はかすかにうめいた。

私は立ちどまつた。私の生命の脈膊は急に止まつた。そして、云ふべからざる恐怖の戦慄が、頭の先から足の尖まで這ひめぐつた。

面被の女は、伴侶を離れて、しづかに私の方へあるいて來た。獨り残つて突立つた鞠子は、はじめて物を云ひかけた。昔聞いたまゝの聲だ——聲は變らなかつた。そのやつれた顔のやうには變らなかつた。

「わたしの夢です。わたしの夢です。」

森閑とした墓場に、その聲はふるへた。

かの女は跪坐づいて、両手を高く組み合せて、天に向つて祈つた。

「神様！ この人に勇氣をお與へ下さい。神様！ この人が求めるときに、あなたのお助けをこの人にお與へ下さい。」

面被の女は黙つて、しづかに私の方へすゝんで來た。私はかの女を見た。他のものは何も見ないで一心にかの女ばかりを見つめた。

私のために祈る聲は、だん／＼低く、沈んで行つた。と、突然に、けた／＼と、そして懸命に叫

んだ。「退きなさい……」と。

しかし面被の女は私を捉へた。私の體と私の心靈を、しつかりと捉へてしまった。面被の女は墓の傍に立つた。われ／＼は顔と顔を向き合はせた。墓がわれ／＼の中間にあつた。かの女は臺座の墓銘に添うて立つた。かの女の衣物は、その呪はしい文字と摺れ合つた。

聲はますます近く、ますます高く、ますますはげしく叫んだ。

「顔をかくしなさい！ その女を見てはいけない！ おゝ、神様……」

面被の女は、つひに面被を外した。

「美智子、權田原夫人……こゝに眠る。」

見よ、この墓銘の傍に立つて、私を見つめてゐる女——それは權田原夫人、美智子であつた。

北船北馬 (服部芥太の手記)

一、日かけ者

こゝに、新しい頁を書きはじめる。

私の生活は俄かに一變した。すべての目的が新らしくなつた。希望も、努力も、恐怖も、興味も、犠牲も、みな新しい方向を取ることになつた。私の將來は多望である。私の前途は開けてゐる。それは恰かも、高山の巔きに立つて、四方を瞰下する趣きがある。

リメリツチ村の墓地に立つてから、一週間は早くも過ぎた。

私は今、倫敦の目まぐるしい雑沓のなかで、この新記録をはじめる。

私の往んでゐる街は、雑沓して、近隣には貧乏者が多い。私の往まつてゐる家は、階下は、新聞賣捌人の店で、二階と三階が安つばい貸間である。私は、この二階と三階を、變名で借り入れた。

二階も三階も部屋が二つづゝある。私は三階に陣取つて、一室を仕事部屋とし、もう一つの室を寢部屋に使つてゐる。二階の二室も、同じ變名で借りて、そこには二人の婦人を住まはせてある。二人

とも私の妹姉だといふことになつてゐる。

私は、安雑誌のために繪を描いたり、木版を彫つたりして、日々ヒトの麵麩メンゴを得てゐる。二人の姉妹はさうやかな編物アミモノなどをして、私の生活を助けてゐる、と想像されてゐる。

われ／＼の貧しい住居や、われ／＼の賤しい職業や、假定の兄弟關係や、變名や、それ等はすべて、われ／＼がこの倫敦といふ大都會ダイトウのなかに自分達を隠匿カウカムするための手段シユダンに過ぎないのである。

間には數へられない。私は畫家としても日蔭者ヒカゲモノになつた。もちろん保護者ホゴシヤもなければ、友達トモもない。

鞠子は、私の姉である、といふことになつた。そして炊事はこの女が引きうけてゐる。われ／＼は狂女香照キヤウテウ加奈子の仲間だと想像されてゐる。加奈子は死んだ權田原夫人ゴンタハラフジンの生きた形見である。權田原夫人の生れ變つたのだといつてもよい。

權田原夫人美智子は、リメリツチ村の墓地の、その母の墓ハカに葬られた。そのことは、理性から云つても、法律から云つても、或は親戚朋友の眼から見ても、一點の疑ふべき餘地がないやうだ。

美智子は、義姉にとつてはまだ生きてゐるかも知れない。私にとつてもまだ生きてゐるかも知れない。だが、それ以外のすべての社會シヤクカイに對して、かの女は明らかに死んだ女である。かの女の叔父であ

る龍若莊リウワクシヤウの當主タウシュ笛森貞亮氏フエノサダアキラにとつても、死んだ女だ。龍若莊リウワクシヤウの召使メシ共にとつても死んだ女だ。公やけの役人にとつても死んだ女だ。何故ならば、役人はかの女の遺産を、その良人たる權田原男爵ゴンタハラノキョウと、その伯母たる帆城伯爵夫人ホシキヤクフジンに讓渡する手續テウツクを了したからである。

美智子は、また私の母にとつても、私の妹にとつても死んだ女である。私の母や妹は、私が怪しい女に引つかゝつて姿を晦くらましたのだとおもつてゐる。つまり、社會上シヤクワイシヤウ、道義上ドウギシヤウ、法律上ハフリツジヤウ、すべての點から云つて、かの女は既に死亡したものである。

ところが生きてゐる。貧乏で、日蔭者ヒカゲモノになつて生きてゐる。貧乏な繪師エシと共に生きてゐる。貧乏な繪師はかの女のために努力し、かの女を生きた人々の世界に引き出さうとして力の限り奮闘してゐる。かの女は、世間からは無いものにされた。財産は奪はれた。赤裸々の女となつた。何もかもすつかり變つてしまつた。かの女の美貌は衰へた。心は憂への雲に閉された。有らゆる虐げをうけ、有らゆる朋友を離れて、かの女はとうとう私の許に來た。私は父として兄としての愛と名譽メイヨにおいて、かの女を愛護してゆかなければならぬ。

かの女と共に住むといふことは、容易ならぬ危険と犠牲が伴なつてゐる——私は階級と權力に對して、絶望的な抗爭をつゞけよう。私はそれがために名譽を損なはれ、友を失ひ、あらゆる災難に遭は

うとも屈しない。

二、逃 走

私の立場や、さうした生活をはじめた動機は、前に述べたとほりである。それはそれでいゝ。そこで、こゝには鞠子と美智子について語らねばならぬ。

美智子の突然の死は、帆城伯爵夫人の手紙によつて、黒水荘に報ぜられた。それは、黒水荘の主人、権田原男爵が狂氣のごとく邸を抜けだした後であつた。その手紙には日附がなかつた。女中頭御園襟子の計らひで、病床にあつた鞠子へはその悲しい報知を秘しておいた。

後に御園さんが、戸村ドクトルと相談の上で、美智子の死んだ知らせを鞠子に打ちあけた。そのとき鞠子の驚愕と悲嘆は、到底筆にも言葉にも盡せない。それから三週間ほど経つて、やつと旅行に堪へるほど元氣が恢復した。それで、鞠子と御園さんは共に黒水荘を去つて、倫敦まで一しよに來た。二女は倫敦で別れた。そのときに、御園さんは自分の行く先の所番地を鞠子に告げた——後に手紙を遣り取りする便宜のために。

以上は、御園さんの手記に缺けたところを私が補つたのである。

さて、鞠子は倫敦で御園さんと別れると、すぐに、「岩藻——輕井法律事務所」を訪ねた。龍茗莊の法律顧問であつた岩藻氏は健康を害して、獨逸の方へ靜養の旅に出てゐるので、輕井氏が代つて、龍茗莊の法律顧問をしてゐるのである。

鞠子は輕井氏に會つて、美智子が突然に死んだ事情について疑ひを挿んでゐることを打ちあけて、秘密にそれを取り調べてもらふことを依頼した。さうした調査は非常に困難で、危険な仕事であつたけれど、忠實な輕井氏は、すぐに引きうけてくれた。

輕井氏は早速帆城伯爵を訪問した。そして、鞠子の依頼で取り調べるといふことを云ひわたすと、伯爵は極めて親切に、あらゆる便利を計つた。美智子の死について、鞠子の知らなかつた多くの材料を提供してくれた。輕井氏は、なほ、伯爵家の二人の召使にも、貴堂ドクトルにも會つて、いろいろ質問した。しかし、何も怪しい點はなかつた。で、美智子の死因が疑はしいと思つたことは、畢竟、根據のない疑惑に過ぎないといふことを、鞠子に報告した。輕井氏の調査はそれで終つたのである。

鞠子はすぐに龍茗莊へ歸つた。

話が少し前に戻るが、龍茗莊の主人笛森貞亮氏も、伯爵夫人からの手紙で美智子の死を知つた。この手紙もまた明確な日附がなかつた。貞亮氏はその妹である伯爵夫人の申し出によつて、姪の美智子

の遺骸を、美智子の母の墓に埋葬することを承諾した。墓銘は、伯爵夫人の文案になつて、貞亮氏が目を通したものだといふことである。葬儀には、村の人々をはじめ、あの邊の紳士淑女が多数に参列して、敬意を表した。

帆城伯爵は、葬儀の日とその翌くる日と二日間、笛森家の賓客として取り扱はれた。けれども、その間、主人と伯爵とは一度も會見しなかつた。それは、主人の例の我がまゝな希望から伯爵との會見を避けたからであつた。で、この二人は、會見の代りに、手紙で用談を済ました。そのときに、伯爵は權田原夫人の最後の病症と死亡したときの狀況について詳しく書いた。その手紙には、格別新しいことも認めてなかつたが、注目に値するのは、その追申である。なぜ、追申が注目に値するかといふに、それは白衣の女香照加奈子の一身に關係してゐるからである。

ここに、その追申を掲げよう。

香照加奈子（この婦人については鞠子様より詳細御聴き取り下されたし）は、前きに瘋癲病院より逃走して、久しく行方不明なりしが、今同つひに黒水莊の近傍にて發見せられ、再び瘋癲病院に收容せられ候。

これは追申の前半である。さて、その後半は、

加奈子は久しく監禁より解放され居りしたため、その精神上の疾患はいちゞるしく悪化したし候。また加奈子は、かねて權田原男爵に對して妄想的に非常な怨みを含み候ところ、近來それがますますはげしく相り、さては男爵を責め惱ませるといふ觀念に支配され、ついに人格が轉換して、最近 おいては、故男爵夫人美智子様の性格 眞似ることに熱中いたし居り候。それは患者が黒水莊の庭園において、しばしば男爵夫人と秘密に面談して、夫人の性格や特徴を目撃して以來、急にそれらを眞似る熱望に囚はれたるものにて、しかも患者のこの人格轉換は殆んど完成いたし候。患者が再び脱出に成功すべしとは信じがたく候へども、故男爵夫人の名を冒して手紙等を發達して御親戚を煩はすがごときは、有り得べきことに候。この儀あらかじめ御含み置き下され度候。

鞠子は龍若莊へ歸ると、貞亮氏からこの追申を示された。それは九月初旬のことであつた。

鞠子は精神も體もひどく疲れたので、部屋に引籠りがちであつた。一ヶ月ほど静養してゐるうちに、やつといくらか元氣が出て來た。しかし義妹を亡つた悲しみは、どうしても忘れることはできなかった。

權田原男爵の行く方については、暫らくは何の報道も得られなかつた。帆城伯爵夫婦から鄭重な見

舞狀が来た。鞠子はその手紙には返事もやらないで、却つて、セント・ジョンの森の家と、そこに入りする人々の行動をひそかに監視させた。

だが、何の発見もなかつた。黒水莊へ看護婦として雇はれた入部夫人にも監視をつけておいたが、これからも變つた報道はなかつた。たゞ、入部夫人は六ヶ月前に、良人と共に佛蘭西のリオンから倫敦へやつて来た女だといふことがわかつた。かの女夫婦は、倫敦のレイセスター區で、大きな家を借りた。それは、千八百五十一年の大博覽會見物に外國からやつて来る觀光客をあてこみの下宿屋をはじめめるためであつた。かれ等は物靜かな夫婦で、今日まで正直に世渡りをして來てゐる。この夫婦に關する報道はそれだけであつた。

權田原男爵は最近巴里に入りこんで、少數の佛蘭西人や英吉利人の知己朋友と往來して、平穩に生活してゐるといふ報道があつた。

こんな風で、鞠子はどの方面からも格別變つた材料が得られなかつたので、頗る業を煮した。

鞠子はとうとう、香照加奈子の收容されてゐた瘋癲病院を訪問した。それは、倫敦から程近い北の郊外にあつた。鞠子はまづ、倫敦に出て、舊の龍若莊の家庭教師であつた間世夫人の紹介で、夫人の妹の經營してゐる下宿屋に陣を取つた。それから病院を訪ねた。

病院では、まづ院長に面會して、患者と極めて親戚の者だから面會を許してくれといふことを懇願した。

院長は面會を許す前提として、あらかじめ注意のために、こんなことを云つた。

「香照加奈子といふ患者は、久しく逃亡してつたのですが、幸ひにもこの度発見されて、帆船伯爵が連れて來ました。この患者はもと／＼權田原男爵の御依頼によつて收容したもので、今回も、伯爵は權田原さんの署名された委任状を持つて來ました。それは、たしか七月の二十七日であつたと記憶します。ところが、患者の症狀はよほど悪化してゐます。人格轉換といふ珍らしい兆候が見えてゐます。もつとも私は以前にもかういふ患者を取り扱つたことがある。かういふ症狀は精神病者には起り得ることです。精神状態の變化にともなつて、外部的に容貌にも變化が起るといふことはあり得べきです。しかし、この患者などは、その變り方がよほど著るしい方で、一々の變化を調べて見ますと、學術上から云つて不明な點が多い。それで、私はこれについて、なほ詳細に研究してみたいとおもつてゐます。」

院長は眞面目な男で、どうも權田原男爵、帆船伯爵から買収されてゐるとは思はれない。やがて看護婦は、病院の一番端れの病室に鞠子を案内した。

「こゝが香照加奈子の病室です。附添の看護婦もをりますから、何なりとその女にお訊ね下さい。」

鞠子は室内に入つた。突然に知らない婦人が来たので、患者も附添ひの看護婦も、不思議さうに起ちあがつて、客の方へ進んで来た、と、患者はいきなり駆け寄つて、鞠子に抱きついた。その瞬間に鞠子のかの女の義妹を認めた。死人が生きてゐることを認めた。

鞠子はあまりの驚きで、気が顛倒するやうであつた。真相が聞きたい、自分の思ひも語りたいたが、看護婦に氣附かれるのをおそれて、何もいふことができなかった。

「氣を丈夫に持つて、しつかりしてゐて下さい。しつかりしてさへゐれば、あなたは直きに救はれますよ。直きにこの苦痛から逃れることができますよ。わかりましたか？」

さういつて慰めた。この言葉のなかに或る暗示を與へた。それより外に仕方がなかつた。

鞠子は歸りに、持ち合せの十圓金貨三枚を密と看護婦の手に握らせた。

「實は、あの患者のことで、是非あなたにおたづねしたいことがあります。それで、あなたとたつた二人きりでお話ししたいのですが、あなたのお閑の時間は？」

「午後の三時頃でございます。」

「場所は何處がいでせう？」

「裏門のところへお出で下さい。」

「それでは明後日の午後三時にきつとまわります。」

鞠子は一旦龍名莊に歸つて、すぐにまた倫敦へ引きかへした。そして、株式仲買店へ行つて、自己名儀の公債を七千圓で賣りはなした。それはかの女が所有してゐる僅少な財産の全部であつた。かの女はその金を衣費に入れて、すぐに病院へ行つた。

病院の裏門のところ、看護婦が約束どほりに待つてゐた。鞠子は患者について、いろいろなことを質問した。それから遠廻しに看護婦の身の上に觸れるやうな談話を持ちだした

看護婦の語るところによれば、かの女は前にも加奈子に附添うてゐたが、加奈子が逃亡したために、かの女は不注意といふかどで解雇されたところが、幸ひにも加奈子が再び收容されたので、院長の同情でかの女も再び加奈子の附添看護婦として招びだされたのであつた。それ故、またも加奈子が逃亡するやうなことがあると、かの女はすぐに病院から追ひ出されるから、今度こそはよく注意してゐるといつた。

それから、この看護婦は或る男と婚約が成り立つてゐるけれど、若い同志は金がないので、急に結婚するといふことも出来ない。新生活をはじめするには何うしても三四千圓の金が必要なので、戀人同志

は心を合せて一生懸命に貯金をしてゐるといふことであつた。

「さうですか、それはお楽しみですね。ところで、わたしはあの患者の極く近い身寄りの者ですか、患者は云ふに云はれない事情のために此院へ收容されるやうになりましたけれど、本當は狂人ではないのですよ。わたしは患者があゝして苦しんでゐるのを見ると、胸が張りさけるやうです。あなた、どうぞわたしのためにあの女を助けて下さい。此院を脱けだすことができるやうに取り計らつて下さい。わたしは誓つて申しますが、それはいゝことです。キリスト教徒の信仰にかなつたことをあなたがなさるのです。」

さういつて、鞠子は相手が物を云ふ前に、手早く衣囊から百磅（千圓）の紙幣を四枚だけ取り出した。

「サア、失禮ですが、これをあなたに差しあげます。今も申したとおり、あの患者の逃亡を助けたからとて、決してわるいことではありません。あなたは正しいことをなさるのです。けれども、あなたはそれがために職を失なふのですから、どうぞ少ないけれどもこのお金で埋め合して下さい。」

看護婦は驚ろき且つ躊躇つた。鞠子は遮二無二紙幣を押しつけた。

「それでは、わたしに今仰しやつたことを御手紙に書いて下さい。わたしが許婚者の前にお金を出し

て、何處からこんなに澤山の金を持つて来たかと問はれたときに、その御手紙を見せたらあの男も安心するでせう。」

「手紙は書いて持つて来ました。このとおり、ちゃんとわたしの署名がしてあります。これをあなたにあげませう。そして何日にしませう。」

「明日。」

時刻は明日の午前といふことにして、こま／＼と手筈を定めた。

翌くる日、約束の時間に、鞠子は紙幣と手紙を持つて、病院の傍の林のなかで待つてゐた。看護婦が権田原夫人の手を引いて、病院を脱けだして来た。看護婦は實に巧みに美智子に衣替へをさせ、面被をかけ、帽子を冠せ、シヨールを被せて、すつかりもとの権田原夫人に仕立てゝ連れだしたのであつた。鞠子は紙幣と手紙を看護婦の手にわたして、権田原夫人をうけ取つた。義姉妹は久しぶりで、まつたく自由に一しよになつた。

看護婦は病院へ歸つてから、患者が倫敦からハンブシヤイアへの道程を熱心に訊いてゐたといふことを他の看護婦たちへ云ひふらした。だから、病院では、加奈子が例の妄想に驅られて、ますます権田原夫人になりすますために、ハンブシヤイアの黒水莊へ出かけたのであらうと解釋したにちがひな

かつた。

ところが、鞠子美智子の兩女は、すぐに倫敦へ出て、倫敦からカンペーランド行きの汽車に乗りこんで、無事にリメリツチ村へ立ちかへつた。

三、迷宮

権田原夫人美智子は、前に述べたやうに、鞠子の畫策で、完全に瘋癲病院を附けだした。

そこで、話は又少し前に立ちもどつて、美智子が黒水莊を立ちいで、から、瘋癲病院へ收容されるまでの奇怪なる経過をこゝに記述する必要がある。

美智子は、さきに鞠子が病中にも拘はらず、自分に無断でカンペーランドへ出發し、途中倫敦の帆城伯爵の家に泊つたと聞いて、義姉の身の上が心配で矢も楯もたまらず、單身倫敦行きの汽車に乗りこんだ。このことは御園夫人の手記にも記述されてある。

さて、列車が倫敦の停車場に着いて、美智子がプラットホームに降りると、伯爵が出迎へに來てゐて、かの女を自分の乗つて來た馬車に乗せた。美智子はまづ鞠子の安否をたづねた。伯爵は、鞠子はまだ倫敦にゐるから、直きに會へるといつた。

やがて馬車は、或る狭い街で止まつた。そこは、店舗や事務所のやうな大きな建物の立ちならんだ繁華な大通りの裏通りの街であつた。美智子は倫敦は不案内であつたけれど、こんな處に伯爵が住まつてゐようとは思へなかつた。そこはセント・ジョンの森でないことは明らかであつた。

兩人は或る家に入つた。裏手の部屋だから、二階か三階かは確とわからぬが、とにかく階段をのぼつて行つた。行李も郵重に運び入れられた。女中が戸を開けた。すると、眞黒な口髯の生へた、一見外國人らしい男が、極めて丁寧な態度で兩人を部屋に案内した。

「伯爵さま、鞠さんはこの家にゐるのですか？」

と美智子が訊ねると、

「えい、此家にをられます。あなたがお著きになつたことを直ぐにお知らせしませう。」

と伯爵は答へた。

やがて、伯爵も、案内した髯の男も出ていつた。そこは貧弱な裝飾を施した、みすばらしい部屋であつた。家の建てこんだ裏街らしく、窓の外にはすぐ前の家の壁が見えてゐた。しかし、静かな家であつた。階段を通る者もないと見えて、寢音一つ聞えない。たゞ階下の部屋で、男の談聲がぼやけて聞えるだけだつた。

間もなく、伯爵は一人の紳士（それは英吉利人であつた）を連れて、歸つて來た。

「鞠子さんは今眠つてゐますから、もう少しそつとしておきませう。」

と伯爵はいつた。さうして、

「これは私の友人です。」

といつて、その紳士を紹介した。そして伯爵は紳士を部屋に残したまゝ、何處へか行つてしまつた。紳士は禮儀正しい人であつた。しかし、じろく美智子の様子を見ながら、しきりに變な問をかけるので、かの女は不思議でたまらなかつた。さうしてゐるうちに、もう一人他の紳士（この人も英吉利人であつた）が入つて來た。この人もやはり伯爵の友人だといつて、前の紳士を紹介した。

今度は第二の紳士が、變な眼付でかの女を觀察するやうに見ながら、幾つかの奇怪な問をかけた。まつたくわけがわからなかつた。美智子はどうしてこんな目に遭ふのだらうとおもつた。一刻も早く義妹に會ひたくて堪らなかつた。

かの女はとうとう我慢がしきれないので、椅子から立ちあがつた。そこへ伯爵が歸つて來た。

「伯爵さま、早く鞠子さんに會はして下さい。わたしは何時まで待たなければならぬでせう？」

とかの女は迫つた。伯爵ははじめは好い加減に逃げ口をいつてゐたが、あくまでも追窮されて、と

うとう、こんなことをいつた。「實は、鞠子さんは御病氣が少しおわるいので、急にお會はせることは出来ません。」

その言葉はいかにも氣の毒で、いひにくいといふ風であつた。美智子は先刻から二人の紳士の前で當惑し切つてゐたのに、今また伯爵からこんなことを聞かされたので、ぎよつとした。と、かの女は突然眩暈を感じて、氣が遠くなりかけた。

「どうぞ水を、水を一杯。」

美智子がさういふと、伯爵はすぐに、戸口から水を持つて來るやうに命じた。髯の男が、コップに一杯の水と、氣附け藥の瓶を持つて來た。

かの女はコップを口にあてたが、變な味がして、餘計に氣が遠くなりさうなので、いきなり伯爵の手から氣附け藥の瓶を取つて、鼻にあてた。と、その瞬間に頭がぐらくぐつとした。瓶を手から取り落した。それから伯爵の手でまた、瓶の口を暫らく鼻にあてられたことは、かすかに記憶があるけれど、その後はまつたく意識を失つてしまつた。

夜になつて目が醒めた。意識はわれに還つたけれど、明確でなくて、半透明の状態であつた。その晩、その怪しい家を去つた。そして、かねて心に極めてゐたとほりに、間世夫人の家に行つた。どう

して、誰と一しよに行つたか、記憶がない。

間世夫人の家で、茶を呑んで、一泊した。不思議なことには、黒水荘へ看護婦に來た入部夫人が、そこにゐて、衣替へをさせたり、寢床に連れて行つたりした。どんな談話をしたか、はつきり記憶えてゐない。

翌くる日、何時頃であつたか、美智子は馬車に乗せられた。伯爵と、それから附添ひの女として入部夫人が、同乗した。馬車が何時で止まつたのか、伯爵や入部夫人が何處までついて來たのか、それも確然しない。それが一日であつたか、二日であつたかも分らない。

と、かの女は突然に、眞實に目が醒めた。意識がよほど鮮明になつた。かの女は不思議な場所、知らない女たちのなかにゐた。そこは瘋癲病院であつた。

こゝで、かの女は香照加奈子といふ名前で自分を呼ばれた。下著の類には、みんな香照加奈子といふ名前が書いてあつた。

附添ひの看護婦は親切に、諭すやうに云つた。

「御覽なさい。衣物にもこのとほり、みんなあなたの名前が書いてあります。あなたは香照加奈子さんですよ。それですから、御自分を權田原夫人だなどといつて、わたし達を困まらせないやうにして

下さい。ね。權田原夫人は迅くに死んで、お墓に埋められたんですよ。あなたは、現にこゝに生きてゐる。それが何よりの證據ぢやありませんか。嘘とおもふなら、あなたの衣物をごらん下さい。ソオレ墨くろく〜と香照加奈子と書いてあります。お分りでせう？」

こんな風で、いかにもがいても、手も足も出なかつた。さうして懊惱してゐるうちに、おもひもかけず鞠子が訪ねて來て、救ひ出してくれたのであつた。

鞠子に連れられて龍若莊に歸つたのは、十月十五日の夜であつた。
翌くる朝、兩女が貞亮氏の部屋をおとづれると、

「私はそのやうな女を認めない。美智子はすでに死んで、つひこの頃葬式が済んだばかりではないか。鞠子、お前はその加奈子とかいふ女に欺むかれてゐるのだ。帆船伯爵の手紙にもこのことは明らかに認めてある。お前もあの手紙を読んでゐながら、何といふ愚かな眞似をするのだ！」

と、大へんな見幕である。鞠子がいかに言葉をつくして説明しても、聴き入れない。

「その女をすぐ遂出してしまひなさい。今日中に遂ひださなければ私は法律の保護を仰ぎますぞ。」
貞亮氏は、平生の氣象からいつても、すでに死んだ姪が何等かの事情で生きてゐるといふやうなことを考へ得る人ではない。

「叔父さま、それはあんまり残酷です。現に美智子さんがこゝにゐて、わたしがこんなに申しあげても、まだお分りになりませんか……それでは、かうしませう、女中達をみんな此室へ呼んで下さい。これが美智子さんか、他の女かを鑑定させませう。」

女中達が呼ばれた。女達はげげんな顔をして美智子をじろく／＼と見た。美智子の容貌はあまりにやつれてゐた。女等は以前に仕へた令嬢を認めることができなかった。どうもさうらしくない。加奈子といふ女であるかもしれない。もし加奈子であつたら大へんなことになる。さういふ疑惑があつたので、誰も確かなことを云ひうる者がなかつた。

あいにく、その日は、美智子に長く付き添うてゐた春やが不在だつた。かの女は三四日の暇をもらつて、自分の家に歸つたのであつた。

だが、兩女は、春やの龍若莊へ歸るのを待つてゐる餘裕がなかつた。ぐづ／＼してゐると、追手がかゝる。病院では、きつと眞ぐに人をやつてハンブシヤアを探したにちがひない。探しても黒水莊附近では見附かる筈がないから、追手はその足で今にも龍若莊へ来るだらう。貞亮氏は法律に訴へるとまで教圍いたのだから、追手がかゝつたら、早速美智子を引きわたすであらう。さうなれば、これまでの苦心も水の泡である。

そこで鞠子は、もう一度満身の勇氣をふるひ起した。美智子を急ぎたて、永久に龍若莊と袂別した。わかれの挨拶を取り交す者もなかつた。兩人はなつかしい母と可憫さうな加奈子の眠つてゐる墓に最後のわかれを告げるために、人目をしのんで墓地をおとづれた。丁度そのときだ、神様が最も無邪氣なる一人の男を擇んでかの女等に引き合はせたのは、即ちこの服部斧太が墓場でふたゝび兩女にめぐり合つたのである。そのことは前の私の手記で述べておいた。

われ／＼三人は、あれから眞ぐに汽車で倫敦へ引きかへしたのである。

四、かゝる家

以上は私が兩女から聴きとつた過去の物がたりである。

この説話を土臺として、つらく／＼考へてみると、いかなる陰謀がいかなる手段で行なはれたかといふことは、ほど想像ができる。しかし、細かい部分にいたつては、なほ、不可知として私の胸底に沈黙してゐる。

まづ私の想像を取り合せて断定を下すならば、白衣の女香照加奈子が美智子と瓜二つ並べたほどよく似てゐたといふことが、今度の巧妙な陰謀に手段をあたへてゐる。

加奈子は黒水荘の附近でとうとう発見されて、權田原夫人といふ名前で、倫敦郊外の帆城伯爵の家
に引き入れられたにちがひない。さうして如何なる事情であつたか、この假装した權田原夫人は突然
に死んで、遺骸はリメリツチ村の笛森家の墓地に葬むられた。そして眞正の權田原夫人美智子が、死
んだ加奈子の身代りとなつて、瘋癲病院に收容されたことは確かである。

死亡診断書を書いた貴堂ドクトルも、伯爵家の二人の召使も、瘋癲病院の院長も、この眞相は知る
まい。かれ等は眞相を知らずに利用されたのであらう。

もう一つの断定を下すことが出来る。それは帆城伯爵と權田原男爵は、われ／＼三人に對して爪垢
ほどの慈悲心も持つてゐないといふことだ。かれ等二人は、まゝと陰謀に成功して、男爵は二十萬圓、
伯爵は十萬圓といふ金をふところに入れた。

ところが、美智子は瘋癲病院を脱けだした。それは、かれ等に取つて青天の霹靂である、そこで、
かれ等は、陰謀の發覺をおそれて、あらゆる手段を講ずるだらう。まづ美智子の保護者たるたつた二
人の友達——鞠子と私——からかの女をもぎ取らうとするだらう。かれ等はどんな惡辣な方法でやつ
て來るか知れたものでない。

さうした危険は、一日一日、一刻一刻と迫つて來つゝある。そこでわれ／＼は隠れ家を求めた。わ

れ／＼は前にも云つたやうに、或る家の二階と三階を借りた。

そこは倫敦の東の部分で、貧民窟に近いところであつた。四隣はその日稼ぎの人が多くて、かれ等
には、他人の生活状態や身分などを気にしたり調べたりする餘裕がないから、勤付かれる氣づかい
は比較的に少い。生活費も安い。それで、ことさらにこんな場所を選んだのである。

この家には、他に間借りをしてゐる者がなかつたから、われ／＼は他人の部屋の前を通ることなし
に、自由に出入りすることができた。鞠子と美智子は、私が一しよでないときは、一步も戸の外へ出
ないやうに心がけた。また私が留守のときは、どんな人がどんな用事で訪ねて來ても、決して部屋へ
入れないことにした。

さてその次に、私は仕事の心配をしなければならなかつた。私はとりあへず、以前に親しくしてゐ
た或る友人を訪ねた。彼は木版師であつたので、私はその方面の仕事をさがしに行つたのだ。

「私は少し事情があつて、誰にも住所を告げないことにしてゐる。」
といつた。

「それはお氣の毒だね。そんなに隠れなければならぬほど脊負ひこんだのかい。何にしても出来る
だけの盡力はしよう。」

と彼はいつてくれた。彼は私の隠れる理由を借金のためだと合点したらしい。そして、いくらかの仕事をあたへてくれた。私は熱心に仕事をした。収入は少なかつたけれど、三人が食つてゆくだけのことはできた。

かくて、生活の方法が立つたところで、私と鞠子は、めい／＼の財産を出し合つた。鞠子は公債を賣つた金が二千圓以上三千圓ちかく残つてゐた。これに私の貯金を合せて四千圓以上の金が纏つた。私はこの少財産を銀行に預けた。それは、われ／＼が敵の動靜をさぐるために機密費として使ふのである。われ／＼は毎週の生活費を嚴格に豫定して、それは私の仕事からの収入をもつて支辨して、右の機密費には手を付けないことにした。

鞠子は家のなかの仕事を一人で切り廻はした。かの女は安全のために、質素な、むしろ見すばらしい衣物を着てゐたが、その袖をまくりあげると、瘦せ細つた兩腕の腕は、過去の悲痛を物がたつてゐた。とき／＼は熱い涙がほろ／＼と頬を傳はることもあつた。それでも、かの女は以前の精力をふるひ起して、大抵はにこ／＼しながら働いた。

「斧太さん、わたしの勇氣を疑はないで下さい。とき／＼涙が出るけれど、あれはわたしの弱點が泣くのですよ。本當のわたしぢやない。わたしはあくまでも遣りとげます。」

よく、こんなことをいつて、鞠子は自から勵ましてゐた。

「わたしは、かう見えても、水火の中へでも飛びこまうといふ勇氣がありますよ。いざとなれば、どんな冒険でもやつて見せます。わたしの勇氣がどんなものか、今にわかるでせう。」

こんなこともいつた。

十月の末頃には、われ／＼の生活はすつかり落ちついてゐた。われ／＼三人は、離れ小島に住んでゐる人間のやうに、外界との接觸から遠ざかつた。街々は相變らず雑沓してゐる。數萬の人が右往左往してゐる。が、それはわれ／＼の離れ島に濤打つ無限の大海原に過ぎなかつた。

私は閑さへあれば、將來の計畫に耽つた。権田原男爵並びに帆城伯爵に對して、どうしてわれ／＼を防禦したらいいかを考へた。

美智子は、過去の苦惱と恐怖のために、容貌が、ほとんど絶望的に變つてしまつた。ます／＼加奈子のそれに似て來た。美智子が龍若莊の令嬢であつた頃は、かの女と加奈子を並べて立たせたならば、誰も容易に兩女を識別することが出來たであらう。しかし、今はそれが出來ないやうにおもはれて來た。美智子が瘋癲病院から脱けだした翌くる日に、龍若莊の女中たちがかの女を識別することの出來なかつたのも決して無理はない。

私は美智子の氣を引きたてるために、繪の稽古をはじめた。かの女のために小さな繪の具画とスケッチブックを買つて來た。かうして龍峯莊時代の落ちついた氣分に立ちかへらせようとしたのだ。私は仕事の合間には、倫敦の鈍い光線と、倫敦の殺風景な部屋のなかで、かの女の稽古を見てやつた。かの女に寄り添うて、かの女のかよわい腕を執つて、その筆觸を助けた。

美智子は、一日一日と繪に興味を持ちだした。繪のことを考へたり、談したり、自分からすゝんで描いたりするやうになつた。すつかり失なひかけた生氣がやつとかの女にかへつて來た。

このよい變化を見て、私も鞠子もよろこんだ。天氣のいゝ日などは、とき／＼二人の間に美智子を挿んで、散歩に出かけた。近傍の靜かな街をぶらついた。われ／＼は例の機密費の貯金から二三十圓を引き出して、美智子のために特に葡萄酒や、甘い慈養になるやうな食料品を買ひとのへた。

晩にはカルタを取つたり、私があの本版師から借りて來た版畫の綴込帖を開けたりして、かの女を慰めた。かの女の嬉しがることは何でもやつた。かうして、次第々々に過去の悲惨な記憶を消しつゝしてゆけば、美智子の心もだん／＼平靜に歸するだらうといふ希望が輝やいて來た。

美智子の方はこれでいゝとして、私と鞠子は、これから少しく冒險な仕事に取りかゝらなければならぬ。

私はこの件について鞠子と相談した。何にしても法律に關係した問題だから、結局輕井氏の智恵を借りなければならぬが、その前にわれ／＼の手で出来るだけの材料を蒐集しなければならぬ。

そこで、私はまづ、美智子が瘋癲病院へ送られる前に、一泊したといふ間世夫人の家を訪問した。

そして美智子がこの家に泊つたときの模様をたづねた。但し私は、美智子とその後瘋癲病院へ送られて、今われ／＼と一しよにゐるといふ事實はかたく秘密にした。私はつとめて美智子のことを「死んだ權田原夫人」と呼びながら談話をすゝめた。

ところが、問世夫人の答へは、私が豫期したとほりであつた。美智子は倫敦へ行つたら必ず一泊するといふ手紙はよこしたけれど、美智子その人は寄り付かなかつたといふことだ。別に隠しだてをしてゐるやうな風でもなかつた。

次に、美智子が黒水莊から問世夫人に送つたといふ手紙を見せてもらつた。それは封筒から抜き出して、肩籠に入れてあつた。久しい次前に不用手紙として捨てたものであらう。

なつかしい問世さん。わたしは悲しい境遇に陥ちました。心配で胸が一杯です。わたしは明日の晩あなたのお家をお訪ねします。どうぞ一晩泊めて下さい。手紙では詳しいことは書けません。發見されるのを恐れます。明日の晩はきつとお家にゐて待つてゐて下さい。わたしはそのときに

あなたに千度も挨拶して、そしてすべての事情をお話しませう。

手紙はこれだけである。これだけでは、何の手がかりにもならない。

間世夫人の家から歸つて、私は鞠子に會見の結果を報告した。そして今度は、鞠子に頼んで、黒水莊の女中頭であつた御園夫人にあてて手紙を出してもらつた。(もちろん美智子の生存してゐる件は、この女に對しても絶対に秘密にした。) 鞠子は、「帆船伯爵の行動について、怪しいと思はれる節があつたならば、隠さずに詳しく教へて下さい。眞理の名において告げて下さい。」といふ意味の手紙をしたゝめて、投函した。

その返事待つ間に、私はセント・ジョンの森の貴堂ドクトルを訪問した。前きに輕井氏もこの人を訪ねて、いろ／＼取り調べた筈だが、なほ取り残した材料があるかもしれないと思つたからである。私はまづ死亡診断書の寫しを取り、それから遺骸の仕末をしたといふ吳田仙子にも會つた。伯爵家の料理番であつた小堀捨といふ女にも會つた。この女は伯爵夫人と折合はないために近頃伯爵家から暇を取つて、今は貴堂ドクトルの知人の家に間借りをしてゐるのであつた。これ等の人から、その當時の模様を詳しく聞き取つた。

いよいよ輕井氏に會はうといふ段取りになつた。鞠子は輕井氏に宛てて、私の名前を紹介して、服

部斧太が面談を願ひたいから、閑な日と閑な時間を知らせてくれといふ問ひ合せの手紙を出した。

私は、午前には美智子といつもの散歩をして、それからかの女が靜かに繪の稽古をするのを見たりした。やがて私が始かけると、かの女は不安さうに私の顔を下から覗いて、以前によくやつたやうに、卓子の上で繪筆をいぢくりながら、

「斧太さん、あなたはもう、わたしに愛想が盡きたでせう。わたしが厭になつたものだから、直ちに彼室へいらつしやるのでせう。わたしは早く癒りたい。「生懸命に快くなるやうに心がけませう。あなたは今でもわたしが氣に入つて下さいますか。こんなに蒼く、瘦せて、こんなに物覚えがわるくなつても？」

物の云ひ方でも、思想のいひ現はし方でも、まるで子供のやうであつた。しかし、私は新らしい希望がかの女の胸に芽ぐみはじめてゐるのを認めた。

「早く快くなるやうにして下さい——鞠子さんのためにも、私のためにも。」

「え、わたしも一生懸命ですわ。」とかの女は、繪筆を執りながら獨りごとをいつた。「お二人ともこんなに親切にして下さるんですもの。」

さういつて、また私の顔を見上げて、

「でも、早く歸つて頂戴。あなたがらつしやらないと、わたしは繪を描くのも氣乗がしないのよ。」
「直きに歸りますよ。早く歸つて、どれだけ出来てゐるか、見てあげませう。」

私の聲は、曇つた。氣を取り直して室外へ出た。ぐづくしてゐられなかつた。
戸口から鞠子に合圖をして、三階へ来てもらつた。

「私はこれから出かけますが、三四時間のうちには歸つて來ます。私の留守中はいつものやうに氣を付けて、誰が來ても部屋へ入れてはいけませんよ。だが、私の一番おそれてゐるのは……」

「エツ？ 何か變つたことでもありますか？ 聞かして下さい。わたしだつて、いざとなれば何んな危険でも冒します。」

「それは外でもないが、權田原男爵は、美智子さんが瘋癲病院を脱けだしたといふ知らせをうけ取つて、この倫敦へ入りこんでゐはしないかと思ふのです。男爵は、私が外國へ行く前にも、私を監視した人ですからね。私は男爵の顔を知らないけれど、男爵は私を知つてゐるにちがひない。それで、もしも男爵に見附かつたらといふ懸念があります。」

鞠子は私の肩に手をおいて、不安な沈黙で私の顔を見た。かの女はわれ／＼の上によりかゝつてゐる重大な危険を了解したらし。

「そんなに心配しなくてもいいです。この廣い倫敦で、そんなに早く男爵に發見されて堪るものですか。だが、要心はしてゐなければならぬ。もしも私が男爵の子分に捕まつて、今夜つて來ないとしても、あわてゝはいけませんよ。その場合には、美智子さんの氣の安まるやうにしてゐて下さい。私は間隙に躡けられてゐるといふことを少しでも察したときは、この隠れ家を發見させないために、わざと他の方面へ行きます。だから、歸りが遅くても心配しないで下さい。」

「大丈夫よ、斧太さん。」と鞠子はいつた。「わたしはそんな弱い女ではありません。だが、あなたも氣を付けて下さい。」

さういつて、かたい握手を交した。
私は街へ出た——法律家輕井氏を訪ねるために。

五、大 難 關

私はやがて「岩藻—輕井法律事務所」の前に立つた。途中は何事も起らなかつた。
名刺を出したあとで、ハツと思つた。

輕井氏は美智子の法律顧問をしてゐた人で、美智子に對して深い好意をもつてゐる人である。鞠子

が前きに黒水荘から手紙を出してこの人に相談をかけた。その手紙をひそかに讀んだのは帆城伯爵であつた。二度目の手紙は伯爵夫人が横取りをした。してみると、今回も敵の第一に見張るべき家は、このチャンサリー街の「岩藻—輕井法律事務所」にちがひないのだ。

私は公然と此家へ訪ねて來るなんて、何といふ迂闊な眞似をしたのだらう。前もつて打合せておいて、秘密な場所で見ればよかつた。しかし、もう取りかへしが付かない。

間もなく輕井氏の部屋に案内された。彼は、蒼白い顔で、瘦せて、靜かな人だけれど、聲なども低けれど、いかにも意思の強さうな、注意ぶかい眼付で、そして少しも高ぶらない人であつた。

「用談に入る前に、私から少し申しあげておきたいことがあります。それがために幾らか時間をつぶすことになりませうが、どうぞお許し下さい。」

と私はいつた。

「どうぞ。私の時間は鞠子さんに捧げてあります。」と輕井氏は答へた。「仲間の岩藻君からも特別の依頼があつて、私がお引きうけしたやうな次第ですから……鞠子さんの利害に關することならば、何なりと御遠慮なく仰しやつて下さい。」

「岩藻さんは今、英吉利におゐるのですか？」

「いや、あの人は獨逸へ行つて、親戚の許にをります。健康は大分よくなつたさうですが、いつ此國へ歸るかといふことは云つて來ません。」

こんな冒頭話をしてゐる間に、彼は自分の前の書類をさがして、その中から一通の手紙を取り出した。多分私に讀ませるのだらうとおもつたら、さうではなくて、彼はその手紙を卓子に置いて、黙つて私の話に耳をかたむけた。

私は早速、今までに起つた事件のすべての經過を物がたつた。

輕井氏は徹頭徹尾法律で頭を鍊へた人だけれど、私の語りいだした事件があまりに奇怪なので、驚ろきのあまり、私の言葉の終るのを待ちかねて、幾度も質問を挿んだ。

私はすつかり語り終つてから、一つの重大な質問を發した。

「これについて、あなたの御意見を聞かして下さい、輕井さん。」

と、私はいつた。

彼は要心ぶかくじつと考へこんでゐたが、

「私は自分の意見を述べる前に、二つ三つお訊ねしたいことがある。」

さういつて、彼は幾つかの辛辣な質問を發した。それによつてみると、彼は私をも幻想に欺かれて

動いてゐる男だと解釋してゐるやうにも思はれる。

「私が眞實を語つてゐるといふことを御信用下さらないのですか、輕井さん。」
と私はなじつた。

「あなたは御自分の確信を語られたといふ點では、もちろん眞實でせう。」と彼は答へた。「私は鞠子さんを尊敬してゐる者ですから、鞠子さんやあなたの云はれることは、何でも承まはりますが、しかし、あなたはまだ事件の裏面を十分に突き止めてをられない。私は法律家ですから、法律上の見地から解釋を下したいのです。」

「それは御尤もです。どうぞその點を的確に仰しやつて下さる。」

「そして明らかに申しませう。権田原夫人が死亡したといふ事實は、表面上明白で、何等疑ふべき餘地がない。権田原夫人が伯爵家へ来て、病氣で、死亡したといふことは、あの女の伯母である伯爵夫人が證言してゐる。それが自然の死であつたといふことについては、醫師の證明がある。またリメリツチ村において葬儀が営なまれ、墓銘までも立派に刻されたのです。」

この完成された事實を、あなたが根柢から顛覆しようとするのです。しからば、あなたに何れだけの根柢があるか。死んで埋葬された人が権田原夫人でないといふことを、法律上で證明するだけの有

力な證據がありますか？

今のあなたのお話では、鞠子さんが或る私立の癡癡病院に行つて、一人の婦人患者に會つた。それは香照加奈子といふ名前で收容された患者で、たま／＼容貌が権田原夫人に似てゐる。しかも、この患者を病院へ連れて行つた伯爵は笛森貞亮氏に向つて、この患者は人格が轉換して権田原夫人を眞似ることに深い興味を有つてゐる故、他日誤解なきやうにと注意してゐる。患者自身もしば／＼自分

は権田原夫人であることを宣言したけれど、もちろん病院では誰も信する者がない。

これが事實の全部です。この事實をどうして覆へすことが出来ませう。
鞠子さんが患者を権田原夫人と認められたといふことですが、しからば鞠子さんは、院長にそのことを申しいで、法律上正常な手段で患者を受けとつたかといふに、さうではない。鞠子さんは看護婦に賄賂をやつて、ひそかに患者を連れ出したのです。

かくの如く疑がはしい方法で逃亡した患者を龍若莊へ連れ歸つたところが、笛森氏はこれを自分の姪として承認することを拒んだ。女中たちもそれが権田原夫人であるといふことは認めなかつた。そこで、かの女はまたひそかに倫敦へ連れて來られた。あなたはかの女を認めてゐる。しかし、あなたはかの女の親戚ではない。久しく龍若莊と親密にした間柄でもない。

かの女は倫敦で一泊したといふが、その泊つたといふ家では、さういふ事實を否定してゐる。

さうして、あなたの言はれるには、かの女の頭が大へん衰弱してゐるから、外へ連れ出して、かの女自身に抗辯させることが出来ないといふではありませんか。

そこで私は簡単に申しますが、假りにこの事件を法廷に訴へるとすれば、あなたはどんな證據を持ち出さうとするのですか？」

私はじつと考へこんだ。答へる前に自分の思想を纏めなければならなかつた。

美智子や鞠子に關係した物がたりを、他人の見解で話されたのを聞くことは、これが最初であつた。はじめて私は、われ／＼の企圖に非常なる障礙が横たはつてゐることを發見した。

「この事實を今あなたが仰しやつたやうに見るならば、」と私はいつた。「われ／＼に不利であることは明らかですが……」

「しかし、この事實を打消すことは出来ない。」と輕井氏は言葉を挿んだ。「要するに、英吉利の判決例では、裁判官は、裏面の長たらしい事情よりは、表面の簡潔な事實を重く視ます。法廷では、いかに雄辯をふるつて事情を陳述しても、一の事實には勝てない。例へば權田原夫人——私もあなた方に倣つてその患者を權田原夫人と呼びます——が、或る家に泊つたと云ひ張つても、實際泊つたのでな

いといふ反證が直ちに擧げられる。その場合、あなたはかの女の精神状態を述べて、形而上の結論を引き出さうとされるでせう。私はその結論を誤謬だとは言はないが、裁判官は、常に、さういふ陳述

よりも一の事實を重要視するといふことを記憶して下さい。」

「分かりました。しかし、われ／＼は忍耐と努力によつて、もつと有力な證據を發見できない筈がありません。その經費として貯へた金も四千圓ほど持つてをりますから……」

輕井氏は憐れむやうな眼付で私を見た。さうして首を横に振つた。

「服部さん、あなたの見解で問題を熟考して下さい。」と彼はいつた。「權田原男爵や帆城伯爵に對するあなたのこれまでの見方が正しいかどうかも考へて下さい。新たに證據を得るのには容易ならぬ困難があるといふことを覺悟しなければなりません。訴訟になつてからも、いろ／＼な障礙が起るでせう。相手はすべての點において、組織的に反對して来る。われ／＼は數千圓どころか、數萬圓も費はなければなりません。そして、その結果は、多分われ／＼に不利でせう。何しろ、類似したものゝ識別——とりわけ、それが人間の場合であると、實に至難の問題ですからね。私の考へでは、どうも成功はむづかしいとおもふ。假りにリメリツチ村の墓地に埋葬された婦人が權田原夫人でなくて、別人であつたとしても、それが生前に權田原夫人に似てゐて、誰が見ても識別が出来ないとすればそれ

つきりのことで、これは到底事件にはならないでせう。」

いや、そんなことはない。私は決心した。私はこれを飽くまでも事件にしなければならぬ。さういふ決心の下に、私は今までの方針を變へて、新たに出發する考へを起した。

「それでは、識別といふことの外に、もつと有力な證據を探し出す方法はないものでせうか？」と私は質問した。

「それがむづかしいところです。この事件では、最も單純で最も有力な證據といふものは月日ですが、今のあなたの方の立場では、どうもそれが得られさうもない。權田原夫人が倫敦へ旅行した月日と貴堂ドクトルの認めた死亡診斷書の日附の間に矛盾があつて、それを發見することが出来るとすれば、おのづから別問題です。もしもそれが出来るとすれば、私もお力になつて大にやりませう。」

「今のうちに取りかゝつたら、その月日を見附けだすことが出来るかも知れません。」

「それが見附かつたら、事件になりますよ。それについて何か巧い手段があるなら聽かして下さい。私も自分の意見を述べませう。」

私は考へた。その當時鞠子が病氣で日記の筆を執らなかつた。誰も日記をつけたものがない。黒水莊の女中頭御園夫人も、月日は忘れてしまつてゐる。美智子も月日には注意しなかつた。鞠子はもち

ろん覺えがない。して見れば、當時の月日を正確に記憶してゐるのは、權田原男爵と帆城伯爵の外にはないわけだ。

「さア、その手段は今急に思ひうかびません。」と私は答へた。「なぜならば、權田原男爵と帆城伯爵の外には、正確に月日を記憶してゐる人間はないんですから。」

輕井氏はその緊張した顔をゆるめて、はじめてにつこりと笑つた。

「しかし、服部さん。あなたの立場としては、この二人の紳士か 助けを求めるといふことは不可能なことですね。彼等が陰險な手段であれだけの大金を騙取したものだとなれば、眞實を告白する筈がない。」

「いや、きつと白状させてみせます。」

「誰が白状させるのです？」

「私が！」

われ／＼は起ちあがつた。輕井氏は、今までにない興味を感じたやうに、私の顔に見入つた。彼は私の向ふ見事に驚いた様子であつた。

「その御決心はたのもしい。それほど御決心をなさるからには、あなた一個人としての十分の動機が

おありでせうから、私は何も申しません。他日、これが法律上の事件となつたときは、私は出来るだけ御盡力します。しかし念のために御注意しておきますが、たとひ権田原夫人の生存してゐるといふ事實が明白になつたとしても、夫人の失はれた財産を取りかへすといふことは困難だらうとおもひます。外國人である帆船伯爵は、裁判の開かれる前に英吉利を逃げだすでせう。権田原男爵は莫大な借金に苦しんでゐるから、その頃までには、自分の得た金は大抵債權者の手に入つてゐるでせう。あなたも勿論御承知でせうが、あの財産といふものは……」



といひかけたとき、私は相手の言葉を遮ぎつた。

「権田原夫人の財産の経緯について論ずることは止めませう。私はそれについて何も知らなかつたし、今も何も知りません。たゞ、夫人が財産を失つたといふことを知つてゐるだけです。私がこの問題に關係はるについては、私一箇の動機があります。それは御察しの通りです。しかし、私の動機は財産問題とは無關係です。」

輕井氏は口を挿んで、何か説明しようとした。が、私は自分の公明な心事を疑はれるのが無念で、少し熱して來た。相手が口を開かない前に、すぐにあとをつづけた。

「私が権田原夫人のために盡すといふことにおいては、金錢上の目的は勿論、個人の利益といふやう

な觀念は毫頭ありません。かの女は自分の生れた家から逐ひだされました。死んだものとして、虚偽の墓銘を母の墓に刻まれました。さうして、それに責任ある二人の男が、巧みに法網をくゞつてをります。私は、あの虚偽の葬式に列なつた人々の眼の前で、かの女が再び龍老莊に迎へられるのを見なければなりません。さうして、二人の男に思ひ知らせるまで、私は奮闘します。神様がお助け下さるならば、私は必ず成功してお目にかけます。」

輕井氏は何も云はずに、自分の卓子に戻つた。私がいよいよ幻想に囚はれて、理性を失つてゐるから、これはもう何を云つたつても駄目だとあきらめた風であつた。

「お互に意見の相異は致し方がありません。」と私はいつた。「後でおのづから判明する時機があるでせう。今は、私の申しあげたことを熱心にお聴き取り下さつた御好意を感謝します。」

一禮して戸口の方へ行きかけると、輕井氏は私を呼びもどして、一通の手紙を示した。それは、この會見のはじめに、彼が書類挿みから引き出して、卓子の上においたものであつた。

「この手紙は郵便で四五日前に届いたので。」と輕井氏はいつた。「失禮ですが、これを鞠子さんにお渡しして下さいませんか。そして鞠子さんに仰しやつて下さい——私は遺憾ながら鞠子さんを直接

お助けすることは出来ない。自分の意見は、お求めがあれば申しあげてもよろしいが、多分鞠子さんは、あなたが喜ばれないよりもつと以上に、私の意見を喜ばれないでせう。」

手紙の宛名は「岩藻―輕井法律事務所にて春越鞠子殿」としてあつた。

「権田原男爵はまだ巴里にゐるでせうか。あなたは御存じありませんか？」
と、私は最後の問をかけた。

「男爵は倫敦に来てゐるさうです。昨日男爵の狀師に會つたら、そんなことをいつてゐました。」
私はその答へを聞いて、すぐに輕井氏に暇を告げた。

六、いやな手紙

事務所を出ると、傍目も振らずに、ホルボーンの北の方の人通りのない街へ行つてから、突然に背後をふりかへつた。敵の見張り人が蹶けて来たかどうかを試みるためである。

街角のところに、二人の男が立ち談しをしてゐた。私は早足で彼等の方へ戻つて行つた。すると、一人は立ちどまり、一人は動き出した。行き過ぎるときに、ちらとその一人を見たが、それはたしかに、私が本國を去る前にも私を監視してゐた男であつた。

いきなり喧嘩を吹きかけて、撲り伏してやらうかともおもつた。が、今の私はそんな無謀な眞似をしてゐられる體ではなかつた。私の方から亂暴でも仕掛けようものなら、それこそ男爵に武器を與へるのだ。狡計に對しては、狡計をもつて裏を搔くに限る、とおもひかへした。もう一人の男は、初めて見る男であつたが、私はこの男の顔の特徴をしかと捉まへておいた。

私は急に西の方へ向つて歩き出した。丁度、二輪の輕快な辻馬車にでつくわしたので、私は素早く飛び乗つて、

「ハイド公園へ行け。大急ぎだ！」

敵は馬車について少しばかり駈け出したけれど、他に辻馬車がなかつたので、かれ等は私の後をつけることができなかった。私はハイド公園で馬車を乗りすてた。もちろん敵の姿が見えない。私は公園を突切つて、いよ／＼見張つてゐる者のないのを確かめてから、家の方へ急いだ。隠れ家へ歸りついたのは、日の暮れ方であつた。

鞠子は心配して、二階の居間につくねんと待つてゐた。美智子は、描きあげた繪を私に見てもらふために待つてゐたけれど、今しがた、鞠子が無理にすゝめて隣りの寢部屋に寝ませたといふことであつた。

美智子の描いた、あはれな、力ないスケッチ——ちよつとした物を描いたのだけれど、聯想においては私を感動させるものであつた——は、大切さうに二冊の本で押へて、卓子の上におかれて、その傍に、たつた一本の蠟燭がぼやけた光りを投げてゐた。

私は繪を見る風をして、卓子に屈んだ。鞠子も頭を寄せた。われ／＼は密談をはじめた。寢部屋を仕切つた戸が薄いので、美智子のかすかな寢息が聞える。われ／＼はかの女の安眠を亂すまいとしてひそ／＼と語つた。

鞠子は落ちついて、私と輕井氏との會見の次第を聞いてゐたが、權田原男爵が倫敦へ歸つたこと、私が二人の男に躡けられたことを聞いたときは、さすがに顔色をかへた。

「斧太さん、あなたは。厭な知らせ、一番厭な知らせを持つていらしたのね。他にお話しはありませか。」

「や、すつかり忘れてゐた。手紙を頼まれて來ました。」

さういつて、輕井氏から頼まれた手紙を鞠子にわたした。

鞠子は一目見て、その筆蹟をみとめた。

「差出し人がわかりますか？」

「わかりますとも、帆城伯爵です。」

かの女は封を切つて、手紙を読みだしたが、顔が眞赤になつて、眼は怒りに輝いた。

「まア、読んでごらん下さい。」

それは次のやうな手紙であつた。

拜啓 私の高潔なる尊敬の念——私も潔白であるし、あなたも高潔である——に驅られて、この手紙を認めます。あなたが御自分の平安を破られないやうに御忠告します。

「びく／＼したまふな」と御忠告します。あなたは御自分の立派な御分別をお用ひ下さい。そして、輕舉妄動を慎んで、隠退のうちにお暮し下さい。敬愛すべき御婦人よ。危険なる發表は一切お止め下さい。隠遁に限りません。隠遁は壯大です。家郷の安息は永久に新鮮です——それを楽しんでゐて下さい。人生の暴風雨も隠遁の谷には害を加へません。どうぞ、隠遁の谷に安住して下さい。

私の忠告をお用ひ下さい。さうすれば、あなたは決してびく／＼することは無い。さうすれば、いかなる災害もあなたの感受性を損ふ憂へはありません。私は自分の感受性を尊重すると同様にあなたの感受性をも尊重します。あなたが隠れてさへ居れば、他人はあなたを妨害しない。あな